

スペイン語運用者のためのレビューサイトにおける センチメント分析器導入の検討

所属：東京外国語大学言語文化学部言語文化学科

コース：言語・情報

地域言語 A：スペイン語

配属地域：西南ヨーロッパ

学籍番号：*****

氏名：佐藤泰平

指導教員：川上茂信 教授

提出日：2019 年 1 月 8 日

概要

本稿では、世界的規模での高度情報社会において、我々が膨大な量の情報を扱う必要に迫られている問題を提起し、その緩和策として新しい ICT の研究開発・導入の必要性を述べたうえで、スペイン語運用者向けの映画レビューサイトに着目してセンチメント分析器の導入を検討した。センチメント分析器とは、ある文書における全ての語に対してネガティブ、ポジティブ、ニュートラルの3つのタグを付与し、執筆者の感情を分析するシステムである。この分析器を用いてレビュー内容を分析し、その分析結果のスコアをもとに客観的に付与した星の数と、レビュー投稿者自身が付与した星の数とを比較した。そこでは、平均値の差に有意差が見られたことから、レビューサイトへのセンチメント分析器の導入が期待できると結論づけた。

目次

はじめに.....	- 1 -
第1章 自然言語処理とは何か	
第1節 自然言語と人工言語.....	- 2 -
第2節 自然言語処理の概要と歴史.....	- 2 -
第3節 自然言語処理で何ができるか	
第1項 機械翻訳.....	- 3 -
第2項 形態素解析を用いた応用.....	- 3 -
第2章 情報活用における問題	
第1節 情報活用における問題と緩和策.....	- 5 -
第2節 レビューサイトへのセンチメント分析器の導入	
第1項 センチメント分析器導入による利点と欠点.....	- 5 -
第2項 分析の対象とするレビューサイトとレビュー内容.....	- 6 -
第3章 テキストデータの作成とセンチメント分析器	
第1節 テキストデータの作成.....	- 7 -
第2節 センチメント分析器.....	- 7 -
第4章 2種類の星の数の比較	
第1節 センチメント分析結果を用いた星の付与.....	- 8 -
第2節 2種類の星の数の比較.....	- 8 -
第5章 結論.....	- 10 -
おわりに.....	- 11 -
参考文献.....	- 12 -
付録 A Python での開発のための環境構築の手引き.....	- 13 -
付録 B 星付与用プログラム startagging.py.....	- 15 -
付録 C 2種類の星の数とセンチメント分析結果.....	- 17 -
付録 D レビューのテキストデータ.....	- 25 -

はじめに

センチメント分析器は、近年、企業のアンケート調査や、政治的調査などの結果を分析し、その結果を組織内部に発信する形で主に利用されているが、これに対し、顧客などの組織外部に向けてその分析結果自体、または加工を加えた情報を発信する形では、利用される機会は少ない。世界的規模での高度情報社会の時代を迎え、現代では情報活用においては、我々は膨大な量の情報を扱う必要に迫られるようになった。この問題を緩和するためには、人々が情報により早くアクセスし、情報の取捨選択を円滑にできるよう、さらなる技術の研究開発・導入が必要である。そこで、本稿では、スペイン語運用者向けの映画レビューサイトに着目し、自然言語処理分野の技術であるセンチメント分析器の導入を検討する。

まず、第1章では、本稿において初めて自然言語処理分野に関する論文を読む者でも抵抗なく本稿を読み進められるよう、参考文献や身近な例をあげながら自然言語処理に関して説明する。第2章では、本稿における問題提起として、高度情報社会における問題とその緩和策を提示したうえで、本稿で着目したスペイン語運用者向けのレビューサイトにおけるセンチメント分析器の導入の検討方法に関して述べる。第3章では、検討のための調査準備として、レビューサイトのレビュー内容のテキストデータ化と、本稿においてレビュー内容の分析に用いるセンチメント分析器に関して述べる。第4章では、レビュー内容のセンチメント分析結果のスコアから星を新たに付与し、レビュー投稿者が独自の基準で付与した星の数と比較する。第5章では、第4章で2種類の星の数の平均値の差において有意差が見られたことを根拠とし、本稿における結論を述べる。また、本稿において作成して用いたプログラムはPythonで執筆している。したがって、Pythonでの開発未経験者向けにPythonでの開発のための環境構築の手引きを付録Aとして本稿の末尾に添える。加えて、第4章においてレビュー内容のセンチメント分析結果のスコアから新たに星を付与するために用意したプログラムstartagging.pyを付録Bとして、レビュー内容のセンチメント分析結果と2種類の星の数を付録Cとして、センチメント分析の対象としたCocoのレビュー内容のテキストデータを付録Dとしてそれぞれ末尾に添える。

第1章 自然言語処理とは何か

第1節 自然言語と人工言語

自然言語とは、我々人間が日常で思考と意思疎通をはかるために運用している日本語や中国語、英語といった自然発生的な言語のことをさす。これに対して、ある目的の実現のために人工的に作られた言語を人工言語とよび、主にプログラミング言語などのコンピュータ言語がこれに当てはまる。コンピュータ言語は、ハードウェア記述言語や機械語などの、全て、もしくはほとんどコンピュータのみが可読な形式言語と、人間がコンピュータに指令を与えるために用いる、コンピュータと人間の双方が可読なプログラミング言語に分かれ、プログラミング言語の代表的なものとしては Java、C、Python などがある。また、エスペラント¹⁾ など、人間同士が意思疎通をはかるために作られたとしても、意図的に作られた言語は一般的な言語学の分野においては全て人工言語として扱われる。しかし、自然言語処理の分野では、人間同士が意思疎通をはかるために作られた人工的な言語も処理の対象としている。

第2節 自然言語処理の概要と歴史

自然言語処理とは、我々人間が日常で意思疎通のために運用する言語をコンピュータ上で扱う技術である。また、人間の言語運用において発生した言語現象をコンピュータで処理する学問分野、研究開発分野でもある。コンピュータが1940年代に生まれ²⁾、米国内で機械翻訳に対する関心が高まり、これをきっかけに自然言語処理分野における研究開発がはじめられた。コンピュータは人間ではないため、我々が運用する言語と、我々から発生する「ことば」をコンピュータに理解させることには難しさがある。奥村（2010）によれば、自然言語処理の研究が始まった当初から今日まで、コンピュータに「ことば」を理解させるという立場に立った人工知能的研究、つまり、コンピュータ上に知的な能力をもつものを実現したいという動機づけで研究されてきたのである。自然言語処理のより詳しい

¹⁾ ポーランドの眼科医ザメンホフ（L. L. Zamenhof）がヨーロッパ共通語への関心から考案し、1887年に発表した人工の国際語。ロマンス系の語彙を根幹とし、5個の母音、23個の子音を使用する。

²⁾ 黒橋（2015）によれば、1946年にペンシルバニア大学で作られた ENIAC が最初のコンピュータといわれている。

概要と歴史は、前述した奥村（2010）と黒橋（2015）のほかに、奥野他（2016）がある。

第3節 自然言語処理で何ができるか

第1項 機械翻訳

本節では、自然言語処理の応用例をいくつか概観する。前節で述べたように、伝統的に研究開発が行われてきた機械翻訳が自然言語処理の応用の代表例である。有名なものは無料でワールドワイドウェブ上、またはスマートフォンアプリケーション上で使える Google 翻訳や、有料ソフトウェアであれば、富士通ミドルウェアが販売している ATLAS などがある。数言語への対応で始まった Google 翻訳は、Google 翻訳チーム（2016）によれば、この10年で対応言語を103ヶ国語に拡大し、当初、統計モデルを使用した統計的な機械翻訳の先駆けとして登場した。ディープニューラルネットとよばれる機械学習のアルゴリズムを用いた機械翻訳システムの導入により、近年ますます翻訳精度が向上している。

第2項 形態素解析を用いた応用

形態素解析とは、意味を持つ最小の言語単位である形態素³⁾を対象とした解析プロセスのことである。

形態素解析は、大きく以下の三つの処理に分けることができる。

1) 単語分割 (word segmentation)

入力された分を並びに分解する。

2) 単語への品詞付与 (part-of-speech tagging)

単語の品詞を決定する。

3) 単語の原形の復元 (stemming, lemmatization)

語形変化、活用変化している単語を元の単語に戻す。

³⁾ 単独で語として現れるものを自由形態素または内容形態素といい、「お花」の「お-」のように、単独では意味がわからないため用いられずに必ず他の形態素とともに現れるものを拘束形態素または束縛形態素という。

英語では、文は空白で区切られた単語の並びとなっている（「分かち書き」と呼ばれる）が、日本語、中国語、タイ語のように、単語を分かち書きしない言語では、入力文を単語列に分割する処理が必要になる。

一方、例えば、'like' が名詞、動詞、前置詞などとして使えるように、英語には多品詞の単語が多く、単語への品詞付与は不可欠な処理といえる。語形変化する言語、例えば、英語では

flies → fly + s

のように、また、日本語のように、活用変化する言語では、

聞いた→聞く＋た

のように、元はどのような単語から構成されているのかを知ることには意味がある。

（奥村 2016：22-23）

形態素解析は自然言語処理において最も基本的な技術であり、これを他の技術と組み合わせることで応用ができる。例えば、言語計算処理と組み合わせることで、ある1つの文書、または文書集合における語の頻度を集計することができる。頻度を集計するためには、形態素解析で原形に復元された語の頻度を集計すれば良い。この技術を用いてさらに応用した具体的な例としては、Amazon のカスタマーレビューの「気になるトピックのレビューを読もう」の欄に表示されているキーワードである。

第2章 情報活用における問題

第1節 情報活用における問題と緩和策

情報通信技術、すなわち ICT (Information and Communication Technology) の発展により、我々は世界的規模での高度情報社会の中で膨大な量の情報を扱う必要に迫られるようになってきた。

近年ではインターネット技術に依拠した SNS の発達によって、ブログ、Twitter、LINE などによるコミュニケーションも活発となり、情報の伝わり方も以前のようなマスコミュニケーション（新聞およびテレビといった媒体）に依存する割合が低下してきている。このことは、人々が議論する場が紙上あるいはテレビ上にとどまらず、ネット上に展開されることを意味している。（山口 2017：250）

ネット上に展開されている膨大な量の情報へより早くアクセスすることを可能とし、なおかつ情報の取捨選択を円滑にする技術を新たに開発して導入することでこの問題は緩和されうる。そこで、私はレビューサイトに着目し、その利用者が興味のあるレビュー内容により早く到達できるよう、レビューサイトへのセンチメント分析器導入の可能性を検討することにした。

第2節 レビューサイトへのセンチメント分析器の導入

第1項 センチメント分析器導入による利点と欠点

レビューサイトにセンチメント分析器を導入することの利点は、投稿者が付与した星の数が、投稿者独自の基準によって付与されるという問題を、レビュー内容のセンチメントを分析して星を新たに付与し、レビューサイトの利用者がその客観的な星の数でソートされたレビューの一覧からレビュー内容へアクセスできるようにすることで緩和できるということである。しかし、分析結果から提示した星の数と投稿者自身が付与した従来の星の数とを共存させるとなると、それだけで星の数というカテゴリに属する情報量が2倍になってしまう。星の数というカテゴリからレビュー内容へアクセスを試みるとき、投稿者が付与した星の数でソートされた状態からアクセスするか、それともセンチメント分析結果をもとに付与された星の数でソートされた状態からアクセスするかという2つの選択肢ができることで、結果として利用者の選択回数が増えてしまうことは欠点である。

第2項 分析の対象とするレビューサイトとレビュー内容

本稿で分析に使用するレビューサイトは FilmAffinity⁴⁾ というスペイン語運用者向けの映画レビューサイトである。レビュー投稿者が映画を 10 段階で評価し、レビューを書き込むことができる。また、分析を行う対象は、2017 年に公開された「リメンバー・ミー」（スペイン語でのタイトルは *Coco*）のレビューとする。

⁴⁾ <https://www.filmaffinity.com/es/main.html>

第3章 テキストデータの作成とセンチメント分析器

第1節 テキストデータの作成

センチメント分析器でレビュー内容を分析するためには、レビュー内容をテキストデータにする必要がある。レビュー1つに対して1つのテキストデータを作成する。また、FilmAffinity は、映画の本編の内容、いわゆる「ネタバレ」をレビューに書き込む際、レビュー投稿者は「ネタバレ」を含む部分を非表示の設定にしてレビュー内に含めることができる。非表示にされた「ネタバレ」を含んだレビューに関しては、デフォルトで表示されている部分だけを、つまり「ネタバレ」を含まない部分だけをテキストデータにした。

第2節 センチメント分析器

センチメント分析器は、近年、企業のアンケート調査や、政治的調査などの結果を分析し、その結果を組織内部に発信する形で主に利用されているが、これに対し、顧客などの組織外部に向けてその分析結果自体、または加工を加えた情報を発信する形では、利用される機会は少ない。伝統的なセンチメント分析器のシステムは、ある文書を構成する全ての語にポジティブ (+1)、ネガティブ (-1)、ニュートラル (0) のタグをそれぞれ付与することで、その文書の執筆者の感情を $-1 \leq s \leq 1$ で表すことができる。また、付与するタグを決定するためには、その言語における「感情辞書」と呼ばれるものが必要となる。この感情辞書の中身がセンチメント分析の精度に大きく関わる。本稿で分析に用いるセンチメント分析器は、Google Cloud Platform の Cloud Natural Language API⁵⁾ である。Google Natural Language API を用いる理由は、スペイン語にも対応していることと、その精度が比較的高いことの2点である。

⁵⁾ <https://cloud.google.com/natural-language/?hl=es>

第4章 2種類の星の数の比較

第1節 センチメント分析結果を用いた星の付与

センチメント分析結果のスコアから、星を新たに付与するためのプログラムである `startagging.py` を用意して実行する。センチメント分析結果のスコアが $-1.0 \leq s < -0.8$ の場合は「星1」を、 $-0.8 \leq s < -0.6$ の場合は「星2」を、 $-0.6 \leq s < -0.4$ の場合は「星3」を、 $-0.4 \leq s < -0.2$ の場合は「星4」を、 $-0.2 \leq s < 0.0$ の場合は「星5」を、 $0.0 \leq s < 0.2$ の場合は「星6」を、 $0.2 \leq s < 0.4$ の場合は「星7」を、 $0.4 \leq s < 0.6$ の場合は「星8」を、 $0.6 \leq s < 0.8$ の場合は「星9」を、 $0.8 \leq s \leq 1.0$ の場合は「星10」をそれぞれ付与した。「星10」だけ範囲をわずかに広めに設定した理由は、レビュー投稿者本人が付与した星が「10」であるレビューのセンチメント分析結果を一通り眺めると、高いスコアを取れていないレビューが大変多く見受けられたからである。ここで用いたプログラム `startagging.py` は、本稿の末尾に付録Bとして添えておく。

第2節 2種類の星の数の比較

センチメント分析結果のスコア、ならびに分析結果をもとに新たに付与した星の数と、レビュー投稿者自身が付与した星の数は、本稿の末尾に付録Cとして添えてある。レビュー投稿者による星の数の平均値は 8.46 ($SD=1.52$) であり、センチメントのスコアによる星の数の平均値は 7.74 ($SD=1.26$) だった。

2種類の星の数の平均値の差が統計的に有意かを確かめるために、有意水準5%と1%で両側検定の t 検定を行ったところ、 $t(440)=5.38$ 、 $p=.0000001$ であり、帰無仮説 H_0 は棄却されて2種類の星の数の平均値の差において有意差が見られた。

表1 有意水準5%と1%における t 検定結果

	有意水準5%		有意水準1%	
	レビュー投稿者	感情分析	レビュー投稿者	感情分析
平均	8.46	7.74	8.46	7.74
分散	2.32	1.58	2.32	1.58
観測数	221	221	221	221
プールされた分散	1.95		1.95	
仮説平均との差異	0		0	
自由度	440		440	
t	5.38		5.38	
$P(T \leq t)$ 片側	0.00000006		0.00000006	
t 臨界値 片側	1.65		2.33	
$P(T \leq t)$ 両側	0.0000001		0.0000001	
t 臨界値 両側	1.97		2.59	

第5章 結論

投稿者が付与した星の数と、センチメント分析結果のスコアから新たに付与された星の数を比較した結果、平均値の差に有意差があることがわかった。レビュー内容のセンチメント分析結果のスコアから客観的に付与された星の数でソートされたレビューの一覧からレビュー内容にアクセスする方法をより好むユーザーにとっては価値が生まれる可能性が高い。したがって、レビューサイトへのセンチメント分析器の導入は期待できると結論づけた。

おわりに

本稿の執筆にあたり、指導していただいた東京外国語大学大学院総合国際学研究院の川上茂信教授、ならびに講義内で本稿執筆のインスピレーションを与えてくださった東京外国語大学講師・上智大学外国語学部イスパニア語学科の西村君代教授に厚くお礼を申し上げます。本稿が先生方と読者にとって有益なものとなれば幸いです。

参考文献

- Google 翻訳チーム (2016), 「Google Japan Blog –Google 翻訳が進化しました。–」, [online]
<https://japan.googleblog.com/2016/11/google.html> (参照 2019-1-7) .
- Melissa Serrano (2017) , *Bilingual Sentiment Analysis of Spanglish Tweets*, [online]
http://fau.digital.flvc.org/islandora/object/fau%3A34589/datastream/OBJ/view/Bilingual_Sentiment_Analysis_of_Spanglish_Tweets.pdf (参照 2019-1-7) .
- Steven Bird・Ewan Klein・Edward Loper (2010) , 『入門 自然言語処理』(萩原正人・中山敬広・水野貴明訳) , オライリー・ジャパン.
- 浅尾仁彦・李在鎬 (2013) , 『言語研究のためのプログラミング入門 –Python を活用したテキスト処理–』, 開拓社.
- 奥野陽・Graham Neubig・萩原正人 (2016) , 『自然言語処理の基本と技術』(小町守監修) , 翔泳社.
- 奥村学 (2010) , 『自然言語処理の基礎』, コロナ社.
- 黒橋禎夫 (2015) , 『自然言語処理』, 放送大学教育振興会.
- 縄田和満 (2007) , 『Excel による統計入門 Excel 2007 対応版』, 朝倉書店.
- 山内光哉 (1998) , 『心理・教育のための統計法 第2版』, サイエンス社.
- 山口和紀編 (2017) , 『情報 第2版』, 東京大学出版会.

付録 A Python での開発のための環境構築の手引き

第 1 章 Python のウェブサイトとバージョン

Python というプログラミング言語は、Python のウェブサイト (<https://www.python.org/>) よりダウンロードし、フリーソフトウェアとして使用できる。本稿執筆時点 (2019 年) では、バージョン 2 系統とバージョン 3 系統の 2 つが存在するが、2020 年 1 月 1 日をもってバージョン 2 系統のサポートが終了し、バージョン 3 系統に完全移行される予定である。したがって、バージョン 3 で始まる最新版をインストールすれば良いだろう。

第2章 Python のインストール方法

第1節 Windows におけるインストール方法

Windows ユーザーは、Windows 向けの Python ダウンロードページ¹⁾ より、インストール先の PC の CPU ビット数に一致するものを選択してインストールする。Windows10 では、「設定」から「システム」、「バージョン情報」へと進み、「システムの種類」の項目より CPU ビット数が確認できる。32 ビット版の PC ではウェブページの "Download Windows x86 web-based installer" を、64 ビット版では "Download Windows x86-64 web-based installer" を選択してインストールを開始する。

第2節 Mac OS X におけるインストール方法

本稿執筆時点（2019 年）では、Mac OS X 以降には、Python が標準でプリインストールされているが、2 系統の Python である。したがって、Mac OS X ユーザーも同様に 3 系統の Python をインストールする必要がある。Mac OS X でも同様に Mac OS X 向けの Python ダウンロードページ²⁾ からインストールすることも可能だが、今後も開発環境を整えていくことを見据え、円滑に開発環境の構築ができるよう、Homebrew を使ったインストールをここではおすすめする。

¹⁾ <https://www.python.org/downloads/windows/> にアクセスし、ビット数が一致するものをインストールする。

²⁾ <https://www.python.org/downloads/mac-osx/> にアクセスしてインストールすることも可能である。その際、Mac OS X 10.9 以降には "Download macOS 64-bit installer" を、OS X 10.6、10.7、10.8 には "Download macOS 64-bit/32-bit installer" をそれぞれ選択してインストールする。

付録 B 星付与用プログラム startagging.py

```
# -*- coding: utf-8 -*-

inf = open('sentilist.txt', 'r')
outf = open('sentistar.txt', 'w')

for s in inf:
    s = s.rstrip()
    s = float(s)
    if s < -0.8 and s >= -1.0:
        print('1', file=outf)
    elif s < -0.6 and s >= -0.8:
        print('2', file=outf)
    elif s < -0.4 and s >= -0.6:
        print('3', file=outf)
    elif s < -0.2 and s >= -0.4:
        print('4', file=outf)
    elif s < 0.0 and s >= -0.2:
        print('5', file=outf)
    elif s < 0.2 and s >= 0.0:
        print('6', file=outf)
    elif s < 0.4 and s >= 0.2:
        print('7', file=outf)
    elif s < 0.6 and s >= 0.4:
        print('8', file=outf)
    elif s < 0.8 and s >= 0.6:
        print('9', file=outf)
    elif s <= 1.0 and s >= 0.8:
```

```
print('10', file=outf)
```

付録 C 2種類の星の数とセンチメント分析結果

テキスト		星（レビュー投稿者）	星（感情分析）	感情分析結果
001.txt	10	6	0.1	
002.txt	10	6	0.0	
003.txt	10	8	0.5	
004.txt	10	10	0.8	
005.txt	10	8	0.4	
006.txt	10	10	0.9	
007.txt	10	8	0.5	
008.txt	10	10	0.8	
009.txt	10	8	0.4	
010.txt	10	6	0.0	
011.txt	10	7	0.2	
012.txt	10	10	0.8	
013.txt	10	10	0.8	
014.txt	10	10	0.8	
015.txt	10	8	0.4	
016.txt	10	7	0.3	
017.txt	10	8	0.5	
018.txt	10	7	0.2	
019.txt	10	8	0.5	
020.txt	10	6	0.1	
021.txt	10	7	0.3	
022.txt	10	8	0.5	
023.txt	10	9	0.6	
024.txt	10	8	0.5	
025.txt	10	9	0.6	
026.txt	10	9	0.6	

027.txt	10	8	0.4
028.txt	10	10	0.9
029.txt	10	7	0.3
030.txt	10	8	0.4
031.txt	10	7	0.2
032.txt	10	8	0.5
033.txt	10	7	0.3
034.txt	10	6	0.1
035.txt	10	9	0.7
036.txt	10	7	0.2
037.txt	10	9	0.7
038.txt	10	9	0.7
039.txt	10	9	0.6
040.txt	10	9	0.6
041.txt	10	7	0.2
042.txt	10	8	0.4
043.txt	10	7	0.2
044.txt	10	8	0.5
045.txt	10	8	0.5
046.txt	10	9	0.6
047.txt	10	7	0.2
048.txt	10	9	0.7
049.txt	10	8	0.4
050.txt	10	7	0.3
051.txt	10	9	0.7
052.txt	10	10	0.8
053.txt	10	6	0.0
054.txt	10	7	0.3
055.txt	10	9	0.6
056.txt	10	9	0.6

057.txt	10	9	0.6
058.txt	10	7	0.3
059.txt	10	8	0.4
060.txt	10	9	0.7
061.txt	10	9	0.6
062.txt	10	9	0.7
063.txt	10	7	0.3
064.txt	10	8	0.4
065.txt	10	7	0.2
066.txt	10	8	0.5
067.txt	10	8	0.4
068.txt	10	9	0.6
069.txt	9	7	0.2
070.txt	9	8	0.4
071.txt	9	9	0.7
072.txt	9	9	0.7
073.txt	9	7	0.3
074.txt	9	9	0.6
075.txt	9	8	0.5
076.txt	9	9	0.7
077.txt	9	9	0.6
078.txt	9	8	0.5
079.txt	9	8	0.5
080.txt	9	9	0.6
081.txt	9	9	0.6
082.txt	9	7	0.2
083.txt	9	6	0.1
084.txt	9	9	0.6
085.txt	9	8	0.4
086.txt	9	8	0.4

087.txt	9	6	0.1
088.txt	9	8	0.5
089.txt	9	8	0.4
090.txt	9	8	0.4
091.txt	9	8	0.4
092.txt	9	7	0.3
093.txt	9	7	0.3
094.txt	9	7	0.3
095.txt	9	9	0.6
096.txt	9	7	0.3
097.txt	9	8	0.4
098.txt	9	9	0.7
099.txt	9	9	0.7
100.txt	9	7	0.2
101.txt	9	8	0.4
102.txt	9	10	0.8
103.txt	9	10	0.8
104.txt	9	9	0.6
105.txt	9	8	0.5
106.txt	9	9	0.7
107.txt	9	8	0.5
108.txt	9	6	0.1
109.txt	9	8	0.4
110.txt	9	7	0.2
111.txt	9	6	0.0
112.txt	9	8	0.4
113.txt	9	10	0.8
114.txt	9	7	0.2
115.txt	9	7	0.2
116.txt	9	6	0.1

117.txt	9	8	0.5
118.txt	9	9	0.6
119.txt	9	9	0.6
120.txt	9	9	0.7
121.txt	9	9	0.7
122.txt	9	9	0.6
123.txt	8	9	0.6
124.txt	8	8	0.5
125.txt	8	8	0.5
126.txt	8	9	0.6
127.txt	8	8	0.4
128.txt	8	9	0.7
129.txt	8	10	0.8
130.txt	8	7	0.3
131.txt	8	8	0.5
132.txt	8	8	0.5
133.txt	8	9	0.7
134.txt	8	7	0.3
135.txt	8	7	0.3
136.txt	8	8	0.5
137.txt	8	7	0.3
138.txt	8	9	0.7
139.txt	8	7	0.2
140.txt	8	9	0.6
141.txt	8	7	0.2
142.txt	8	8	0.5
143.txt	8	8	0.4
144.txt	8	9	0.6
145.txt	8	7	0.2
146.txt	8	9	0.6

147.txt	8	6	0.0
148.txt	8	8	0.5
149.txt	8	7	0.3
150.txt	8	6	0.0
151.txt	8	6	0.1
152.txt	8	8	0.4
153.txt	8	7	0.3
154.txt	8	8	0.5
155.txt	8	7	0.3
156.txt	8	7	0.3
157.txt	8	9	0.6
158.txt	8	7	0.3
159.txt	8	8	0.4
160.txt	8	6	0.0
161.txt	8	6	0.0
162.txt	8	8	0.5
163.txt	8	7	0.3
164.txt	8	8	0.4
165.txt	8	8	0.5
166.txt	8	6	0.1
167.txt	8	7	0.2
168.txt	8	9	0.6
169.txt	8	7	0.3
170.txt	8	7	0.2
171.txt	8	10	0.9
172.txt	8	6	0.1
173.txt	8	7	0.3
174.txt	8	8	0.5
175.txt	7	8	0.4
176.txt	7	8	0.4

177.txt	7	6	0.0
178.txt	7	8	0.5
179.txt	7	9	0.7
180.txt	7	6	0.0
181.txt	7	8	0.5
182.txt	7	7	0.3
183.txt	7	8	0.4
184.txt	7	7	0.2
185.txt	7	10	0.8
186.txt	7	7	0.3
187.txt	7	6	0.0
188.txt	7	8	0.4
189.txt	7	7	0.3
190.txt	7	8	0.4
191.txt	7	8	0.4
192.txt	7	8	0.4
193.txt	7	9	0.6
194.txt	7	7	0.2
195.txt	7	8	0.5
196.txt	7	10	0.8
197.txt	7	10	0.8
198.txt	7	9	0.7
199.txt	6	6	0.1
200.txt	6	6	0.1
201.txt	6	6	0.0
202.txt	6	4	-0.3
203.txt	6	7	0.2
204.txt	6	7	0.2
205.txt	6	7	0.3
206.txt	6	6	0.1

207.txt	6	5	-0.1	
208.txt	6	6	0.0	
209.txt	6	6	0.1	
210.txt	6	5	-0.1	
211.txt	5	7	0.3	
212.txt	5	6	0.0	
213.txt	5	7	0.3	
214.txt	5	6	0.0	
215.txt	5	5	-0.1	
216.txt	4	8	0.4	
217.txt	4	5	-0.1	
218.txt	4	4	-0.4	
219.txt	4	6	0.1	
220.txt	3	6	0.1	
221.txt	3	6	0.0	
平均	8.46	7.74	0.40	
標準偏差		1.52	1.26	0.25

付録 D レビューのテキストデータ

001.txt

Una carta de amor a México...Esta película no le gusta a Trump

Debo admitir que como mexicano cuando hay una cinta extranjera y sobretodo estadounidense sobre algún elemento referente a México siempre pasa por mi cabeza "Hora de estereotipos" y vi "Coco" con la buena intención de encontrar algún punto positivo y vaya que me lleve tremenda y agradable sorpresa.

Pensando en puntos bajos me quedan en la cabeza algunos huecos en la trama y los parecidos de esta trama con "Up" pero quitando esto esta cinta es perfecta y lo hablo por doble ración: por la de alguien que disfruta y ama el cine y por mi mexicanidad.

Como lo dice el titulo esta cinta es una carta de amor a México, sus tradiciones en el Día de Muertos, sus valores y su música, Lee Unkrich nos demuestra que un guionista puede tocar fibras muy finas en nuestras emociones con historias de juguetes que tienen vida, peces parlanchines, monstruos de closet y ahora con las tradiciones mexicanas (merito también a los demás colaboradores como Adrian Molina).

Ignoro como la recibirán en otros países pero la Identificación Cultural de esta cinta me abruma con tantos elementos con los que me identifico que se acumulan y al final nos roban lagrimas con una sola frase: "Recuérdame".

Ya no estoy seguro si talento mexicano pudiera haber hecho una obra de estas características, por lo pronto agradezco a Disney/Pixar por darle a los mexicanos una cinta digna, sin estereotipos fáciles y que los puso en nuestros zapatos, Gracias.

002.txt

ARTE, ESTÉTICA, ARGUMENTO Y SOBRE TODO RESPETO

Sí, soy mexicano, y como buen mexicano en la espera de ver una interpretación extranjera de una costumbre y un culto tan delicado como lo es a la muerte, esperaba fallos y chistes coloquiales y rebuscados.

Oh, sorpresa, Pixar "hizo la tarea" como una bien intencionada Hermione Granger para un profesor, que si bien no era un "severo" e irónico Snape, si lo fue para un profesor al que se le resguarda especial cariño... México.

Algunos aseguran es un ardid político, otros dirán que es "una más" de Pixar donde se mezclan emociones de manera intencional para "seducir" al espectador. Sin embargo, como mexicano, y como un espectador respetable, he de confesar que esta cinta me ha obligado a escribir estas líneas para recomendar su revisión, su disfrute y hasta el aprendizaje de una de las culturas más grandes del mundo que rinde cada año un magno tributo a la muerte.

003.txt

Recuérdame

Obra maestra. Así tal cual es como creo que conviene arrancar definiendo la que tal vez, por sorpresa, sea la mejor película del año y lo mejor que le ha pasado al cine de animación desde 'Toy Story 3'. Disney y Pixar cuando se dan la mano suelen ser lo mejor de lo mejor. No sólo como empresa que sabe vender productos de entretenimiento de gran categoría, sino por brindar productos dotados de alma y significado que en otros tiempos serían insólitos.

'Coco' tiene aroma a cine clásico y no sabe cuánto se lo agradezco. Sin jergas vergonzosas actuales. Sin personajes típicos y tópicos que sólo quieren arrancar risas a la chavalería con móviles. Sin salidas de guión fáciles o edulcoradas. Es cine valiente y comprometido desde el principio hasta el final, en todos sus aspectos. Cuanto menos se sepa de su premisa (yo la vi sin saber, ni esperarme, nada) muchísimo mejor. Pero vaya por delante que afronta una de las temáticas más turbias y

problemáticas desde la infancia: la muerte. Ese tema tabú en la infancia que tantos adultos hacen tanta bola de nieve de ello, lo magnifican y acaban dando más miedo a los pequeños más que tranquilizarles por ser ley inevitable de vida, manifestando respeto por la misma.

Y una de sus grandes sorpresas es que lo aborda de forma realista, vehemente, pero ante todo natural y divertida. Arranca aplausos por su imaginación y sonrisas por sus continuos aciertos. Diseña y descubre todo un mundo "al otro lado del puente" como creo que nunca se había visto -menos en una película de este estilo-. Ya con esas, empezamos con buen pie. Si ya la historia es dócil y sabe moverse de forma trepidante, si esconde giros más sorprendentes de los que cabría esperar de esta cinta con esta premisa en un principio, si muestra las bondades y las maldades de la condición humana sin hacer excesivo daño pero tampoco edulcorando la verdad y si consigue hacer que salgas del cine emocionado por todo lo que acabas de ver... es para recordarla tanto como su canción principal.

Pero lo mejor de todo, lo que la hace ganarse la perfección en lo que se propone para mí, es que no engaña. No se queda en hacerte pasar un rato magnífico. La cinta persigue penetrar en tu cabeza y hacer que evoques tus propias vivencias, tu propia familia, tus propias amistades y tus propias acciones. La cinta quiere que recuerdes y que impulse a ti a hacer cosas por las que la gente te recuerde. Y lo consigue. Por eso, en lo personal para mí, es por lo que consigue ser una obra maestra.

004.txt

Coco (MUY RECOMENDADA)

"Pixar Disney" se lucio con esta película, ya que es basada en una de las tradiciones mas importantes de nuestro país (El día de muertos) y se refleja todas creencias acerca de esa tradición tan estética. Los personajes que salen son muy carismáticos, aparte de que metieron a un personaje que fue cantante y actor mexicano "Ernesto De La Cruz" (Como referencia claramente a Pedro Infante); Como también el castigo de "La chancala" y salen mariachis que son músicos muy destacados de nuestro país o algunos lugares donde se desarrolla la película se nota que fueron de pueblos mexicanos como "Guanajuato" pero lo que mas destaco en la película fue el "altar de muertos" y la

importancia de poner la fotografía de nuestros seres queridos.

Es una película de la cual no se podrán arrepentir de ver, porque te hace pasar un buen momento, además de que es apropiada para todo tipo de público. porque te hace recordar a los antepasados y te recuerda nuestras tradiciones y creencias mexicanas. para mi es de las mejores películas de Disney porque me hace sentir orgullo de mi país y todas nuestras costumbres.

¡No olvides llevar un pañuelo porque te hará llorar!

MUY RECOMENDADA

005.txt

Irónicamente, la esencia del mexicano llega al cine desde una empresa extranjera

Quizás es muy difícil para un mexicano juzgar de forma imparcial el nuevo trabajo de Disney-Pixar, puesto que inevitablemente el corazón ganará la partida a la razón. En una industria nacional que insiste en mostrar que México no va más allá de inmigrantes ilegales, narcotráfico, corrupción o chistes simplones de mal gusto, los directores Lee Unkrich (Finding Nemo, Toy Story 3) y Adrian Molina (The Good Dinosaur) junto con todo su equipo tomaron la estafeta para retratar la belleza que guarda la idiosincrasia de todos los mexicanos, logrando plasmar de forma excelente todo aquello que comparten sin importar edad y condición social.

Fueron seis años los que el equipo de producción pasó en México para captar fielmente la esencia de su cultura, y el resultado es simplemente espectacular. El Día de Muertos deja de ser una fiesta tétrica como la han querido vender por años equiparándola con el Halloween estadounidense para mostrar la belleza de una de las tradiciones mexicanas con mayor arraigo y que poco a poco iba perdiendo terreno con su “símil” del norte. No obstante, Unkrich y Molina tienen el atino de mostrar una historia que trata acerca de dilemas universales como el amor familiar y la autorrealización personal, los cuales no siempre convergen durante la vida de cualquier persona, mexicana o no.

La cinta trata acerca de Miguel, el más pequeño de una familia dedicada a un próspero negocio de los zapatos durante tres generaciones. Ubicada en el pueblo de Santa Cecilia, la empresa fue iniciada

por su tatarabuela después de haber sido abandonada por su esposo, un cantautor que salió en busca de la fama y nunca regresó. Evidentemente, aunque atípico en una familia mexicana, la música está totalmente prohibida en casa, lo cual choca directamente con las aspiraciones de un niño que ha aprendido a escondidas a tocar la guitarra para cumplir su sueño de ser como Ernesto de la Cruz, el mejor músico de México en toda la historia. En esta búsqueda de defender sus deseos y en plena celebración del Día de Muertos, el pequeño cruza accidentalmente al mundo de los difuntos, en el cual buscará toda la ayuda posible para poder regresar con los vivos y continuar con sus aspiraciones.

Como es usual en las películas realizadas por estos estudios, la animación y la música son de excelente calidad. No obstante, en esta ocasión la película destaca por su colorido y lo dinámico de su historia, la cual logra mantener enganchado al espectador durante toda la cinta, con los clásicos giros argumentales que si bien en un momento llegan a ser predecibles no restan el interés por llegar a un desenlace que resulta ser de los más conmovedores que se han visto en este tipo de cintas. Asimismo, y como también es costumbre, el doblaje se cuidó de forma impecable, contando con la participación de Gael García (quién también hace la voz de Héctor en la versión en inglés), Marco Antonio Solís, Angélica Rivera, Angélica Vale, César Costa, Héctor Bonilla, Xavier López “Chabelo”, Andrés Bustamante y Víctor Trujillo, entre otros.

Es así como Unkrich y compañía se anotaron un éxito rotundo con una película capaz de mostrar a México en todo su esplendor, capaz de hacer que la piel se enchine incluso desde el inicio, cuando se escucha el tema clásico de Disney con un tono bastante particular. No obstante, el gran reto de esta cinta será causar las mismas sensaciones fuera de las fronteras mexicanas, en aquellas personas para las cuales los sonidos, vestidos, situaciones y guiños no les son tan familiares. Independientemente de lo anterior, en una época marcada por Trump y las catástrofes naturales, los mexicanos siempre agradecerán a Disney por haber recordado que la grandeza de su país se encuentra en sus valores culturales y familiares.

006.txt

¡Me encanto!

La película representa muy bien a México, me gusta todos los detalles que le añaden, los colores, las decoraciones, las actitudes de los personajes y sobre todo ese toque de la chancla voladora que siempre nos da mucho miedo, la película es muy dulce y sentimental, no importa que tan frío de corazón te consideres, siempre te hará sentir muchas emociones y te sacara por lo menos una lagrima. En ella veras lo que es la importancia de la familia y de lo significativo que es el altar de muertos en nuestro país y el simple hecho de recordar a nuestros antepasados, desde el comienzo te atrapa y mientras va avanzando te inspira a no dejar de verla.

007.txt

Me he vuelto un poco loco

Ha sido la película mas bonita que he visto hasta ahora. Con toda la gracia en cómo es representada la gran y tradicional festividad que hay en Mexico que es las más importante y reconocida a nivel internacional, nada más y nada menos que el Día de Muertos. Se nota como los productores se basan perfectamente en toda la cultura mexicana, y como precisamente se basan en tanto el lugar donde se desarrolla lo que es la historia, es el estado de Guanajuato por sus viviendas y sus calles. Algo también muy representativo que hubo, fueron los alebrijes que es algo muy significativo de México. Algo que se podría decir como enseñanza al observar cómo la familia del niño que es el personaje principal, que es Miguel, lo más importante que hay en el mundo siempre será la familia y nunca debemos de olvidar ni por nada en el mundo.

Lo que más me agradó fue las canciones que se usaron, que por cierto fueron muy buenas y tenían ese estilo mexicano que siempre así fuimos reconocidos, que es el mariachi. El Mariachi nunca debe faltar en México, por eso es muy bueno que los productores se centraran más en la música. Es la esencia de México.

"Un Poco Loco" es mi canción favorita, ya que tiene esa alegría que refleja en su mayoría de las canciones mexicanas, Al igual que hay una canción que me robó el corazón, "Recuérdame" es la canción principal de esta película porque tiene un gran significado dentro de esta película.

Yo verdaderamente quedé enamorada de esta película, porque me encanta la cultura y la tradicional fiesta del Día De Muertos. Y verdaderamente la recomendaría.

008.txt

¡La mejor película!

Coco es una película ampliamente recomendable para todo tipo de público en especial para el país México ya que fue inspirado en el y en sus tradiciones y así dejándonos una enseñanza para así poder reflexionar de que manera en México se están perdiendo gran parte de nuestras tradiciones debido a que las familias están cada vez más distanciadas y no solo esos problemas afectan a esa familia en el momento si no a sus futuros antecesores que son los que se verán afectados y estos afectarán a su futura familia y de la manera que poco a poco se vayan perdiendo las costumbres y tradiciones que celebramos en nuestro país o que en nuestra familia nos han enseñado así que esta película tiene una enseñanza muy peculiar y demasiado similar a la situación que hoy en la actualidad vivimos con la pérdida de tradiciones año tras año.

La película también nos deja otra enseñanza que es muy importante para cualquier persona la cual nos demuestra que sin importar las palabras de las demás personas o sin importar lo que te digan o hagan tu siempre lucha por tu sueño y nunca te des por vencido sin importar lo que pase tu siempre sigues adelante hasta lograrlo.

También nos demuestra y nos enseña que lo más importante es la familia sin importar lo que pase siempre tiene que estar unida sin importar por los momentos que se pasen o que tal vez en ocasiones tendríamos que arriesgar ciertas cosas que en ocasiones también nos hacen felices pero a pesar de eso siempre es la familia y la familia siempre estará ahí para tí sin importar la situación, la ocasión y el momento por que para eso es la familia.

Coco de verdad es una excelente película que recomiendo ampliamente no sólo porque está inspirada en México si no por la enseñanza y el sentimiento afectivo que transmite haciéndonos reflexionar sobre muchas cosas que son importantes para nuestra vida pero nunca nos habíamos dado cuenta que están allí y que siempre están allí para apoyarnos y así de tal manera aprender a valorar ese gran tipo de cosas buenas que nos rodean y nunca nos damos cuenta de las buenas y útiles que pueden ser para nuestra vida (La familia).

009.txt

COCO

Pixar, en esta historia, consigue algo bastante especial: habla de tradiciones, de herencias, de eternos inmutables... y demuestra que nunca es demasiado tarde para cambiar y luchar, sólo hace falta recordar...

La película habla sobre Miguel un niño alegre y de una familia humilde zapatera. Pero a diferencia de su familia, Miguel como todo mexicano le tienen un gran amor a la música, su familia no lo apoya en esta decisión, pues su familia tuvo una mala experiencia con un músico. Miguel intentando hacerlos cambiar de opinión cae en una maldición por intentar tomar la guitarra de Ernesto de la Cruz un cantante famoso.

Al escuchar sobre esta película pensé que iba a ser otra película con estereotipos extranjeros y al verla me lleve una gran sorpresa ya que lo que dijeron los directores es una carta de amor a México era verdad.

Me gusto que los directores para poder saber sobre la cultura mexicana visitaran pueblos de aquí mismo, que colaboraran con músicos mexicanos, las pirámides de Teotihuacan para crear el mundo de los muertos

Coco es un homenaje a la tradición mexicana del día de muertos. La historia se basa en las tradiciones, los valores, la familia, la música, la festividad, el canto, los colores, las artesanías, la gastronomía, el arte, su prehispanidad y en general todo lo que nos enorgullece y nos hace diferentes a muchos otros países y/o culturas.

No en balde somos uno de los centros turísticos mas importantes a nivel internacional, gente de todo el mundo visita México.

Los lazos sagrados entre la familia y los amigos, son resaltados a lo largo de la película. Para cualquier mexicano ver una cinta con estas características va ha ser algo muy placentero, ya que en el fondo, esto es un merecido homenaje a todo lo mejor de nuestro país, y que bueno que la mexicanidad sea un ejemplo digno de admiración para muchos a nivel internacional.

Me gusta que utilicen el valor de familia como tema principal, el recordar a tus seres queridos que

ya no están para de alguna forma mantenerlos con vida y esperar encontrarlos en la otra vida, haciéndote reflexionar acerca de todo lo que has pasado con ellos sea bueno o sea malo. Me gustan todas las referencias y de alguna manera cosas típicas de las familias mexicanas como el uso de la chancra poderosa de la abuelita de Miguel o la referencia a los tamales, nadie le puede negar comida a la abuela.

La música es perfecta con canciones interpretadas por algunos de los grandes de México y con algunas de ellas muy conocidas también como La llorona, y algunas otras nuevas como Recuerdame que la letra te hace cantarlas sin parar.

010.txt

COCO

Pixar, en esta historia, consigue algo bastante especial: habla de tradiciones, de herencias, de eternos inmutables... y demuestra que nunca es demasiado tarde para cambiar y luchar, sólo hace falta recordar...

La película habla sobre Miguel un niño alegre y de una familia humilde zapatera. Pero a diferencia de su familia, Miguel como todo mexicano le tienen un gran amor a la música, su familia no lo apoya en esta decisión, pues su familia tuvo una mala experiencia con un músico. Miguel intentando hacerlos cambiar de opinión cae en una maldición por intentar tomar la guitarra de Ernesto de la Cruz un cantante famoso.

Al escuchar sobre esta película pensé que iba a ser otra película con estereotipos extranjeros y al verla me lleve una gran sorpresa ya que lo que dijeron los directores es una carta de amor a México era verdad.

Me gusto que los directores para poder saber sobre la cultura mexicana visitaran pueblos de aquí mismo, que colaboraran con músicos mexicanos, las pirámides de Teotihuacan para crear el mundo de los muertos

Coco es un homenaje a la tradición mexicana del día de muertos. La historia se basa en las tradiciones, los valores, la familia, la música, la festividad, el canto, los colores, las artesanías, la gastronomía, el arte, su prehispánidad y en general todo lo que nos enorgullece y nos hace diferentes a muchos otros países y/o culturas.

No en balde somos uno de los centros turísticos mas importantes a nivel internacional, gente de todo el mundo visita México.

Los lazos sagrados entre la familia y los amigos, son resaltados a lo largo de la película. Para cualquier mexicano ver una cinta con estas características va ha ser algo muy placentero, ya que en el fondo, esto es un merecido homenaje a todo lo mejor de nuestro país, y que bueno que la mexicanidad sea un ejemplo digno de admiración para muchos a nivel internacional.

Me gusta que utilicen el valor de familia como tema principal, el recordar a tus seres queridos que ya no están para de alguna forma mantenerlos con vida y esperar encontrarlos en la otra vida, haciéndote reflexionar acerca de todo lo que has pasado con ellos sea bueno o sea malo. Me gustan todas las referencias y de alguna manera cosas típicas de las familias mexicanas como el uso de la chancla poderosa de la abuelita de Miguel o la referencia a los tamales, nadie le puede negar comida a la abuela.

La música es perfecta con canciones interpretadas por algunos de los grandes de Mexico y con algunas de ellas muy conocidas también como La llorona, y algunas otras nuevas como Recuerdame que la letra te hace cantarlas sin parar.

011.txt

coco 2017

Coco es una película estadounidense en 3D producida por Pixar y distribuida por Walt Disney Pictures. El 15 de agosto de 2015 en la D23 Expo Pixar confirmó el título de su última película que está inspirada en la fiesta mexicana del Día de Muertos. También se confirmó que la película será dirigida por Lee Unkrich.

la historia nos cuenta sobre Miguel rivera,un niño de 12 años que vive en el pueblo de santa Cecilia

en México,Miguel ama la música y aspira en convertirse en un gran músico como Ernesto de la cruz ídolo del pueblo y de Miguel,el problema de Miguel es uqe su familia odia la música,mama Imelda la tatarabuela de Miguel se caso con un músico que la abandono cuando tenían a una pequeña hija y asi prohibió todo tipo de música e instrumento musical y eso se pasa de generación en generación haciendo que Miguel sea difícil cumplir su sueño,en pleno día de muertos Miguel descubre que Ernesto de la cruz es su tatarabuelo y reta a su familia,escapa de su casa acompañado de un perro callejero llamado dante y al intentar buscar una guitarra para impresionar a la gente del pueblo con su talento decide profanar la tumba de dela cruz y tocar su mitica guitarra teletransportandose al mundo de los muertos,ahora Miguel debe de volver a la vida escapando de sus familiares muertos que lo pueden regresar a cambio de no volver a tocar música y junto a un muerto llamado hector decide encontrar a de la cruz para que el lo pueda regresar.Esta es una de las historias originales de pixar que queriamos desde hace tiempo,bajo esta premisa coco es una película que representa la tradición del día de muertos,los personajes de coco son una fiel interpretación de las verdaderas personas de Mexico sin entrar en estereotipos,la imagen es visualmente perfecta y 100% pixar y agregando colores dependiendo de el mundo en el que estén como en el mundo de los vivos los colores que abundan son los colores vivos como el naranja,amarillo,etc pero en el mundo de los muertos la iluminación cambia dependiendo de las emociones de los personajes ,como en las fiestas que hay muchos colores y en lugares abandonados hay un tono gris y oscuro ,la película esta llena de sentimentalismo y eso es lo que atrapo a la mayoría de espectadores mexicanos porque te recuerda cosas que en tu vida han pasado,la música es asombrosa

012.txt

México lindo y querido en COCO ...

Una excelente película llena de México hasta en los mínimos detalles, es un filme que nos muestra el amor de la familia y las tradiciones. Contiene unos gráficos impresionantes, muchos colores en cada una de las escenas. En esta película podremos disfrutar la aventura de un niño llamado Miguel quien comenzará una gran travesía en la búsqueda de la verdad de su familia. En la película se ven las diferentes tradiciones familiares y en especial Día de Muertos.

Es una película que te sacará una sonrisa y algunas lágrimas, ya que llega a hacerte recordar s

aquellos seres que no se encuentran con nosotros. A pesar de ser una película de producción estadounidense, los productores procuraron crear un filme lo más apegado a la realidad, pasaron años y años en visita de pueblos y conviviendo con familias mexicanas, para obtener la esencia en cada una de sus escenas.

Tiene un gran mensaje y nos emite muchas realidades sobre la vida diaria.

Nos hace reflexionar sobre el valor de la familia y la vida.

Es un filme apto para todas las edades, es una película que por más veces que veas, nunca terminarás de encontrar detalles nuevos y asombrosos.

Muy recomendada para mantener vivas las tradiciones y pasar un muy buen momento al lado de seres queridos.

013.txt

Un reencuentro inolvidable

Es uno de los mejores largometrajes de la producción Pixar Animation Studios tomando en cuenta que también cuenta con unos increíbles efectos digitales.

Es una película bastante entretenida, apta para todo público en general.

Esta película es bastante buena la disfrutaron mucho tanto niños como adultos, ya que nos deja un muy buena enseñanza, nos cuenta un poco sobre las tradiciones mexicanas y nos hace recordar a nuestros difuntos, también nos enseña a que siempre debemos ser uno mismo y seguir siempre nuestros sueños. Aunque los realizadores caen en uno de los rasgos principales de la posmodernidad, el apropiacionismo (al retomar las tradiciones de una cultura ajena), Unkrich y su equipo evitan el reduccionismo demostrando una comprensión esencial de la tradición mexicana mediante un acercamiento respetuoso y cariñoso, y buscando el momento oportuno para rendirle tributo a irónicos personajes de la cultura mexicana como El Santo, Frida Kahlo, Cantinflas, Pedro Infante y, por supuesto, José Guadalupe Posada, cuyos grabados immortalizaron la figura de La Catrina.

Coco es un filme sobre la celebración de la familia, la importancia de los recuerdos y la conexión a través de las generaciones; el hecho de que el protagonista se cuestione sus orígenes, cuál es su lugar

dentro de su familia y los vínculos que se crean a partir del simple acto de recordar, responden a una necesidad humana.

014.txt

La mejor película

La película "coco" para mi es una de las mejores creaciones de Pixar, al enterarme de las curiosidades de los creadores entendí muchas cosas, como el hecho de que tardaron seis años en hacerla, y es comprensible puesto que representar la cultura mexicana es muy complicado, ya que estamos llenos de tradiciones y momentos muy bellos y memorables pero que no muchos países extranjeros logran comprender.

Coco es una película mexicana hecha por personas americanas, por lo que respresentarla para mi fue un gran reto que ellos lograron superar, esta súper bien hecha, perfectamente representada.

Para mi supieron expresar muy bien las costumbres mexicanas, en este caso la tradición del día de muertos, me gusto mucho los colores, las imágenes, el como supieron representar a los mexicanos, físicamente y en sus expresiones. Las facciones de la gente mayor, sus arrugas, sus vestimentas, los gustos, los recuerdos, la manera del comportamiento que tienen los niños, los adultos y hasta las mascotas. Investigaron mucho para saber como los mexicanos logramos vivir y celebrar estas fechas. Me gusto mucho la musica, y los personajes, sus actitudes que toman, y la trama que tiene, esta película deja un mensaje muy bonito, algo para recordar y hacer conciencia de nuestras tradiciones y el porque debemos festejarlas y seguir con ellas. Es una película que crea muchas emociones, felicidad, diversión, coraje y nostalgia. La califico con 10.

015.txt

Día de muertos

Me gusto mucho esta película en lo personal ha sido una de las películas más bonitas que he visto donde lo más importante es nuestra familia.

La festividad del día de muertos que ellos presentan es muy hermosa, significativa y fantasisa.

Todos los personajes actuaron muy bien, el vestuario me gusto mucho, las canciones que cantaron y las escenas tuvieron un toque de diversión, alegría y tristeza.

Esta película se enfoca en el día de muertos algo que es importante y tradicional en nuestro país porque les celebramos a nuestros seres queridos poniéndolos en una ofrenda.

La historia genera lágrimas que seguramente serán la inspiración de la resolución de la historia. es entretenida y conmovedora.

016.txt

Intenta no llorar

Sin duda alguna es una de mis películas favoritas de Disney Pixar, pues la manera de recrear el día de muertos y sobretodo crear los paisajes en los que se desarrolla toda la historia inspirándose en distintos pueblos que existen al rededor de todo México, es simplemente grato. Pues qué mejor manera de representar las raíces mexicanas.

Esto no es todo lo que llamó mi atención, pues la película de principio a fin, tiene su propio toque y a lo que me refiero es que es una película cien por ciento original en cuanto a la historia.

La película está hecha para todo tipo de público cosa que es muy agradable, pues podrás disfrutarla en familia sin problemas, no porque sea una película animada significa que sea infantil. Para nada, la trama de la historia te hace meterte completamente y es por eso que con las escenas finales te logra sacar unas cuantas lágrimas. Pues son tan conmovedoras cada una de las últimas escenas, que simplemente es difícil contenerse y no llorar.

Algo característico de las películas de Disney es que siempre tienen una bonita reflexión y obviamente Coco no fue la excepción, puesto que, trae mensajes tan significativos , y es por esto que es una película que recomiendo ampliamente, porque sé que les puede llegar a encantar tanto como a mí.

Pues la vestimenta que es la más importante para darle vida a los personajes, la ves reflejada con cada traje de mariachi, cada falda y blusa bordeada que es muy característica de las abuelitas. La ves presente en esta maravillosa película

Y no solo eso pues algo, que por lo menos para mí fue fundamental para el lanzamiento de la película fue la música tradicional mexicana, que simplemente son tan pegadizas con el ritmo que llevan por dentro, y por supuesto la letra de cada canción , que hacen que te la pases cantándolas con gran emoción.

017.txt

Coco, una película 10% estadounidense y 90% mexicana

He llamado a esta crítica así porque, como se podrá ver en el filme, casi todo se basa en la vida de un mexicano: el color de piel, por supuesto que la cultura, (en algunos casos) el amor a la música, la comida, la vestimenta, y algunas palabras muy dichas por nosotros los mexicanos.

Fuera de todo el problema que sucedió, anterior a la película, sobre la empresa "Disney" queriéndose apropiarse de nuestro término "Día de Muertos", y toda la polémica que causó dicha acción que, por supuesto posteriormente Disney afirmó que no lo haría, estamos seguros que (sin importar lo ocurrido) la película nos encantó.

Es una buena historia, muy hermosos colores, muy pero muy buena música y excelentes personajes, que nos llevaron al punto de hacernos llorar.

Tan bien hecha está la película que a mí, siendo mexicana, me ha abierto el corazón y me he dado cuenta de que me falta mucho por aportar hacia mi propia cultura.

Sin duda esta película me gustó mucho, hace una muy buena referencia hacia los mexicanos, hacia nuestra cultura y habla bien de México y es una razón más para aplaudirles a las personas que hicieron posible este filme.

018.txt

Película Maravillosa

Me parece una película preciosa, visualmente maravillosa, y con un argumento muy limpio.

Desde el respeto, no entiendo alguna crítica de los expertos.

Es una película infantil, por ello tiene algún chiste infantil, de otra forma a cualquier niño, una película de casi 2 horas, se le haría muy pesada.

Acabo de salir de verla, y ya tengo ganas de repetir.

019.txt

Coco de Disney/Pixar ha conseguido llegarme al corazón. Magistral.

Estoy muy contento. ¿La razón? Disney y Pixar lo han vuelto a lograr. Una película de lo más tierna, hermosa, y que conseguirá tocarte la fibra sensible. Conseguirá llegar al fondo de tu corazón. Uno debería ser de piedra para no enamorarse de un film como el que ahora nos ocupa. Debería tener la sangre muy fría para no emocionarse, reír y llorar mientras la está visionando. La verdad es que el film se pasa en un suspiro. Más de cien minutos que se pasan volando. Me esperaba una película notable y me he encontrado con una obra maestra, magistral de principio a fin. Para todas las edades, la llegarán a disfrutar tanto los más pequeños de la casa como los mayores. Se llega a sentir mucho apego y cariño por unos personajes muy bien elaborados.

El film está escrito y dirigido por Lee Unkrich (realizador de otras cintas Pixar como Toy Story 3 y Buscando a Nemo) y Adrián Molina (escribió parte del material de guion adicional para otra película de Disney/Pixar titulada El viaje de Arlo). Entre las voces protagonistas en la versión original se pueden escuchar las de los actores Benjamin Bratt (visto en cintas tales como Doctor Extraño e Infiltrados en Miami, entre otras) como Ernesto de la Cruz y Gael García Bernal (de la serie Mozart in the Jungle) como Héctor, además de la del joven Anthony Gonzalez como el niño protagonista llamado Miguel. Junto a ellos en el reparto tenemos a Edward James Olmos (Blade Runner), Alanna Ubach (Los padres de él), Cheech Marin (Machete) y Alfonso Arau (Tres amigos).

En mi humilde opinión, todo está fenomenal, estupendo, empezando por la animación (ya sea cuando se habla de los fondos, de los personajes...), esos colores muy llamativos a lo largo del film, el sonido y la espléndida partitura de Michael Giacchino (casi que parece estar abonado a Pixar, pero bien por

él), junto a unas maravillosas canciones. Si os gusta el cine de Disney, el cine de Pixar o los dos, ya que estamos, esta cinta me parece de lo más recomendable. Mi nota final y de lo más merecida: 10.

020.txt

Disney/Pixar, llenos de vida

Leí una reseña de un crítico especializado de un medio importante en la que señalaba a COCO como una película regulara y decía que al final se sabía el porqué del título. Éste último comentario indicaba que o había llegado tarde a la película o no la había visto. Que la califique como regular podría haber sido sólo una opinión pero su explicación sobre la “sorpresa” deja claro que no tiene credibilidad.

Pero vamos ya a la maravillosa producción de la factoría de sueños del mago de Burbank para estas navidades del 2017: es, sencillamente, una preciosa obra de arte. Una entrañable historia llena de poesía que gustará más a los grandes que a los chicos por sus continuos guiños y su guión.

Disney no debía tener claras sus posibilidades comerciales fuera del país azteca y la ha lanzado casi como el complemento de un corto sobre FROZEN que a mí me ha parecido bastante mediocre y demasiado largo...quizás porque no he visto la película original. Posiblemente tengan razón porque COCO es muy mexicana pero a mí, que soy de Valladolid, España, me ha encantado y, lo que más pesa en mi opinión, me ha hecho regresar al Teatro Pradera de mi ciudad en el que vi mi primera película que, además, era de Disney. No recuerdo un solo año de mi vida en el que no haya habido un acontecimiento Disney y este año, tan prolífico para esta empresa, COCO brilla con luz propia. Muy recomendable para todos...el que se la pierda peor para él.

021.txt

Maravillosa sorpresa

Atónito estaba a lo que se estaba generando en sus primeros días con “Coco”. No voy a negar que soy un fan de Walt Disney y Pixar, es impresionante la capacidad que tienen de retroalimentarse estas 2 grandes factorías del cine de animación, el resultado con “Coco” es sin exagerar para mí sin duda ya en mí podium de películas de animación.

Junto con El Rey León y Buscando a Nemo y posiblemente superando a estas 2 por tantas cosas que te da esta maravillosa cinta.

Emoción, personajes, colores, guión buenísimo y que no para de girar y girar, (es aquí donde se impone al resto de las de su “clase”).

“Coco” es un viaje en el que te tienes que dejar llevar y disfrutar al máximo, sino eres de piedra prepárate para vivir una experiencia que no olvidarás, valores todos los que quieras y mas, para niños, adultos, para todos, familia y sueños personales que nunca te los arrebaté nada ni nadie. 9,5.

022.txt

Viva Mexico!! Viva Pixar!!

De las de aplaudir al terminar la peli. Hacía mucho tiempo que no salía tan feliz de un cine.

Maravillosa historia y maravillosamente contada con una música preciosa.

Perfecta para conocer la cultura mexicana y para quedarte con una máxima para enseñar a nuestros niños: Seguiras vivo mientras haya alguien que te recuerde.

BRAVI!

023.txt

Gracias Pixar

Gracias Pixar por regresar con tan barbaridad obra de arte y hacernos disfrutar en el cine.

Bueno tengo que decir que iba al cine con muchas expectativas pero no muy exaltado porque ya me ha pasado muchas veces que el día del estreno tiene mucha nota, y después cuando terminas de ver la película terminas por preguntarte porque tenía esa nota, pero tengo que decir que esta película me ha marcado.

No me quiero alargar, pero bueno en resumen es una obra de arte. La música, los personajes, la historia, el desenlace... absolutamente maravilloso.

Un 10/10.

024.txt

Música, el camino a la vida

No es ningún secreto que para México, el “Día de Muertos” es una tradición muy importante. Sin embargo; en los últimos años hemos visto representaciones de esta festividad un tanto exageradas como en James Bond, Spectre y en Batman V. Superman. Recuerdo que al ver estas escenas no me sentí identificado con lo que mostraban, por lo temía por lo que pudieran presentarnos en COCO.

Sin embargo; durante el evento D23 2017 (digamos que es una especie de E3 para Disney), John Lasseter invitó al escenario a Lee Unkrich (Director), Adrian Molina (Co-director) y a Darla K. Anderson (Productora) para hablar más de COCO. Ya habíamos visto trailers, pero durante la conferencia, se notó la importancia de esta nueva entrega para la casa de animación que nos ha brindado historias como Toy Story, Inside Out, Ratatouille, etc.

COCO nos cuenta la historia de Miguel, quien desea cumplir su sueño de convertirse en un gran músico como lo llegó a ser Ernesto de la Cruz, el artista más famoso de México. Sin embargo; la familia de Miguel prohíbe la música, por lo que tiene que vivir su pasión de manera casi clandestina. A pesar del talento musical de Miguel, no puede convencer a su familia de permitirle seguir su pasión, por lo que en un momento se ve en la disyuntiva de seguir su sueño o continuar con la tradición de ser zapateros. Durante todo el año, la Tierra de los Vivos y la Tierra de los Muertos coexisten por separado, pero durante el Día de los Muertos, ambas tierras se unen. Es en este día que Miguel a través de la guitarra de su héroe, desata la magia de éste día y es transportado a la Tierra de los Muertos, donde se encuentra con su familia que lo ayudará a regresar a su mundo. La película nos mantiene al filo de las emociones. Podemos pasar de un momento cómico hasta un momento muy sentimental. Pixar nos había entregado recientemente continuaciones de sus primeras películas, por lo que con COCO regresan a contar una historia original, tomando elementos de la tradición del Día de Muertos.

025.txt

Homenaje a nuestros seres queridos

El nuevo éxito de Pixar es una película ambientada en un México humilde que nos ofrece una perspectiva totalmente diferente a lo visto hasta ahora: la importancia de recordar a los seres queridos ya fallecidos. En esta obra se cruza además con el respeto a los antepasados, el legado familiar y lo que deseamos alcanzar o ser en nuestra vida.

La historia se desarrolla en dos "mundos", que son el de los vivos y el de los muertos y con un colorido muy atractivo. A los "gamers" nos recordará mucho al videojuego de Grim Fandango, pues los personajes del segundo mundo son básicamente esqueletos trajeados. Pero en modo alguno es un obstáculo para el desarrollo de expresividades. Como curiosidad, tenemos el "cameo" de la pintora mexicana Frida Kahlo.

La emotividad es creciente, con algunos giros argumentales y sorpresas y el resultado final es brillante e impecable. Se agradece que en España se haya mantenido el doblaje latino, para respetar la dicción mexicana que realmente corresponde a la historia.

026.txt

Obra maestra en este maravilloso homenaje a la familia.

Un prodigio, una autentica maravilla, una joya absoluta y un torrente de emociones sin cesar. Así es Coco, la desde ya nueva obra maestra de los estudios Pixar y la desde este mismo momento la mejor película que he visto en el cine en todo 2017. Nada mas salir de la sala lo primero que he hecho ha sido reservar el steelbook. Con eso lo digo todo.

Y es que Coco no se queda solo en su maravillosa animación o en su impoluto apartado técnico. Impecable. Si no que es una película maravillosa, bonita y emotiva, que guarda en su interior un hermoso mensaje ante el cual es imposible no sentir una punzada directa dentro de nuestro ser, por que uno no solamente se emociona ante esa hermosa historia si no que durante la misma y sobre

todo en sus últimos 15 o 20 minutos es completamente imposible no pensar en determinadas cosas y emocionarse y eso solo lo consiguen las grandes películas. Al fin y al cabo todos somos humanos y cuando una película toca el tema que esta toca de una forma tan sincera, directa y con unos personajes tan sumamente bien elaborados y definidos y una historia tan potente, bien elaborada y que transcurre con total naturalidad es imposible no reír o llorar durante su proyección.

El argumento es totalmente adulto y creo y estoy seguro de que muchos niños que vayan a verla solamente se quedaran con lo bonita que es la animación sin lograr captar el mensaje que trata de transmitir (sobre todo los mas pequeñines). Sin embargo los adultos creo que son los que mas van a disfrutar de esta película. Un maravilloso canto al principal pilar que sustenta nuestra existencia. Un maravilloso homenaje a la familia, a aquellos que tenemos y por los cuales merece la pena seguir luchando día a día, pero sobre todo a aquellos que en algún momento nos dejaron y cuyo recuerdo sigue vivo en nuestra memoria. Un maravilloso canto generacional para demostrar que escuchar y cuidar de nuestros mayores y de toda la sabiduría que ellos nos pueden transmitir es una de los mejores tesoros que podemos tener.

En definitiva, una AUTENTICA OBRA MAESTRA, así, en mayúsculas. Seguramente repita visionado en el cine por que la película se lo merece. Y quiero que gane Oscars, que se reconozca de alguna manera todo el cariño y dedicación que queda demostrado han puesto en ella.

Mi nota final de un 10 sobre 10. Lo mejor del año. Por no decir lo mejor en años.

No os la perdáis en cines. Lo vais a agradecer.

027.txt

Recuérdame... hoy me tengo que ir, mi amor

Para empezar puedo hacer un resumen rápido: "Coco" es una película maravillosa. Una pequeña propuesta convertida en una gran sorpresa, porque a priori no partía como uno de los grandes proyectos de Pixar. Como suele ser habitual en las películas del estudio estadounidense, la película

la disfrutarán a partes iguales tanto niños como mayores, en esta ocasión incluso con un número superior de detalles y momentos dedicados a los adultos.

Llama la atención que un tema que suele ser tabú, especialmente en la infancia, sea tratado de forma tan cercana y natural, sin edulcorar en demasía ni ocultar esa realidad. Cuando digo esto me refiero dentro del estándar de la animación, no es fácil encontrar una película de este tipo en la que se hable de muertes, cementerios, espíritus y demás términos relacionados. con la naturalidad con la que se hace en "Coco". Esto también es consecuencia de que la historia esté ambientada en el célebre "Día de Muertos" mexicano, por lo que resulta también una gran oportunidad para empaparnos de un trocito de cultura popular del país azteca.

La película se mueve constantemente en un ambiente familiar a la par que emocional donde todo funciona como un reloj. Los mensajes que nos va dejando como el de la importancia de la familia o la idea de que nunca se muere del todo mientras tus seres queridos te sigan recordando están plasmados excelentemente, especialmente éste último, de forma sencilla pero a la vez con matices que harán reflexionar (y probablemente emocionarse) especialmente a los adultos.

En un principio se podría pensar que el guión no es que sea la panacea en cuanto a originalidad. Si bien es cierto que comienza como la historia típica de "perseguir un sueño", luego se va transformando en algo que esconde un trasfondo mucho más profundo y casi traslada esa lucha del protagonista por la música a un segundo plano. Incluso los guionistas se dan el lujo de incluir un par de giros de guión bastante sorprendentes. Va de menos a más clarísimamente (con permiso de la introducción en guirnaldas, puro arte) hasta terminar en uno de los finales más espectaculares y emotivos que Pixar nos ha regalado. Es imposible no conmoverse, y si me apuras quebrarse, ante esa enternecedora y sentimental recta final.

Por último y como no podía ser de otra manera, en el apartado visual es alucinante. Un festival de colores con un diseño artístico sublime y una factura técnica impecable. La música tampoco desmerece para nada ese gran nivel, tanto las melodías que ambientan esta genial historia como las canciones, cortas pero intensas, mención especial a la que acompaña al final.

Y como precisamente dice esa canción principal ("Recuérdame"), que se descuiden en Pixar por ello. Con "Coco" han conseguido una película que, sin tener que hacer demasiado esfuerzo, será recordada por sus espectadores con total seguridad. Preciosa.

028.txt

Imprescindible

Poco puedo añadir que no se haya dicho ya, técnicamente perfecta, visualmente preciosa, la música emotiva, los personajes carismáticos y la historia perfecta, espiritual, sentimental y con el toque justo de comedia y desbordante fantasía, de verdad, de esas películas que merece la pena ver en el cine.

029.txt

Lo único malo sería perdersela

Reflexión tras salir del cine:

Si estas pensando que película puedes ver, humildemente te recomiendo que des una oportunidad a esta obra mayor que sale de la prolífica fábrica de cine que es Pixar.

Porque te va a hacer reír, pero también te va emocionar, de verdad, nada de sentimentalismo barato.

Porque te va a sorprender su perfectamente trazada historia. Porque es una oda al cine. Una oda a la música. Una oda al pueblo y cultura mexicanas. Una oda al amor. Una oda a la familia. Una oda a la vida.

No lo dudes, regálate el placer de disfrutar de "coco".

030.txt

Un sublime homenaje a la familia, a la música y a la cultura mexicana.

Otra vez. Pixar lo ha vuelto a hacer. Tenía pocas esperanzas depositadas en esta película, pero infravalorar a Pixar siempre es un craso error; pelicolón, una obra maestra de la animación. Pese a

que la cultura mexicana no te resulte especialmente interesante (como era mi caso) te atrapa, tratando a todos y cada uno de los personajes y su contexto sociocultural con respeto y cariño. La historia es sencilla pero consigue sorprender y está magníficamente narrada, su diseño artístico es de los más bellos que he visto en una película de animación, su banda sonora es espectacular... Consigue transmitir muchos mensajes simultáneos, aptos para niños y para adultos, con una maestría que sólo Pixar es capaz de transmitir a sus producciones. Una obra de arte.

031.txt

Recuérdame.

Hacía mucho, mucho mucho tiempo que una película no me gustaba tanto a rabiar... Si me hubieran dicho que sería de animación... me hubiera sorprendido, que sería de Pixar? no lo hubiera hecho.

Desde hace años Pixar hace grandes, muy grandes películas, pero eso lo sabemos todos.

Que convierte historias pequeñas en grandes.. también...

Que una historia de una familia nos acerque a un universo de amistad por supuesto, nostalgia por los que ya no están en este mundo, respeto y mucho, pero que mucho amor... Pues es que solo puedo imaginar a Pixar llevándolo a su máximo esplendor, a través de una cultura maravillosa como es la mexicana en un día tan importante para la cultura latina, el día de los muertos, y unos personajes perfectamente estructurados, giros impredecibles y una banda sonora realmente bella, hace de esta perfecta película, una historia que será un referente en el creciente y gran catálogo de este gran estudio de cine. Gracias Pixar.

032.txt

Descubriendo nuevos límites de calidad

"Coco" no hace más que encasillar al cine de animación dentro de la categoría de obra maestra, de forma que aún más vehemente que "Toy Story" o incluso otros clásicos Disney como la mismísima "El rey león". Cuando se cree que todo se ha visto o realizado en el séptimo arte, esta es una genial sorpresa que nos descubre una trama madura repleta de impresionantes y fantásticas revelaciones. Así como contando con una animación cada vez más realista y jugosa. Un clásico

instantáneo, emocionante e imprescindible.

033.txt

Pixar ... gracias

La he visto hace nada ... 5 minutos ... y aún no sé qué decir, de verdad, solo había oído que era muy buena, que era genial, de lo mejor de Pixar, y la verdad eran comentarios que no me sorprendían porque Pixar es, desde hace bastantes años, lo mejor que Disney crea a día de hoy, es lo único que aún no ha perdido forma ni esencia, y siempre que llega una de sus películas (con algunas excepciones) marcan.

Entre tanto debate de la cuestionable SW VIII, esta cinta (también de disney, pero vamos, como se nota que son dos partes de la industria totalmente distintas y que son otros los creadores) porque COCO rompe la barrera, te emociona y te lanza una flecha directa al corazón que te hace reflexionar y hallar muchísimas emociones que pocas veces sacamos a la luz por la propia oscuridad del mundo que nos rodea.

Siento que en la crítica me pase de meloso y emocional pero es que la película te lo provoca, no tengo nada, NADA, absolutamente malo que decir de COCO, es una OBRA MAESTRA de los pies a la cabeza y una de las películas más bonitas que he visto en mi vida.

Aceptarte a ti mismo, aceptar la muerte con una sonrisa, no olvidar a la familia, el poder de la música, perdonar y redimirnos del pasado, ... tantas lecciones llevadas a cabo con tanta maestría y la magia de Pixar, sus canciones y todo el derroche de imaginación que posee ... no me extraña nada que en México se haya convertido en todo un fenómeno porque además es un homenaje como ninguno a toda su cultura.

Pixar lo vuelve a hacer posible, una película que quizá es algo dura para los niños... ya lo es para los adultos, pero eso es lo que hace excepcionales a estas películas, marcarte en el corazón, mover tu mundo interno ... escribir esta opinión mientras las lágrimas empañan mis ojos ... esto es magia, esto

ES CINE

034.txt

Tradición y vanguardia

Durante la escena donde el protagonista se encuentra por primera vez con sus antepasados y le enseñan el puente por donde cruzan de un mundo a otro no pude evitar reírme. Tampoco pude evitarlo cuando la abuela de Miguel le explica el porqué de la ofrenda, el motivo por el que lo hacen cada año. Me sonó ridículo. No me malinterpretéis, simplemente no soy una persona de seguir tradiciones de este tipo. No creo en ellas, y aunque las respeto, no puedo evitar ser de esos que se ríe por lo bajini como a quien le cuentan un chiste. Como si eso no fuera conmigo. Como si el resto de los mortales estuvieran delirando sin darse cuenta y yo fuera el único que lleva las gafas de sol de Están Vivos. No voy a decir que esta película haya cambiado mi forma de pensar sobre ciertos temas, porque de ser así sería una persona demasiado influenciable. Pero obviando spoilers, debo admitir que cuando vuelve a salir el puente al final no me reí. No pensé que la representación de la creencia en la otra vida fuera un chiste. Aunque no la comparta.

Probablemente esto no sea una buena crítica de la película, pero sí de lo que me hizo sentir y reflexionar. Hay muchos temas que son secundarios en Coco y que me parecen muy interesantes (incluyendo la autoría de las canciones, por decir un ejemplo). Pero la creencia en la vida después de la muerte y lo que realmente significa para el ser humano, ya no solo como una idea religiosa sino como una motivación por querer trascender. Eso es algo que puedo entender y que quizás nunca me había parado a pensar que podía estar relacionada de forma tan profunda con esa creencia. La vida por suerte o por desgracia se acaba, y dudo que vaya a cambiar de opinión sobre la idea que tengo del después. Pero lo que la gente recuerde de nosotros depende de los que se quedan y en eso estamos todos de acuerdo, creamos en lo que creamos.

035.txt

Otra obra maestra de la dupla

Obra maestra animada de la dupla Pixar*disney. Imaginativa, divertida, emotiva y deslumbrante visualmente. Mama coco, Miguel, Héctor, la abuela, los alebrijes; entre otros nunca serán olvidados por los espectadores. La celebración de un día tan festivo como el de los muertos y las tradiciones mexicanas quedan plasmadas en la película de manera excelente, un aire a cine clásico en cada encuadre. La música, la acción, el drama, los estupendos personajes, la ciudad del mundo de los muertos, los decorados simplemente espectaculares. Excelsa animación y hasta con un toque macabro que enamora tanto a engendriños como adultos. Por ahí se deja ver una ligera crítica política de inmigración. Tratada con detalles originales en su historia, las bellas canciones y escenas que mueven las fibras más sensibles de inicio a fin. Inevitable que nos roben las lágrimas y más aún con los cinéfilos mexicanos familiarizados con la ambientación de la película. Sencillamente hermosa, inventiva y profundamente conmovedora.

036.txt

Los que se van y los que se quedan

Con cada nueva película, cabe preguntarse lo mismo. ¿Tiene techo la imaginación desbordante y el talento de Pixar? Sea quien sea el director (en este caso, el debutante Adrián Molina y el muy experimentado Lee Unkrich, que así a bote pronto ha co-dirigido Toy Story 3, Monstruos SA o Buscando a Nemo), la casa del flexo Luxo Jr sigue asombrándonos con cada nueva cinta. En opinión de quien esto firma, sólo tres veces han patinado (Cars 2, Monstruos University y El viaje de Arlo), y en ninguno de esos casos eran películas execrables ni mucho menos, sino sencillamente lejos del nivel al que nos tienen acostumbrados Lasseter y los suyos. Porque de eso se trata Pixar... ser muy exigentes con ellos porque sabemos lo que pueden dar. Por ello, cuando hacen películas menos logradas, aunque sigan dándole sopas con hondas al resto de cintas animadas o no animadas del año, parece que hay que lanzarse a su cuello. ¿Injusto? Seguramente, pero esa es otra reflexión. Hoy toca hablar de Coco, y hay que hacerlo con regocijo, porque Coco es una cinta maravillosa.

Esperen a ver la recreación que se hace del pueblo mexicano donde viven Miguel y los Rivera. Esperen a recrearse en la maestría con que se ha dibujado en pantalla a la muy anciana Coco (sus arrugas, sus ojos, su pelo). Esperen a escuchar las canciones originales de la película. Pero sobre todo esperen a ver el espectacular diseño de la ciudad de los muertos para caer de espaldas

maravillados por el dominio de la animación que tiene Pixar. Se dice una y otra vez con cada nuevo lanzamiento, pero es que es la verdad: no tiene parangón la habilidad de esta compañía en lo que a animación se refiere. El realismo que han alcanzado es escalofriante de puro bueno.

Pero nada tendría sentido si la historia no nos atrapara. Y Coco atrapa. Atrapa porque es emotiva (de hecho, quizás es la más emotiva junto con Up), porque es divertida (atención al perro Dante), porque apunta social y políticamente con acierto (las aduanas entre los vivos y los muertos), porque es adulta como ella sola (imposible que los niños más pequeños capten el trasfondo), porque reflexiona sobre la fama y el auténtico éxito y porque tiene unos personajes encantadores y maravillosos (ojo a Héctor...). Son tantos los momentos, tantas las escenas maravillosas, tantos los detalles que sin duda hay que verla más de una vez para captar todo su contenido.

Una nueva obra maestra de Pixar, y la mayor carta de amor a México que jamás ha hecho el cine americano. Bienvenida.

037.txt

Excelente cuento infantil

No he visto llorar a tantos adultos en el cine como con esta película además de enseñar al público infantil el sentido de la muerte de una manera tan didáctica, amena y suave (no como otras del estilo). No es una película de humor, sin duda es una historia profunda y seria por muy amigables que sean los personajes y por muy delicadamente se trate todo el tema que rodea a la muerte.

038.txt

Canción y familia

Qué maravilla de película. Esta cinta ha logrado que me emocione como nunca lo había hecho, y además durante un largo final.

Coco habla de muchísimos temas: del dilema del artista, de la familia, del recuerdo, de la muerte, de la música, de la traición... Y todos los toca con estilo y buen gusto, con un apartado visual alucinante y una capacidad para emocionarte fuera de serie. Logra que pese a tratarse de una estructura básica y que incluso se podría considerar predecible, llegues a un clímax lleno de los

sentimientos que se nos mostraban en la gran última película de Pixar, Del Revés, mezclando alegría y tristeza cómo nunca se había hecho. Tocar temas tan profundos con películas tan bellas y con argumentos interesantes está al alcance de pocos.

Me gustaría mencionar el diseño y la narrativa de los personajes, pues si conseguimos sentir lo que ellos sienten es porque sus motivaciones son universales, pero a la vez está integrados en la cultura mexicana y nos transmiten su forma de vida como pocos lo han hecho. Destaco también los valores que transmitirá a los más pequeños esta cinta, que a mi parecer es una genial manera de hacerles entender la muerte.

A nivel audiovisual es también una pasada. Tenemos un diseño gráfico de personajes y escenarios coloridos y llenos de vida, con una animación divertida y precisa; y además canciones bellas, profundas y pegadizas.

A mi me ha parecido una obra maestra, de las mejores del estudio.

039.txt

MAGNIFICA !

Una de las mejores películas que he visto. No soy fan de Disney debo admitir, y de hecho mis géneros cinematográficos preferidos son diametralmente opuestos con las historias infantiles de la casa del ratón, pero Coco es de aquellas joyas que uno descubre y tras ser visionada te deja una agradable sensación en la retina y el alma.

La animación espectacular, la historia entretiene y con un giro en la trama más que acertado, personajes coloridos y divertidos, temas musicales geniales y sobretodo, al final una evocación a los mejores recuerdos de la infancia, que planteamiento más dulce y conmovedor. Créanme, vi a muchos adultos con los ojos vidriosos en la sala de cine.

Tengo entendido que en México fue un éxito rotundo. Y en el resto de países latinoamericanos creo que no podía ser diferente, que historia extraordinaria, recomendable para todas las edades. Pocas veces ves a la gente aplaudir cuando los créditos aparecen al final de una función.

040.txt

Para pequeños y mayores

Volvemos a tener una película de gran calidad. Íbamos bastante escépticos a verla pero es un film que sorprende bastante y los mayores pueden ir a verla sin problema porque es muy tierna, especialmente en todo lo que tiene que ver con el fallecimiento de los seres queridos.

Nos ha gustado tanto que tenemos que dar la máxima puntuación. Realmente recomendable.

041.txt

Pues no me lo esperaba...

Básicamente no me lo esperaba porque últimamente Pixar, tiene la extraña manía de sacar sus desperdicios, como "Cars 2", "Monsters University" o "Buscando a Dory" que para mi gusto, fue más aburrida que la genial "Buscando a Nemo". Si a eso añadimos que últimamente la animación está de capa caída con títulos creados por mero entretenimiento a base de chascarrillos desgastados como bichos amarillos escandalosos o caídas torpes, pues no es de extrañar que cuando vi Coco, mis perspectivas andarán por los suelos. El cartel y la estética de la película la verdad es que llaman la atención desde el minuto uno, pero no sería la primera vez que entras y te encuentras con que la estética y la atmósfera que rodea la película es, realmente lo único en condiciones que tiene el film. Pero Coco sorprende por la capacidad de atrapar al espectador desde el primer minuto. Por lo bien escrita que está, y sobre todo, por el tema que trata, el respeto a nuestros difuntos. Un tema que si te toca de cerca, puede ser que la película te haga pasar un rato algo amargo e incluso, como es mi caso, soltando alguna lágrima. Coco nos hace de nuevo recuperar la fe en la animación, e incluso la fe en otros ámbitos de la vida. Una historia conmovedora, que desde luego si remueve conciencias no es al estilo barato que Hollywood nos tiene acostumbrados. Se ve que el equipo se ha empapado de cultura Mexicana y todas las reacciones que nos conmueven son reales. Un 10 por el excelente trabajo realizado a los dos estudios, que sin duda, si siguen así, van por el buen camino.

042.txt

UNA EXCELENTE CARTA DE AMOR A MÉXICO... UN PELICULÓN

Miguel es un joven con el sueño de convertirse en leyenda de la música a pesar de la prohibición de su familia. Su pasión le llevará a adentrarse en la "Tierra de los Muertos" para conocer su verdadero legado familiar.

A Pixar lo llevo siempre dentro en mi corazón, cada película y cortometraje que sacan es sinónimo de calidad. Monsters Inc., Wall-e, Los Increíbles, Up, Intensa-mente, la lista sigue. Incluso mi primera experiencia en el cine solo fue con Wall-e en el desaparecido Cine Chaplin.

Sé que hay gente que piensa que Cars fue un gran bajón y que los últimos años sacaban secuelas de películas exitosas (Cars 2 y 3, Monsters University, Los Increíbles 2 que llega ahora este año, etc). A mí personalmente me gustan esas películas, no sé porque las machacan tanto.

Me faltan ver algunas, pero siempre Pixar con Disney me alegran el día y eso es lo que sentí cuando vi Coco ese día.

Coco se estreno recién el año pasado en México y en Estados Unidos y recién nos llega acá con el Globo de Oro a mejor película animada, con las mejores críticas y yo pensaba que, tras ver los trailers tantas veces en el cine cuando iba a ver otras animaciones, iba a ser una experiencia excelente e inolvidable.

Llego ese día. Viernes, función de las 18 hs, versión castellano, ambiente ideal (día nublado) y sala llena. Tras los adelantos de Hotel Transylvania 3 y Los Increíbles 2 (espero que no sea tan infantil) empieza una producción que, yendo al grano, es una carta de amor para México.

La animación es muy hermosa, muy realista, la textura como está realizada.

Los ambientes son muy bien conseguidos, muy coloridos y llamativos.

Los personajes son excelentes. Miguel, el protagonista, que quiere ser músico como su pariente Ernesto De La Cruz pero una tradición familiar le impide que cumpla su sueño y hará lo posible para conseguirlo, cumplir sus metas y que lo acepten como es. Me gusto como estaba animado, Luis Ángel Gómez Jaramillo le da una voz preciosa y hace que te encariñes con él. Aparte canta muy bien.

Pero en el medio nos encontramos con otros personajes. Héctor con la voz de Gael García Bernal (ya sea en voz original y Latinoamérica) realiza un papel sorprendentemente increíble. Al principio lo vemos y decimos: -Meh, que personaje molesto y pasajero va a ser, pero increíblemente te encariñas con él y lo quieres ver siempre en pantalla.

Marco Antonio Solís como Ernesto De La Cruz... si, no estoy mintiendo. Marco Antonio Solís participa en este doblaje, así que fanáticas vayan a verlo... escucharlo en este caso. El realiza un buen papel como el cantante, es muy convincente. Admito que no lo reconocí por la voz.

Después las demás voces están bien, encontrando sorpresas como: Angélica María, César Costa, Héctor Bonilla, Andrés Bustamante, Xavier López "Chabelo", Alfonso Arau, entre otros. Todo el doblaje me gusto.

La dirección de Lee Unkrich y Adrián Molina está muy bien realizada, como le pusieron pasión a la cultura mexicana.

Pero el punto más fuerte es la música. Michael Giacchino realiza una muy buena... pero las canciones les ganaron. No hay una sola canción que me haya disgustado, pero el más memorable fue Recuérdame. Dios mío, qué gran canción.

Me sorprendió que el guion metiera unos giros sorprendentes, da una vuelta de tuerca a todo lo que estábamos viendo en ese momento y es más llevadero.

Admito también que lllore dos o tres veces (mas en la parte final), el que vaya al cine y no lllore, es una piedra y no tiene alma.

También me gusto que encontrara referencias a Wall-e, Toy Story, El Cadáver De La Novia, Regreso Al Futuro, entre otros. Aparte hay cameos de famosos mexicanos: El Santo, Jorge Negrete, Pedro Infante, Cantinflas, María Félix, Diego Rivera, Dolores del Río y Frida Kahlo. Cuando aparecían mencionaba su nombre.

¿Si pudiera decir algo negativo? NO. Está bien, tal vez la historia sea muy simple pero el desarrollo en general es muy compleja y te interesa cada detalle.

Y cuando termino todos aplaudimos. Eso significa: Cumplió las expectativas.

En resumen, COCO ES UN PELICULÓN, directamente a las mejores de este año... y eso que recién 2018 acaba de empezar. El guion, el doblaje, la animación, la dirección. Todo esta excelente en lo técnico. La música y las canciones son buenas. Es una película muy llevadera y le hace un GRAN homenaje a México. Los chicos y los adultos lo pasaran de maravilla. Y cuando llegue a casa me descargue la banda sonora y ahora la quiero ver de vuelta, primero en latino y después en mi casa subtitulada.

Nota: 10/10

Verde, Pulgar Arriba.

043.txt

¿Hay algo que Pixar no pueda lograr?

En una época donde las ideas escasean; donde el arte cinematográfico es dejado en manos de personas sin alma ni talento que recurren a las precuelas, secuelas y remakes continuamente para suplir su falta de imaginación; donde el dinero manda por encima de todo y no se corren riesgos, de

manera que cada vez las películas son más planas e iguales; en definitiva, en una época de pesimismo para el mundo del cine, es cuando Pixar llega con más fuerza que nunca para demostrarnos que el futuro todavía alberga algo de esperanza.

Coco es una película apta para todos los públicos (llamemos a esta clasificación: "A"), pero me temo que ese significado ha ido perdiendo su valor original: una película es apta para todos los públicos (A) cuando ambos, pequeñ@s y adult@s, pueden disfrutarla por igual.

Sin embargo, el nuevo concepto que parece tener actualmente no se parece demasiado, considerando película "A" toda aquella que solo puede gustarle a un niño pequeño, ya que para alguien con más de 5 años de edad resultaría algo tan bobo, mediocre y simple como un capítulo de "Dora la Exploradora".

Esto NO tiene por qué ser así. Y Pixar lo comprende a la perfección.

Lo que hace de Pixar uno de los mejores estudios cinematográficos de hoy en día es su capacidad de realizar películas de niños, para adultos. Estos son filmes cuyo significado progresa conforme el espectador va creciendo. Películas que, además de ser entretenidísimas sin un solo segundo aburrido, son capaces de dejar mensajes educativos y preciosos de verdad para el público de menor edad; y mensajes emotivos, maduros, para el público de mayores años. Coco no es un producto genérico que se limite a decir las cuatro tonterías vacías y efectistas del cine infantil común. Coco es arte en su estado más puro que cualquier miembro de la familia puede (y debe) disfrutar.

Si eres un enanillo, la película te atrapará, por su ritmo, sus carismáticos personajes...

Si eres una persona ya crecida, la película te conmovirá. Porque va dirigida a ti, y tú la vas a entender en su totalidad. Créeme, no importa cuán duro o dura te creas, la emoción está asegurada.

A pesar de ser todavía joven, creo saber apreciar que hay algo en esta película que me hará entenderla y quererla más aún cuando sea unos cuantos años mayor.

Primero y principal, me encanta la valentía que han debido tener para que la muerte fuera el tema

principal del filme. Pero adoro más todavía incluso la forma en la que la han explorado. Por lo general, la muerte en el cine se tiene como algo horrible, triste, oscuro; es sobreexplotada en el cine de terror como la mayor amenaza del ser humano, algo de lo que debería huir hasta el final.

En Coco no es así.

La muerte es tratada con tono divertido, cálido y tranquilizador; no algo de lo que debas huir, sino algo natural, que no es un pozo de lloriqueos. Sin embargo, se luce de verdad cuando vemos el mensaje detrás de todo, y es que la única y definitiva muerte no es el momento en el que nuestro corazón deja de latir, es aquella en la que eres olvidado. Cuando tus historias y aventuras no aguantan el paso del tiempo, desvaneciéndose para siempre en el triste vacío del olvido.

Pero ojo, no se refiere a "si no eres famoso no eres nadie", no.

Es una oda al recuerdo, a las memorias personales. Siempre permaneceremos en los corazones de todos aquellos a quienes hemos amado, a quienes hemos ayudado a mejorar, y quienes nos han amado de vuelta: la familia; esa es la única y mejor forma de perdurar eternamente. Puede parecer algo baboso o sentimental, no obstante, la película lo representa de forma perfecta, sin caer en excesos de sensiblería irritante. Consigue que reflexiones, que aprecies más a tu familia y sus acciones, a todas las personas que se preocupan de ti a veces incluso sin esperar nada de tu parte sabiendo que su esfuerzo nunca será recompensado pero lo hacen igualmente; a los que están y a los que se ya se han ido, porque si es la familia que mereces (tú y todos), te quieren. Y eso... eso es lo más importante del mundo.

El éxito del chico con su guitarra es totalmente secundario. Es el éxito de una familia feliz y tolerante lo que verdaderamente importa.

Sí, admito que estuve al borde de la lágrima (otra vez). Cuando una dirección impecable, un guión simplemente hermoso capaz de transmitirlo todo mediante premisas originales más situaciones maravillosas, y una música tan jodidamente genial se unen, prepárate para convertirte en un niño o una niña pequeña de nuevo. Prepárate para un viaje por un mundo de los muertos rebosante de la imaginación, recursos e ingenio de los que adolece el cine actual.

Estoy simplificando muchísimo, ya que esta película da para horas de conversación.

Si no la has visto, has de verla ya.

Si ya tuviste el placer, espero de corazón que esta crítica haya traído de vuelta esos recuerdos cálidos y acogedores que la película produce, si es que te gustó. Para mí, merecen la pena.

Si te interesa, échale un vistazo a mi blog de cine y cómics:

<http://lalistadealex.blogspot.com.es/>

¡Gracias!

044.txt

El alma de la animación tiene nombre.

Cuando hablo de Coco, tengo en mente que estoy hablando sin duda alguna de una de las mejores creaciones de Pixar y del mundo de la animación, tanto a nivel artístico como técnico. La calidad de casi todo en esta película roza la perfección; iluminación, diseños, animación como es lógico. Aunque me gustaría darle más protagonismo al apartado de iluminación, ya que juega un papel importantísimo en las películas de animación, sobretudo en esta, y desde luego sobrepasa cualquier expectativa que haya tenido. Por supuesto, Coco brilla, literalmente, cuando hablamos técnicamente de ella, pero ¿Está a la altura la historia que nos cuenta?

Sinceramente, por mucho que a mi me enamorara de pies a cabeza lo que cuenta y cómo lo cuenta, y el protagonismo que le da a la música, la cual es prácticamente un personaje más, en algunos momentos, aunque escasos, baja la guardia y se vuelve un tanto llana y simple. Aunque original, su historia podría resumirse fácilmente y el patrón es repetitivo, lo que suele ser el problema de la mayoría de películas de Pixar.

Por último, no puedo acabar sin darle su propio espacio al corazón de esta película; La música, de la mano de Michael Giacchino. Buscando los momentos más oportunos, y sin llegar a aburrir, es lo que le da la vida a este conjunto de amor y nostalgia familiar, liberada por primera vez después de varios intentos fallidos, lo cual va generando ganas de escucharla y deleita cuando el momento llega.

Con un doblaje original exquisito, las maravillosas letras que haran llorar a algunos y bostezar a otros, claro está, fluyen por la gran pantalla mezclandose con toda la belleza de esta película y transformándola en mi opinión, en la gran Alma del cine de animación.

045.txt

Viaje al Día de los Muertos

Cuando me enteré de que Pixar iba a hacer una película ambientada en el Día de los Muertos en México, lo primero que me vino a la cabeza fue "La novia cadáver". El film de Burton conseguía una magnífica contraposición entre el mundo oscuro de los vivos y el mundo colorido de los muertos. La influencia en este aspecto en la película es clara: en "Coco" se nos muestra un mundo de los muertos también muy vivo y colorido (esta será la parte que más enganche a los pequeños con las disparatadas aventuras que suceden en él, con alebrijes para todos los gustos). Pero Pixar sabe muy bien como manejar a su público adulto y lo hace magistralmente en la primera parte de la película, con un recorrido a través del folclore mexicano ensalzando los valores de la familia (Cry Alert!). Es increíble como ha sido captar la esencia de las tradiciones y como se reflejan en cada fotograma. La historia te atrapa desde lo sentimental y te arrastra como una hoja desde el mundo de los vivos hasta el de los muertos como una suave brisa. Cuando quieres darte cuenta ya estás muerto y recorriendo las calles del "Más Allá" acompañando a Miguel y su alocado perro en busca de un sueño. La música es la clave y han conseguido darle el protagonismo que se merece, con unas canciones inspiradas en rancheras, pero adaptadas al pop actual en demanda, como la lacrimógena "Recuérdame" y la divertida "Un poco loco". Sin duda nos encontramos con la película más Disney de Pixar (sin perder su esencia, avalada por una casi impecable filmografía), pues bebe los vientos de todos los ingredientes que le han funcionado durante décadas a la factoría del ratón: una animación soberbia, unos fondos increíbles, una música maravillosa y un guión bien hilado y resuelto.

En estos tiempos, en los que Pixar también se ha sumado a la campaña de Disney de torturarnos con secuelas de todos sus éxitos (acaban de estrenar Cars 3, y en los siguientes años vendrán Toy Story 4 y Los increíbles 2), y en los que parece que se han quedado sin ideas originales (no hay películas nuevas a la vista que no sean secuelas), Coco se presenta como una gota de agua en el desierto. Una

sola, como la lágrima que mínimo se te escapará viéndola, pero inolvidable.

046.txt

Lo mejor de Animación del 2017

Coco es una obra maestra, la única película del 2017 que supera el 8 en esta nuestra página en español y eso es todo un logro ya que esta página sufre el hecho de que la gente parece no apreciar el cine como debe, por eso esta película tiene un premio más por el simple hecho de tener mas de un 8 de nota.

Coco pocas cosas puedo decir que no sean spoilers así que la parte fuerte de esta opinión estará en la sección de spoilers. Lo que si que puedo decir es que esta película es una maravilla en todos sus sentido, emotiva y emocionante por igual y quizás lo que menos me gusta de esta película es el perro, el elemento destinado a entretener a los niños más pequeños pues esta película es una película muy poco infantil y eso me gusta ya que si de por si Pixar es uno de los mejores estudios de animación que hay en el mundo el que empiecen a hacer películas más adultas y mas inteligentes es algo que me encanta.

Un homenaje a la cultura mexicana usando su fiesta más famosa como ambientación y donde vemos a diferentes personalidades mexicanas como Frida Kahlo durante la película.

Película que se va a llevar casi seguro el Oscar a mejor película de Animación ya que excepto Loving Vincent, no hay obra alguna que tenga posibilidades contra Coco y seguramente su canción "Recuérdame" también sea premiada con el Oscar si no se la lleva "This is Me" de El Gran Showman. Poco más que decir, en la parte de Spoilers voy a poner el porque esta película me gusta realmente.

047.txt

Me volvi un "poquititicoo loco"

La película número 19, es perfecta aunque muestra un enfoque para niños mayores de 12 años, niños mas pequeños disfrutaran de sus coloridos paisajes y hermosa estética, tal vez no entiendan el

planteamiento, pero igual tendrán un entretenimiento de calidad.

Con un arranque excepcional que te da inmersión en la vida de los personajes principales, sus sueños y por lo que quieren luchar, personajes a los cuales te encariñas de una manera que los sientes si fueran parientes tuyos, la historia es una piñata o fuegos artificiales que explotan dando calidad de imágenes , personajes y una banda sonora de lujo. A medida que se desarrolla la historia nos vamos adentrados en un argumento delicioso, que aunque a veces sientas que sea un cliché vistos cientos de veces en el cine funciona a la perfección se te hace un verdadero festín a la boca.

No hay nada en la espléndida «Coco» que la haga poco recomendable a los ojos de un niño, ni a los sentimientos de padres, abuelos o bisabuelos. La pasión por la música y el recuerdo y el respeto por los tuyos, por los todos, es el relleno de esas dos formidables tapas del sándwich que son Pixar y Disney. Si tienes la oportunidad de verla solo dedica 2 horas de tu vida y te sentirás un poquitito loco.

lo mejor : todo

lo peor : que compre palomita de maíz y estuve tan concentrado que se me olvido que había comprado palomita.

048.txt

Puro sentimiento

Con unos planos generales tan impresionantes que te quitan la respiración, y unas caricaturas simpáticas y modernas, Disney ha conseguido dar un paso más allá tratando un tema muy peliagudo que nunca antes se había atrevido a abordar como grueso argumental de una de sus películas: la muerte. Con las grandes dosis de imaginación y fantasía características de sus producciones, la compañía ha introducido a los más pequeños de una forma realmente sublime un tema tan difícil de tratar como importante, distribuyendo grandes lecciones morales.

049.txt

Mexico, atraves de coco

Sin duda alguna, coco ha cautivado los corazones de la mayoría de la gente, desde pequeños hasta los más grandes. Coco es una película de pixar que te llena de magia, por mil y un razones. Desde sus temas coloridos, sus personajes, sus diseños en los gráficos tan precisos, sus canciones y cada parte que compone esta película, has sido tan peculiar y única que ha dejado a sus admiradores con la boca abierta. Una película que te despierta miles de sentimientos, que te lleva a una gran aventura en la que tu quieres ser parte de ella. Hemos vuelto a los tiempos en los que las caricaturas eran tan entretenidas para nosotros. Se volvió el sentirse como cuando querías ver tu serie animada favorita. Coco llenó de miles de sonrisas y lagrimas a los espectadores, dejando así huella en el cine. Más allá de ser un simple caricatura de un niño que esta en busca de ir a la vida de los muertos y conocer a sus antepasados, muestra una riqueza de las tradiciones y costumbres que México tiene y ha tenido a lo largo de la historia.

Enfocandose en una fecha muy peculiar que los mexicanos celebran en el mes de noviembre, el día de los muertos, haciendo referencia a grandes rasgos de como se vive en esa región. Es una historia bastante interesante y bonita al mi parecer porque hace volar más allá de tu imaginación, de sentir dentro de la historia, de emocionarte y querer seguir viendo más. Sin duda alguna, una película recomendada para todo un público en general, en todos los aspectos es muy buena película.

050.txt

Excelente

No es solo una pelicula para niños, en ella se muestran muchos valores sobre la familia y las costumbres mexicanas que no son tan distintas que las argentinas.

Tiene buenas canciones, el guión es muy original y te da un giro inesperado.

Una pelicula que no se puede dejar de ver.

051.txt

Excelente

No hago críticas de cine infantil en general, aunque al tener una hija de 5 años, me podría creer un experto. Pero la verdad cómo la película es tan buena, tan bien hecha, tan emotiva, me pareció que podía compartir mi experiencia con los lectores de ésta página. Es muy agradable ver películas para chicos que no los toman de tontos. Que dan una lección de cómo tratar a los viejos. Y encima es entretenida para los padres que tienen que acompañar a sus hijos a verla. Todo excelente. Muy recomendable, incluso si querés verla sin ningún chiquitín, la vas a disfrutar mucho.

052.txt

La mejor película que ha creado Disney

Me encantan las películas de Disney, muchas de ellas están entre mis películas favoritas, pero esta es sin duda la mejor película que han creado. A pesar de ser una película sobre música no abusan mucho de ella y se basan en crear una bonita historia sobre una familia. No he podido evitar derramar lágrimas con el final de la película, ha sido muy bueno.

053.txt

Para ti, Donald

No existen las coincidencias. Pixar nos trae una mirada positiva del pueblo mexicano en uno de los momentos que EEUU levanta los muros y las banderas del racismo y la xenofobia detras de su mismísimo presidente. Las obras modernas siempre contienen elementos subversivos, Bienvenida Pixar a la militancia humanística!!!

054.txt

Te llevo en mi corazón y cerca me tendrás... recuérdame

¿Qué esperaba de Coco antes de verla?, pues la verdad es que nada, no tenía ninguna expectativa porque aparte de la canción desconocía el argumento y sólo sabía que tenía muchas críticas positivas pero desconocía el por qué. Así que me dispuse a verla sin más ánimo de que fuera por lo menos entretenida y... sorpresa!.

Sólo diré que Coco trata de la muerte pero con un realismo y delicadeza conmovedor, de la familia, del sacrificio, de los sueños por cumplir... En fin, de todo que aquello que mueve el mundo y lo hace más humano, una flecha directa al corazón capaz de conmover a a cualquiera, tanto pequeño como mayor que se preste a viajar junto a Miguel, nuestro protagonista, por el puente que separa y unen una vez al año los dos mundos.

Una delicia de película que te alegrará mucho de a verla visto y sobre todo vivido.

055.txt

La mejor del año

Si bien no califica para mejor película y nada más, para mí ha Sido la mejor de este año. Es para todo público, niños, adultos, mujeres, hombres, ancianos. Está llena de emociones, hermosa, tradiciones que se respetan, simplemente una obra maestra. Supera con creces a todas las películas animadas del último tiempo encantando con hermosas animaciones y bellísimos sentimientos.

056.txt

RECUERDAME.

Pero qué historia más bonita. Esta muy bien narrada, los detalles a los que hace alusiones como los recortables de papel de colores que adornas las calles. La banda sonora es muy buena y te hace cantar las canciones, son muy conocidas. Y la forma de ver el día de muertos, (que para occidente católico es denominado el día de los difuntos) toda la tristeza que le damos nosotros, en ellos es color, fiesta y alegría.

Te olvidad que estás viendo una película de animación. Los sentimientos son transmitidos muy bien y te hacen sentir.

Para mí una muy buena película y creo que se llevara algún Oscar.

057.txt

Preciosa en todos los aspectos

Con un guión muy elaborado, una banda sonora espectacular y una animación extremadamente detallada y muy visual es quizás la más bella película de animación que he visto. Es un lujo. Con las películas de animación siempre tiene uno miedo de que vaya a ser demasiado infantil, pero no es este el caso. Aunque tiene algunos detalles que harían las delicias de los más pequeños, la trama principal poco tiene de infantil. Recomendable para verla en 3d y con un buen paquete de kleenex a mano.

058.txt

Filosofía y poesía hecha animación.

Debo reconocerlo: he llorado viendo esta película.

Últimamente el cine de animación, con la excusa de ser presuntamente dirigida al público infantil, está realizando obras de un nivel espectacular, que, sinceramente, dudo mucho que un crío de 5 años comprenda en su esencia.

Y es que "Coco" trata, mediante el trasfondo del humor, temas trascendentales como el sentido de la vida, el miedo a la muerte, la inmortalidad del recuerdo y su efímero adiós con el alzheimer, la eternidad del verdadero amor, de la familia... da muchísimo más que la gran mayoría de películas contemporáneas con actores de por medio.

Seguramente, la "excusa" de que el cine de animación "no es cosa seria", esté ayudando a que los mejores guionistas y profesionales se escondan tras él. En definitiva, obra ya INOLVIDABLE.

059.txt

PERFECTA Y MARAVILLOSA

Auténtica obra maestra.

La mejor película de animación que he visto hasta el momento.

Le pongo sólo un 10, porque no se puede poner más nota.

060.txt

Hermosa

Hermosa. Así me pareció "Coco" y soy fan de Walt Disney desde que era chico.

La historia es genial:

Miguel es un niño que quiere ser un cantante pero la familia odia la música. Todo sucede en el día de los muertos.

La música mexicana de 10 puntos.

"Coco" es sin duda una de las mejores películas animadas que he visto.

Una de las mejores películas de este año 2018.

Ya sé que es de 2017 pero como la miré en el 2018 la pongo en una de las mejores películas del año.

Encanta también todos los personajes y vale la pena verla.

Es muy entretenida y disfrutable de principio a fin.

061.txt

La fiesta de los muertos

Recordar a los muertos, festejar su recuerdo con la esperanza de sentirles cerca de nuevo, aunque sea por una noche. Coco es una historia surgida de una rica tradición mexicana, la festividad del Día de Muertos. Miguel siente el latido de sus ancestros en la sangre, ese que le hace sentir y amar la música, muy a pesar de la aprobación de su familia próxima. Una bella historia de unificación familiar, de perdón, es la historia de un niño que sigue su propia música y emprende el viaje entre los muertos para encontrarse con la vida, con sus seres amados. Conmovedora, bellamente animada.

062.txt

Espectacular Banda Sonora

Sé que debería valorar a la película en su totalidad, pero es que es escuchar los acordes de cualquiera de los temas de este joya que se me ponen los pelos de punta.

gracias Michael Giacchino por otra obra impresionante!.

Por supuesto, la película es una oda a la familia que te hará sentir muchísimo.

063.txt

LUMINOSA, OPTIMISTA Y LLENA DE COLOR

Se trata de una de esas películas de animación dirigida tanto al público infantil por la complicidad con el protagonista como para el público adulto más capacitado para asimilar la cultura mexicana algo diferente a la nuestra a la hora de afrontar la muerte. Nuestros familiares, viene a decir, pasan a otra vida desde donde regresan para compartir el día de los difuntos con nosotros mientras los mantengamos presentes en nuestro recuerdo. Es un film pleno de luz, música y color totalmente recomendable que transmite la siguiente moraleja “nuestra familia y nuestros amigos, incluyendo a los perros entre estos, son lo más importante”.

064.txt

La mejor película de Disney desde los 90s

Fantástica. Sublime. Yo no soy de películas de "dibujos" y en cambio la he disfrutado enormemente.

La historia, el mensaje, en el plano visual... Todo de 10. No hay realmente mucho más que decir. Es Disney y ya sabemos que en sus películas las cosas acaban siendo muy idílicas, sobretodo al final. Aún con todo, este tipo de obras cuando son de semejante calidad son muy de agradecer. Si tenemos en cuenta que el público al que se dirige es primordialmente infantil o adolescente de temprana edad, el 10 es rotundo en mi opinión.

065.txt

La sangre es más espesa que el agua

Disney-Pixar se viste con sus mejores galas en una fiesta de vibrante colorido, folclore, tradición y, cómo no, pura magia en el marco del desgarrador conflicto de Miguel, un niño cuya naturaleza lo empuja fuertemente hacia una vocación detestada por toda su familia: la música.

Lo que dota a esta película de animación, la cual alcanza cotas de emoción y prodigio técnico

equiparables a “Toy Story 3”, del alma y la profundidad de la que carecen otras películas animadas, es el difícil viaje de este chico que, pese a ser amado, es ciegamente incomprendido. Que el tema sea recurrente no significa que no sea capaz de conmover, pues mucha gente puede identificarse con Miguel en su lucha titánica contra un prejuicio, dentro de su propia casa, que atenta contra lo que él aspira a ser. Su familia lo quiere con locura y desea lo mejor para él, pero se niega a reconocer que el camino del chico es diferente. El pobrecillo no se ve fabricando zapatos el resto de su vida. Eso sería para él como una condena a cadena perpetua en una prisión de máxima seguridad. Siente la llamada de la música, e intentará aprovechar una gran oportunidad que se le presenta en la noche del Día de Muertos, durante la celebración de un festival de nuevos talentos.

Pero, claro, Disney logra que las creencias populares se hagan realidad y la memoria de los vivos juega un papel crucial en el mundo de los muertos, conectando ambos mundos en una noche en la que no podían faltar las aventuras de Miguel en busca de un sueño que su familia le prohíbe.

Vivos y muertos, amor y familia, conflicto intergeneracional, recuerdo y olvido en el viaje de descubrimiento, en el que no es oro todo lo que reluce, de este pequeño que pelea contra viento y marea en su carrera hacia lo que él cree que es lo único que lo hace feliz.

Independientemente de lo que cada uno crea, una cosa sí creo que es verdad aunque sea solamente en un plano sentimental, y es que nadie muere de verdad mientras otros recuerden a quien se va. Porque al fin y al cabo, el Día de Muertos en realidad se celebra para que los que se quedan no olviden a los que se han ido. Y la memoria es lo que somos y lo que hemos sido.

Para ti, que me has animado a escribir esta crítica. Por los viejos tiempos.

066.txt

Genialidad.

Película que me resistía a ver, sin embargo fue una buena decisión terminar viéndola.

Cuenta con una trama muy entretenida, unos guiones bien hechos, una animación excelente y una música fenomenal

Resalta mucho los valores y la tradición. Te emociona literalmente hasta los huesos. Resalta mucho una festividad que por estos lados lo tenemos como el día más lúgubre, y por allá es una fiesta: El día de los muertos.

Una película para verla con toda la familia y más de una vez. Quedará en el anaquel de las películas animadas.

ALTAMENTE RECOMENDADA.

067.txt

TE RECORDAREMOS

Estamos, sin duda, ante una de las obras maestras del cine de animación. Nuevamente PIXAR nos deja embelesados frente a la pantalla. La historia es, por momentos tierna y sentida, y por otros tremendamente cómica. La tradición del día de muertos queda reflejada a la perfección desde un prisma destinado a sensibilizar con el espectador a través del significado del recuerdo a los antepasados y a lo que nos aportaron en vida.

El trasfondo de la película llega a lo más hondo del corazón y el desenlace de la historia nos sorprende y emociona. Se ha convertido en mi TOP 1 en lo que a películas de animación se refiere! Si no la has visto, ¿a qué esperas?

068.txt

Maravillosa

Las películas de la Pixar siempre me han gustado bastante, aunque las tengo "catalogadas" en dos grupos: las que no me dicen nada ("Cars", "los increíbles", "up") y las que, no sé por qué, me llegan al corazón de una manera especial ("buscando a Nemo" o "Ratatouille"). Pues "Coco", sin ninguna duda, pasa a formar parte de este segundo grupo. Tiene una historia completamente maravillosa, con unos personajes inolvidables, una ambientación perfecta, que describe el colorido, la música y la cultura mexicanas de una manera preciosa. El mensaje que transmite me encantó, y me tocó el corazón de una manera muy especial.

Lo mejor: Héctor y la voz de Miguel.

Lo peor: que, sintiéndolo mucho, esta vez no se merecían el Oscar a mejor canción.

Sobre lo que Dejaremos cuando No Estemos

Bien pensado, vivimos la vida en una continua referencia.

Homenajeamos en nuestros actos a los que vinieron antes que nosotros, evitamos pasar por alto los consejos y enseñanzas de nuestros allegados y, al final, no podemos evitar referenciarnos a nosotros mismos, solo para dejar esa huella especial en aquellos que nos importan.

La línea entre una pasión que nos llega por parte de otros y nuestro propio legado se va tornando difusa con los años, a medida que se comprende la importancia de ser recordado, y, sobre todo, de qué manera.

Pocas películas animadas recientes se han enfrentado a temas tan complejos como 'Coco' y han tratado de abordarlos desde el corazón, mezclando sin complejos lo místico y lo emocional, a la vez que evitando idealizar los sueños y condenar las metas humildes.

No hay mayor satisfacción que seguir una pasión, aún cuando el camino hacia ella pueda parecer difícil: así le sucede a Miguel, un muchacho mexicano que trata de escapar de la herencia familiar de zapateros, porque lo que él siempre ha querido es compartir la música de su guitarra con el mundo, como su ídolo Ernesto de la Cruz.

Este último, de hecho, logra configurarse a través de los ojos del joven zapatero en una figura perfecta e ideal, máximo ejemplo de que un sueño solo se cumple si te arriesgas a cogerlo: ahí están esas cintas que ve Miguel con sus mejores momentos, de dudoso gusto cinematográfico pero innegable valor nostálgico, como pedazos de un mundo mejor al que solo se logra acceder si se consigue tocar desde el corazón a un público entregado.

Los temas de fondo de la historia llegan directamente desde esas escenas simples y cotidianas, con Miguel afinando una guitarra mientras contempla el desgastado televisor, y a la vez esquivo la sobreprotección de una familia que nunca le dejará tocar música, solo porque su misterioso tatarabuelo decidió anteponer una vida de fama y guitarra a cualquier otra cosa.

Por un lado, está la satisfacción de servir en una tradición familiar que todos los que le rodean apoyan, pero por otro... está la emoción de tocar en la plaza, sin freno, sin medida, sin más acompañamiento

que las sonrisas de quienes escuchen, capaces de dotar de significado letras que perderían sentido sin nadie que pudiera oírlas.

Vaya, nada que ver entre un taller lleno de familiares trabajando, y un impresionante espectáculo con público y bailarinas coreando.

Por motivos que no conviene desvelar, la entrada de Miguel en la Tierra de los Muertos tiene lugar siguiendo su pasión musical, pero lo más interesante es la expresión que allí alcanza su dilema: perseguido por una familia no-muerta que le recuerda la importancia de pertenecer a una ofrenda del Día de Muertos, prefiere aliarse con un esqueleto vividor llamado Héctor para ir a buscar a su ídolo y así hacerle saber que a donde realmente quiere pertenecer es a la música, mientras su cuerpo va disolviéndose en forma huesuda a medida que se acerca el amanecer.

De alguna manera, Miguel sigue intentando liberarse de un entorno limitado y acaparador, como hizo Ernesto de la Cruz en su momento, rechazando una familia a la que por fin puede confrontar amargamente: "nunca me habéis apoyado, que es lo que se supone que hacen las familias".

Sin embargo, es justo en el momento en el que se enuncia esa frase en la que nos damos cuenta de que quizás su tatarabuela Imelda no es la villana que hemos estado percibiendo, persiguiéndole y amenazándole con una bestia mítica, sino una mujer dolida que hizo todo lo posible por mantener su familia unida.

Al igual que antes hemos visto que Héctor quizá no es un caradura frívolo, sino un abandonado enfrentándose al olvido de no estar en ninguna ofrenda; al igual que después vemos en Ernesto de la Cruz algo más próximo a un pobre hombre, utilizando sus tristes vivencias como inspiración de sus películas en blanco y negro, que parecen más viejas que nunca.

Nadie fue recordado como debería, quizá porque cambiaron pasión encendida por obligación momentánea, e incluso alguno no tuvo la oportunidad de enmendar su error.

Miguel se ve reflejado en generaciones anteriores que siguen atrapados en equivocaciones, incluso después de muertos, y decide que con él podría terminar el círculo: la pasión por la música y el necesario legado familiar pueden convivir, siempre que ambos estén dispuestos a tenderse la mano. Y aún más, ese cambio de sentido emocional puede arreglar un cuadro familiar largo tiempo quebrado, tal es la magia del Día de Muertos, que revive la presencia de los queridos, solo para que

nos demos cuenta de todo lo que nos han dejado, tanto bueno como malo.

Pixar, en esta historia, consigue algo bastante especial si se piensa bien: habla de tradiciones, de herencias, de eternos inmutables... y demuestra que nunca es demasiado tarde para cambiar, ni se es demasiado esquelético para no luchar.

Tan sólo hace falta recordar...

"Recuérdame", la misma grandilocuente balada que canta Ernesto de la Cruz al principio, adquiere otra dimensión al final, más sencilla, más bonita, más íntima.

Justo en ese momento una pasión y un legado familiar alcanzan una comunión especial: la clave en la aventura que hemos vivido, y la prueba de que ambos mundos se pueden encontrar.

070.txt

Crítica de Coco por Cinemagavia

Es innegable que Coco es un colorido y festivo homenaje a la tradición mexicana del día de muertos, la celebración que sincretiza perfectamente las raíces de este país: la tradición cristiana amalgamada con el culto indígena a fin de honrar a “los fieles difuntos”.

Pero como todo homenaje, en su afán de celebrar puede tomarse algunas libertades creativas si las cree necesarias para llevar a cabo su propósito.

Es un hecho que Disney Pixar ha tomado diversas tradiciones, leyendas y lugares en el mundo para colocar en ese contexto los escenarios de sus historias y de esta manera han desfilado en su producción cinematográfica desde los países nórdicos hasta las islas del sur; ahora en su película número 19 el turno fue para México.

La historia está cimentada en los puntos esenciales de la concepción del mundo del mexicano: la tradición, los valores, la familia, la cercanía con la historia familiar y las peculiares formas de estructura de mando y desempeño de roles que se dan dentro de “la casa mexicana”.

Como suele suceder en la gran mayoría de los hogares del país, en la casa de los Rivera, hay un marcado matriarcado, la figura de la madre es la piedra angular en la tradición de la familia mexicana. Y su importancia aumenta en cuanto se convierte en Abuela y más aún, Bisabuela...

El otro punto de esta trayectoria naciente en la familia es la preservación de las tradiciones, el sentido del significado de toda una serie de rituales y creencias basadas en esa singular celebración de la vida que nunca acaba, aunque cambie radicalmente de espacio y de configuración, la muerte en la cosmogonía mexicana es simplemente ese otro sitio donde se va pero que no cierra sus puertas cuando de fiesta y celebrar se trata y por ello los difuntos, la familia (la sanguínea o la extendida que son igual de importantes) celebran con todos los que quedaron atrás, en el mundo de los vivos. Con una única condición: No perder el recuerdo de quienes se fueron.

Y en esta fiesta, nada es imposible, ni suficiente: nunca sobra ni la alegría, ni el recuerdo, ni la decoración, ni la comida, las flores y mucho menos el alcohol.

Se baila con la muerte, se le dicen piropos, se le hacen versos, es una gran y rumbosa fiesta de la vida de la muerte. Esto lo captaron perfectamente Adrian Molina, y Matthew Aldrich los creadores del guión de Coco; y le dieron su propia visión. Sí, tal vez no es netamente mexicana, pero usa la iconografía, las bases, los colores, los sabores y la tradición. La muerte en México no es cualquier calaquita temblorosa.

Co-dirigida por Lee Unkrich y el propio Molina, Coco potencializa y pone en una plataforma mundial la fibra de lo que significa ese día para los mexicanos, Coco es un esfuerzo absolutamente admirable por comprender y transmitir el sentimiento del día de muertos. Cuando Abuelita (Victor/Angélica María) se empeña en que Miguel entienda el significado de la ofrenda del altar de muertos, no simplemente es un dialogo explicativo, lleva implícito mucho de lo que es el sentir “a la mexicana” sobre el recuerdo, los lazos indisolubles entre la familia y los amigos.

Para cualquier público a lo largo del mundo resultará claro el mensaje: la preservación de la memoria

hace fuerte a la familia, le da centro e identidad.

Sin duda en algunos rincones del mundo será sorpresivo e inquietante ver “esqueletos y cráneos” viviendo semejante cantidad de aventuras porque los cadáveres móviles son identificados con zombies malvados. Pero bueno, es tiempo de que el mundo se entere de que en México los muertos no regresan como demoniacos seres come cerebros, sino como divertidos espíritus que devoran mole, pan, fuman cigarritos y beben y beben alcohol, para luego echarse un zapateado con un jarabe tapatío o una jarana. Los esqueletos en México son famosos, crean performances como Frida Kahlo y hacen fastuosos shows musicales.

Qué otro elemento tiene la película? bueno, como ya ha demostrado antes, Pixar ha encontrado una fórmula de “tocar los sentimientos” catapultando la añoranza como un misil con alto grado de detonación. Y se las ingenia para dar a Coco y a Miguel algunas de las escenas más efectivas al respecto. Pero su resonancia es mayor dada la real implicación de esas escenas: Ver un niño que lucha porque a su bisabuela no se le olviden sus recuerdos infantiles, es conmovedor.

Otro acierto de la cinta es su capacidad para dirigirse a un sector que había estado relegado durante años en las grandes producciones animadas, los latinos y específicamente los mexicanos. Esto hace que esta película represente un paso importante dentro del desarrollo de Pixar como empresa de entretenimiento mundial.

Coco es resplandecientemente autóctona y aunque su versión del Mictlán es bastante revolucionada y tropicalizada a lo Hollywood hasta hacerlo parecer una versión retro-futurista, lo verdaderamente significativo es la apertura de reinterpretación que demuestran los creadores del concepto para internarse en la ideología mexicana y reinterpretarla.

Elementos no les faltan, eso es cierto. La imagería popular con respecto a la muerte, que viera en José Guadalupe Posada su máximo exponente, encuentra la inigualable calidad de los adelantos técnicos en animación que Pixar ha integrado a sus cintas. Cada cuadro del viaje de Miguel “al otro lado” es una obra maestra en conceptualización, color, diseño de producción y técnica.

Si la historia nos recuerda esos míticos viajes del héroe al estilo katabasis (en este caso no es precisamente un descenso sino un cruce al inframundo folclórico) para encontrar las raíces en busca de un sueño,

.....Coco es un canto profundo, sensible e increíblemente sólido y bello por todos los significados que una obra dedicada cariñosamente a México y a sus tradiciones puedan encerrar.

Escrito por Fabian Quezada Leon

<https://cinemagavia.es/pelicula-critica-coco-disney-pixar/>

071.txt

Lo hermoso de la mexicanidad...gracias Pixar

Hoy fui con mis hijos a ver la última película de Disney-Pixar....Coco, y esto mas que una crítica, es lo que yo sentí como ciudadano mexicano (orgulloso de serlo), ya que hoy estamos en medio de una crisis de identidad, violencia, de gobierno y de valores...por lo cual, el ir al cine y ver una cinta como esta, me llenó de alegría y me recordó que los mexicanos somos cosa aparte.

Coco es un colorido y festivo homenaje a la tradición mexicana del día de muertos (la cinta gira en torno a esta temática). La historia se basa en los ejes centrales de la mexicanidad como concepto: las tradiciones, los valores, la familia, la música, la festividad, el canto, los colores, las artesanías, la gastronomía, el arte, su prehispanidad y en general todo lo que nos enorgullece y nos hace diferentes a muchos otros países y/o culturas.

No en balde somos uno de los centros turísticos mas importantes a nivel internacional, gente de todo el mundo visita México.

Los lazos sagrados entre la familia y los amigos, son resaltados a lo largo de la película. Para cualquier mexicano ver una cinta con estas características va a ser algo muy placentero, ya que en el fondo, esto es un merecido homenaje a todo lo mejor de nuestro país, y que bueno que la mexicanidad sea un ejemplo digno de admiración para muchos a nivel internacional.

Mis hijos salieron fascinados del cine, y yo mas que satisfecho.

072.txt

Viva Mexico ca....., su cultura y sus colores

Excelente reflejo de la iconografía de la noche de los muertos mexicana. Un deleite para la vista. Le sobra algo de sensiblería, pero es muy recomendable y quedará como uno de los top de Pixar y Walt Disney.

073.txt

Los recuerdos nos salvan

Una cinta deslumbrante en su aspecto visual, cuidada en su argumento y mágica en sus resultados. Como mexicano, ignoro como se perciba en el extranjero (pero no importa, Moana hablaba de otra cultura muy distinta y funcionaba). Sobre todo destaco dos cosas: El evidente respeto que Pixar y Disney mostraron por la tradición del Día de Muertos. Es un homenaje sincero y se agradece. En segundo lugar, el tema central: el recuerdo que nos dejan nuestros muertos. Esa es la clave de la historia. Imaginen a un niño preguntándose: ¿qué pasa cuando uno muere? ¿a dónde vamos? ¿qué pasa si nadie nos recuerda? Todos nos hicimos estas preguntas de chicos, y esta película te da la respuesta: los recuerdos nos salvan. Y si los estás perdiendo, recobrarlos será su máxima recompensa. Pocos temas tan profundos como este en una película infantil. No es la mejor película de Pixar, pero es un muy pero muy digno esfuerzo, sobre todo tomando en cuenta que trata de una tradición, a ojos de los "gringos", extraña y fascinante.

074.txt

"Conoce más de coco"

En Coco de los directores Lee Unkrinch y Adrián Molina demuestran que ante grandes expectativas las cosas no salen mal, sino que cuando quieres hacer algo bien, te sale algo sorprendente. Existen libros y voces que a lo largo del tiempo han dicho que es necesario recordar nuestras raíces familiares para comprender muchas de las acciones o situaciones que como individuos vivimos día

a día debido a lo que heredamos de nuestros antepasados. Si se logra comprender eso, se podrá vivir más en paz y armonía, se comprenderá por qué la familia es como es.

075.txt

La película que sabe el valor de México

Por primera vez en la vida, disney pixar publican una película primero en México que en Estados Unidos Americanos, la película nos deja una gran enseñanza de la familia, el valor que tiene cada una y como es tan importantes. Por fin hay una película que nos describe el día de muertos tal y como es.

Es una película muy emotiva, que representa de manera fiel la cultura mexicana y sus tradiciones, desde detalles tan precisos como el altar de muertos que te dan cada significado de cada cosa, hasta la música que existe típica en México.

Representa el peso que tiene la palabra de la señora en la casa, el como hacen dar a entender que sin la mujer es más difícil todo.

El respeto que se tienen entre familia, a los difuntos y el amor eterno e inolvidable.

076.txt

Un imprescindible torrente de colores, música y entretenimiento

Pixar lo ha vuelto a lograr, ‘Coco’ sitúa otra vez al cine de animación en un nivel superior, la productora de los sueños nos trae una mágica explosión de creatividad, ingentes dosis de entretenimiento, valores a borbotones, una hipnótica banda sonora y un mundo rebosante de color.

Sin duda alguna estamos ante la película de animación del año, la mejor de la productora desde ‘Inside Out’, uno de los títulos imprescindibles de estas Navidades y una clara candidata a llevarse el Oscar en su categoría. ‘Coco’ no tiene la personalidad de ‘Del revés’ pero su guion rebosa solidez, tampoco ofrece grandes dosis de humor, pero Lee Unkrich y Adrián Molina han logrado crear un mundo con la idónea proporción de elementos capaz de ofrecer un sensacional producto. Todo ello acompañado de unos adorables personajes, del primero al último, que te seducirán con su entrañable

y dulce hacer mejicano del que tan inteligentemente se ha empapado la película.

Mayores, no deberíais dejar pasar el fascinante mundo de 'Coco', pero sobre todo no privéis de su disfrute a los más pequeños. Una clase magistral sobre la familia, la lealtad, los sueños y la aceptación adornada de una manera tan simpática, divertida y magistral que dejará boquiabiertos a los más peques mientras sin darse cuenta sus cuerpecitos bailan las canciones de Miguel i el resto de entrañables personajes ¡Que viva México carajo!

Lo mejor: una fantástica historia en un encantador mundo, bailada al son de una pegadiza banda sonora por sus entrañables personajes.

Lo peor: un producto que disfrutarán más los pequeños de la casa pero que aun así seguro encantará a los mayores.

Más en Más en www.magazinema.es y www.estovacine.blogspot.com.es

077.txt

Crítica 'Coco'

Píxar en la película de Coco, honra y da lugar a los difuntos de las personas, haciéndolo de una manera cercana y humana, nos recuerda lo necesario que es el tener nuestras tradiciones vivas y nuestras relaciones familiares, Coco, se ha convertido en un éxito entrañable para muchos mexicanos, ya que muchos se sienten identificados con la historia, que a lo largo de ella va llena de sentimientos, emociones y vivencias con las que muchas personas se pueden identificar. Los productores realizaron una labor exitosa en su recorrido por los lugares en que se basaron para crear Coco, realizando investigaciones enormes y logrando un gran filme, dando toques mexicanos específicos que te hacen sentir parte de la historia.

Es muy recomendable ver esta película, que te hace sentir dentro de la historia causando emociones y recordando nuestras propias historias.

078.txt

Qué forma tan bonita de contar cosas tan complicadas

Pixar vuelve a hacer un ejercicio admirable de contar cosas complejas con una dulzura emocionante. Lo hizo en Inside Out (Del revés) con los sentimientos y lo ha vuelto a hacer en Coco con todo lo que rodea a la muerte. Una película para adultos que también disfrutarán los niños y de la que pequeños y grandes se llevarán importantes reflexiones.

Pasa por algunos minutos un poco espesos en su parte central pero no tarda en remontar el vuelo.

079.txt

una gran enseñanza

A mi parecer esta película es una gran enseñanza para nosotros ya que nos muestra lo importante que son nuestras costumbres y nuestras tradiciones, también lo importante que es el cariño, el amor de la familia y el apoyo incondicional que ellos te brinden para ser lo que tu quieras ser, si no recibes el apoyo de ellos puede que tu quieras lograrlo solo pero no hay nada como ser apoyado al menos por alguien, también nos enseña lo importante que es ser recordados lo importante que es el que no nos olviden, igualmente es importante mencionar que el trabajo en equipo es mejor, trabajas bien y mas rápido, en si me dejo como enseñanza que sea como sea la familia es primero no hay cosa mas importante que ella y si tu familia te quiere te va a apoyar en lo que sea, sea lo que ellos quieran para ti o no.

080.txt

Una canción para recordar

Con su última película, al fin, la factoría Pixar ha roto la “mala” racha culpable de títulos como El viaje de Arlo, la continuación de Buscando a Nemo o la segunda secuela de Cars, trabajos que, aunque no del todo desmerecidos, carecen de la redondez a la que nos tiene acostumbrados en sus películas. Coco llega en el mejor momento, para criticar las nefastas políticas del actual presidente

de los Estados Unidos, Donald Trump, y mostrar su más sincero apoyo al país del tequila y rendir un más que digo y maravilloso canto de amor al folclore y la cultura popular mexicana «como los mariachis, las rancheras, el xoloitzcuintle, los alebrijes o el papel picado».

Coco es una película de animación sorprendentemente enriquecedora en todos los aspectos, tanto en lo visual como en lo emocional. Es un festín de color, texturas, detalles y nuevas ideas, pero, sobre todo, de expresiones y matices emocionales. Además del homenaje tan obvio al Día de los Muertos «esa festividad de carácter espiritual que honra a los difuntos sirve aquí como nexo de unión entre dos mundos: el de los vivos y el de los muertos», contiene claras referencias cinematográficas; desde un guiño a las películas del oeste «con esa abuela enfundando la chancleta al más estilo pistolero» hasta las habituales referencias a otras películas de Pixar «con objetos de algunos personajes de anteriores films», como también un homenaje a personajes célebres mexicanos como el caso de Frida Kahlo «convertida en una inspirada directora artística que crea la puesta en escena del show de un famoso cantante». Coco es una estupenda película que tiene sus peros, como los tramposos amagos de acabar más de una vez «es como si le costara llegar al apabullante final».

Pero, fundamentalmente, el film sirve para mostrar su más profundo respeto hacia la familia, la música y los sueños, pero por encima de todo es un ácido alegato contra la enfermedad del Alzheimer. Una emotiva historia donde el papel no es el único recordatorio de nuestros seres queridos, sino que la música también nos ayuda a recordar y donde nos hace ver la importancia de la familia y que tiene su apoyo y ayuda para alcanzar nuestros sueños.

081.txt

tradiciones

en esta película sin duda hicieron un excelente trabajo, porque a pesar de que la película es animada y quizá el nombre no sea tan llamativo te deja un muy buen sabor de boca y aprendes cosas sobre la tradición de Día de Muertos. Es una película que es tanto para niños como para adultos, tiene escenas muy tristes pero que son ciertas y hay escenas en donde te hacen razonar y reflexionar las cosas que debes hacer para que tu altar de muertos sea mucho mejor.

Es algo muy Mexicano, todas las canciones que pasan en ese lapso fueron creadas por cantantes Mexicanos y eso hace que le de un toque mas especial a esta película. desde que empieza hasta que termina esta misma atrapa toda tu atención ya que todo lo que pasa es importante y tiene ese toque de encanto y que sabe jugar con tus emociones perfectamente . Es algo que a nosotros los Mexicanos nos hacia falta, conocer mas sobre las culturas y saber el significado de las cosas que hacemos o ponemos en los altares cada año. lo bueno de esta pelicula es que te enseña las cosas de una manera muy divertida y diferente a como regularmente son.

082.txt

Vuelve la mejor Pixar

'Coco' ha resultado ser mucho mejor de lo que esperaba, probablemente la mejor peli de Pixar desde 'Toy Story 3'. Su guion no es tan sofisticado como el de 'Inside Out' y emocionalmente quizás no tenga el calado de 'Up', pero está armada con maestría para que resulte mortalmente divertida (¿lo pilláis?, no sé cómo no usaron este eslogan :D), y conmueve porque no hay sensiblería impostada en la propuesta, sino un sincero sentimiento de pérdida a través de la muerte y reparación mediante el recuerdo compartido. Si a eso le sumamos el habitual despliegue técnico de la casa y una plasmación respetuosa del folclore mexicano (lo dicen los mexicanos, no yo), tenemos una gran película. Por fin ha regresado la mejor versión de Pixar.

083.txt

La magia de Pixar.

Soy un gran fan de Pixar y es que pocas compañías pueden presumir de tener tantas películas de tan alto nivel en su haber como ella por eso cuando se anuncia una nueva producción en donde estén detrás ya es motivo suficiente para ir a ver sus películas al cine, por lo menos para mí. Es cierto que no todos sus trabajos son sobresalientes y que no siempre sus temas e historias me llaman la atención por igual, este es el caso de “Coco” ya que el hecho de estar ambientada en México y en su fiesta de muertos me resultaba un tema lejano y poco conocido pero cuando más conocía su historia, sus protagonistas y sabiendo que Pixar tiene una capacidad única para manejar temas emotivos,

familiares o de amistad más me atraía este proyecto por lo que mi actitud principalmente ante esta película era sobre todo de curiosidad.

Lo primero como es habitual en Pixar es un cortometraje que precede a la película y que en esta ocasión viene envuelto en polémica por varios motivos, el primero porque no está hecho por ellos algo insólito y extraño ya que estos cortometrajes suelen estar muy cuidados y en numerosas ocasiones ser ganadores de premios. El segundo porque el ¿cortometraje? tiene una duración de 21 minutos (sí, si habéis leído bien 21 minutos) llamado “La venturas de Olaf” que sirve a forma de precuela de lo que será “Frozen 2” y que funciona como tráiler extendido de propaganda para Disney algo que no ha gustado nada sobre todo a los más fans de Pixar y sus cortos. Por todo esto Disney ya ha dado orden de retíralo de las proyecciones como repuesta a la quejas, pero en mi opinión la finalidad es la de poder meter algún pase más de la película y así sacar algo más de pasta, yo he tenido la suerte de verlo y aunque está bien y es divertido (atentos al vuelo de la capa de Elsa) se sitúa a años luz de algunos de los cortos vistos anteriormente.

Una vez metidos en plena película llama la atención el color y la ambientación una auténtica delicia que enamora desde los primeros minutos y una presentación de personajes y trama muy ágil que toca numerosos temas como la música, la familia y las ilusiones personales algo en lo que Pixar es experta. Todo lo que muestra es extremadamente Mexicano el aspecto de los personajes, las canciones (que hay bastantes...) e incluso la forma de hablar tanto es así que llega a nuestro país con doblaje latino algo que no ocurría desde hace muchos años y que en principio puede chocar un poco pero que inmediatamente se entiende y se justifica. Es lógico que por todas estas razones esta película haya sido todo un acontecimiento y un exitazo en México.

Pero para los que conocemos Pixar sabemos que todas estas cualidades técnicas son secundarias y que lo que hace grande a esta compañía es esa capacidad mágica que tiene de llegarte al corazón y emocionarte como ninguna otra, esta “Coco” lo consigue sobre todo por su final que está al nivel de

“Toy Story 3” o de los primeros minutos de “UP” una auténtica delicia que te llegara al corazón y te emocionara seguro y que hará que salgas del cine con una lagrima (o muchas...) y con muchas ganas de abrazar a tu familia (en especial a tus mayores), esto es algo que las demás compañías no son capaces de hacer con sus grandes presupuestos ni espectaculares escenas de acción, viva Pixar y su magia y ojala nos traiga muchos “Coco” mas.

Lo mejor: Su colorido, ambientación, historia, personajes, canciones y su mensaje. El final y Mama Coco.

Lo peor: El corto “Las aventuras de Olaf”

084.txt

increible

Es una pelicula increible que hala mucho sobre las tradiciones que hacemos el dia de los muertos, se me hizo muy padre como es ue hasta les pusieron detalles en las caras de todos los muertos y que hasta se habla un poco sobre los alebrijes. Se nota que realmente investigar todo sobre esta tradicion y no les importo que el detalle fuera minima intentaron guiarse mucho por la investigacion.

Tampoco digo que fue increiblemente perfecto sin ningun error o algo asi, todas las peliculas tienen algun error pequeno o grande pero lo tiene. aun asi me facino la eplicula y hasta mis sobrinos se han aprendido la de "Recuerdame" y "Un poco loco". gracias a esta pelicula muchos niños e incluso papás pueden aprender sobre como mexico pasa el dia de los muertos y lo que hacemos para poder seguir recordando a nuestros familiares que ya no estan en este mundo.

085.txt

El último caramelo de Pixar

El último caramelo de Pixar se llama Coco, y es un magnífico homenaje a Mexico. A su música, a su cultura, a su sentido de la familia y a su particular forma de vivir el Día de los muertos. Si yo

fuera mexicano, esta película me haría sentirme orgulloso de serlo. Porque además se nota que está hecha con cariño, y eso es justo lo que Mexico necesita hoy. Cariño para superar la violencia, para recuperar su identidad y volver a ser la potencia económica que un día fue.

A nivel artístico, la película tiene un estilo visual original y muy colorido, con el que simpatizas desde el principio. Desde el diseño de personajes, empezando por la entrañable Mama Coco, hasta el diseño de la tierra de los muertos, los tranvías, los puentes de flores, los animales...

Pero sin duda su punto fuerte es el guión. Una historia que habla sobre el legado, sobre la muerte sin tabúes, y sobre la memoria como homenaje final a los que ya no están.

086.txt

No olvidamos a nuestros muertos

Lo bueno

Pixar resurge de algún modo. Coco nos recuerda la magia de filmes memorables como Up, Wall E, Toy Story o Los Increíbles. El homenaje al folclore mexicano es hermoso, Pixar y Disney nos recuerdan que cuando trabajan como equipo y en una misma sintonía son capaces de crear personajes memorables, secuencias maravillosas y usar la nostalgia sumada con el melodrama para conmovernos y manipularnos de buena forma.

El trasfondo emocional de lo que muestra Coco es enorme. Lo hace con respeto, con cariño, con esperanza. Toma la tradición de Los Muertos mexicana para crear una analogía que no se puede olvidar. Es aquella de que también somos en vida los que nos dejaron. Esa conexión mente. Corazón y espíritu la logra mezclar en un melodrama lleno de color y emoción. Es una muestra sincera y respetuosa. Un recordatorio bello de que la muerte es parte esencial de la vida.

Estoy acostumbrado a ver estos filmes doblados, sobre todo con un doblaje mexicano. Coco tiene uno de los mejores doblajes al español que recuerdo, incluso en su música trasciende y emociona.

El nivel de animación es simplemente de otro nivel.

Las referencias hacia la querida cultura mexicana. Apariciones de cameos de personajes de ese país que son inolvidables.

Los conflictos dramáticos están realmente bien utilizados, hay un par de giros dramáticos que uno realmente no se espera.

El final...desde Toy Story 3 no salía una sala de cine entre tanto lagrimeo por una película de Pixar.

Lo no tan bueno

Creo que esto es una obra mayor de Pixar, y está cerca de la perfección. Es muy emocional, muy volátil y lo único que podría agregar es que reusa fórmulas que sabe que funcionan. Las usa maravillosamente, pero hay repeticiones, algunos pequeños huecos en su argumento. En todo caso, si alguien me dijera que Coco es una obra maestra, yo no tendría reparo en concordar.

9/10

Opinión Final: Coco es un filme que mueve las fibras más finas, tal vez los que hemos estado expuestos a perder un ser querido lo sentimos más. Pero independientemente de eso. El filme es un renovar de fe hacia Pixar. Una máquina de sueños que nos lleva y nos hace sentir que el cine es magia pura. Imperdible en cine.

087.txt

Cordones de Mimbres

Al salir del cine de ver coco la sensación de todos era en general que habíamos visto una gran película de animación aunque poco habitual por el hecho de que se puede leer tanto desde una visión

infantil, dándole un significado concreto, como por el lado adulto, otorgándole un significado dolorosamente distinto, y es que mientras que los niños ven una película disney en la que por una vez no hay princesitas (tampoco la protagonista es coco) llena de colores y con una historia con moralina, los adultos podemos leerla, al menos así lo hemos hecho los amigos que hoy hemos ido al cine y todos hemos salido con la lagrimilla, como un canto de amor a aquellos que padecen Alzheimer tal y como hizo en su momento el Drogas con su canción Cordones de mimbre. En este sentido, coco me ha recordado a la española Arrugas, que tampoco desmerece en un trato más adulto de la enfermedad.

Por otra parte se da la inusual circunstancia de que han respetado el doblaje mexicano para hacer la historia así más fiel al entorno, pero hay términos como albrije, que salen una y otra vez en la película y que, una vez comprobado en internet, poco tiene que ver con el significado totémico que se le da en coco.

Segunda pega: Por favor, en serio que hay que aguantar los 20 minutos del corto de Frozen primero?

088.txt

GENIALIDAD

No hace falta ser brillante o rebosar de inteligencia mayúscula para denotar genialidad, en la originalidad y valentía de manifestar nuestros deseos, emociones, amores, ilusiones y tristezas está ese derroche de genialidad que tienen estos “cracks” de Pixar, siempre tienen una forma de hacer las cosas sutiles y elegantes, geniales y sencillas, sin pomposidad pero con realeza y lo mas importante con claridad y visión; lo mas importante del cine (por eso lo hace tan grande y esplendido) es la capacidad intrínseca que posee de generar una forma de ver las cosas, en otras palabras, generar un punto de vista; esta genial obra no es la excepción, brillante, elegante, fresca y honesta “Coco” es capaz de recrear una atmosfera de sentimiento y satisfacción como pocas películas de su género, el amor, la vida y la muerte son temas tratados con mucha honestidad y paciencia, donde su frescura de relato, su acierto argumental y la muy buena técnica hacen de esta película una total brutalidad; es imprescindible.

Elevarla a lo máximo de la categoría quizás sea merecido, pero la comparación es odiosa (pero igual hay que hacerla), para muchos lo mejor de Pixar en años, para otros no, lo que si es cierto es que al nivel de las grandes como “Up” o “Toy Story 3” tan lejos no debe estar, porque es sencillamente extraordinaria; debemos disfrutarla, aprender de ella y sobre todo reflexionar con ella, porque si algo genial, brillante y cósmico tiene este pedazo de obra, es que es una continua reflexión sobre lo mas sagrado de nuestra existencia: la vida.

089.txt

Recuérdame

La historia nos traslada a México. Su protagonista es Miguel, un niño que tiene como sueño, convertirse en uno de los mejores músicos y cantante de la historia. Pero no lo va a tener fácil, ya que su familia se opone totalmente a esta idea. ¿Lo conseguirá?

Soy una loca de este género y, en especial, de todo lo que hace Disney y Disney Pixar. Y como no podía ser de otra manera, no (me) ha defraudado. Disney Pixar es símbolo de calidad por excelencia y lo demuestran película tras película. Y la pregunta que me hago siempre (como al acabar de ver Coco) es: ¿Conseguirán superarse en la próxima película? Porque parece imposible. Pues para mi sorpresa siempre es Sí y espero que lo sigan haciendo durante muchoooo tiempo.

Un punto a favor para quien la quiera ver, es que si vas al cine sin saber nada o apenas nada sobre ella, va a ser lo mejor. Porque te acaba sorprendiendo y emocionando a partes iguales. Es lo que me ha pasado a mí, que por una vez, no he investigado demasiado sobre ella y es lo mejor que he podido hacer. La sorpresa ha sido aún mayor.

La película está ambientada en México. Y desde que empieza hasta que acaba tienes la sensación de que te has teletransportado al país. Está realizada con mucho mimo y cariño y eso se puede apreciar en cada plano y en cada detalle de la historia. Es un bonito homenaje a toda la gente mexicana y a su cultura.

Con esta historia se han arriesgado a tocar uno de los temas tabú por excelencia, especialmente entre los niños: la Muerte. Y es una película, que principalmente va dirigida a ellos. Lo han conseguido con mucho respeto, de una forma realista pero sin perder esa parte de fantasía, de manera natural y muy divertida.

Para ello no han podido coger mejor tradición mexicana que el Día de los Muertos. Un día muy importante, por no decir el más importante, del país. Donde por un día, los vivos les hacen ofrendas a sus seres queridos que ya no están entre nosotros, para hacerles sentir que no les olvidan. Y siempre desde el respeto y sin ridiculizar esta tradición que es conocida a nivel mundial.

El mensaje que transmite durante toda la película es claro: la familia es lo más importante. Para lo bueno y para lo malo, siempre vas a tener a tus seres queridos al lado. Es el mejor valor que le puedes enseñar a un niño.

Otra de las cosas importantes que les hace ver a los más pequeños, es que una persona nunca acaba muriendo si sus seres queridos les siguen recordando día a día. Por todos aquellos abuelos, abuelas, papas y mamás que se han ido demasiado pronto y que no han podido disfrutar de sus nietos e hijos y que nunca morirán porque siempre habrá alguien que les tendrá en su recuerdo...

Y para hacer aún más impresionante la película, es la maravillosa forma que han tenido de recrear "El otro lado del puente", el lugar donde están todos los muertos. Creo que nunca se había recreado de una manera tan bonita. En vez de hacerlo de manera triste, oscura, tétrica, lúgubre, sombría, siniestra y macabra lo han hecho totalmente al contrario, alegre, divertida, animada, risueña, optimista, graciosa y festiva. Es una explosión de luces y color que te hipnotiza desde el primer momento. Yo no podía salir de mi asombroso. Es una auténtica preciosidad.

El personaje de Miguel es de los mejores que ha creado la factoría Disney. Un personaje noble, sencillo, cercano y amigable. Está fuera de los típicos que nos pueden ofrecer otras películas. Lo que le hace especial es que podría ser tu hijo, tu sobrino o tu primo pequeño. Un niño normal y

corriente y es muy fácil empatizar con él desde el principio. Hace que te pongas en su lugar y sientas y sufras tanto como lo hace él.

Y un punto a favor, es que aquí en España, hemos podido disfrutar del doblaje original, con acento mexicano. Si lo llegan a doblar con nuestro acento (leí que barajaron la posibilidad) hubiera perdido toda la magia y toda la credibilidad. Y este pequeño detalle, además, me ha hecho volver a mi infancia cuando veía de pequeña los clásicos de Disney (Blancanieves, La Cenicienta, La Bella Durmiente...) que estaban doblados de la misma forma y que a día de hoy sigue siendo así.

La película consigue que te emociones hasta tal punto que acabes despertando tus propios sentimientos y evocando los recuerdos de las personas que ya no están contigo y a los que tanto echas de menos. A mí me ha sacado más de una lágrima al final... Veréis que es imposible no hacerlo.

Si una película consigue ese efecto en el espectador, es porque sin lugar a dudas es una buena historia. Al final lo que importa es eso: que consiga emocionarte. Y Coco lo consigue.

Así que, para terminar, sólo puedo animar a todo el mundo a que vaya a verla. Sea acompañando a niños o no. Sinceramente, la vais a disfrutar muchísimo, os va a emocionar y os va a sorprender.

Recomendadísima 100%

Mi valoración: 9/10

retalesdeacetato.wordpress.com

090.txt

Coco, trabaja de sol a sol, refleja su mal humor contando historias que ni él imagina.

Coco, la nueva película de Pixar, inspirada en la fiesta mexicana del Día de los Muertos. He de reconocer que quizás vaya con más ilusión que mis hijos a ver una película de Pixar, pues para mi cada año que pasa se van superando, y con esta película lo vuelven a demostrar. Quizás la película

que menos me guste de Pixar sean Los Increíbles.

Desde que vi Toy Story he preferido más las películas de Pixar que las de Disney por los personajes que suelen protagonizar las historias, sobretodo porque no hay ninguna princesita... si, ya sé que Mérida es una princesa Pixar (afortunadamente), pero no es una princesa al estilo de Blancanieves o Cenicienta, (ella puede con todo y no hay príncipe que la salve).

Como siempre nos deleitan con un nuevo corto, aunque en este caso (y a nuestro pesar) es de Disney y nuevamente volvemos a tener Frozen en la pantalla, se echan de menos cortos como el de Lava o Inner Workings los cuales nos hicieron disfrutar con sus historias y canciones.

Las películas de Pixar son las únicas que me emocionan de verdad, porque tienen ese toque cómico, aventurero y dramático, con el cual siempre nos hacen escapar alguna lagrimilla, (conmigo pasa).

La animación me parece espectacular, un deleite visual para el espectador y aunque he ido con mis hijos y la sala ha estado llena en su mayoría de niños no he perdido detalle en toda la película.

Pixar, una vez más lo vuelve a conseguir, la historia está bien llevada desde el principio hasta el final, sin decrecer en ningún momento, primero nos presentan a los protagonistas principales y luego el desarrollo de la película con sus toque de comedia, aventura y drama. Y con un colorido espectacular.

El resto de la crítica disponible en www.cineyaccion.com

091.txt

Coco y el respeto por otras culturas.

La primera impresión que tuve al saber de esta película fue: "Más de un 8 en filmaffinity, y además se la han recomendado a mi novia...tendremos que ir a verla". Siempre que me pasa algo parecido la película no cumple con mis expectativas. He de decir que en esta ocasión no ha sido así.

Coco, es un peliculón desde el principio hasta el final. Siendo una película de animación los personajes tienen vida propia y muestran sus sentimientos perfectamente. Pero para mí, mucho más que todo esto y otros aspectos técnico, es el hecho de que Disney ha acertado de pleno con la historia que cuenta en esta ocasión. Era hora de que en el mundo la gente nos demos cuenta de que existen

otras culturas tan respetables como las nuestras y esto se cumple en la película Coco y la noche de muertos. Para los españoles Día de difuntos.

Esperemos que a partir de ahora la gente sepa que Halloween es cultura americana, y que existen la noche de muertos, el día de los Santos y de los difuntos y que estas tradiciones no las debemos perder. En conclusión, interesante película para conocer la cultura Mexicana del día de muertos. Para valorar la familia, nuestros antepasados. Para tener la muerte como algo propio de la vida, y que nuestros familiares difuntos siguen vivos en nuestros recuerdos y mientras nosotros los recordemos, pero para ello deberemos celebrar nuestra cultura (día de muertos, día de difuntos...) y no dejarnos llevar por otras culturas.

092.txt

Otra delicia de Pixar

Hacía años que no salía de un cine llorando. Las lágrimas que llegan llamadas por Pixar o por Disney no son de tristeza. No son del impacto que causa el sentirse identificado con la amargura de la vida. No, estas son las lágrimas escondidas que guardaste por los tiempos pasados, por lo que echas de menos y por lo que aún esperas. Esa es la diferencia. Disney siempre ha hecho soñar a los adultos, despertando al niño interior que todos llevamos dentro en un trabajo catártico maravilloso. Coco no es excepcional en este caso. Tiene unos personajes memorables y bien definidos. Un objetivo claro en el protagonista y una necesidad que, finalmente, acaba haciéndose la necesidad de todo aquel que ve la película. Sin hacer spoilers, diré que Coco tiene uno de los finales más bonitos que he visto en el cine en los últimos años. De esos que son una genialidad obvia...obvia pero que no se le ocurre a tantos guionistas. Para que este final sea tan genial y sea tan maravilloso, se hace muy necesario conocer bien a los personajes de antemano.

Sin embargo, en Coco me ha faltado ese amigo entrañable que era Scuttle en La Sirenita, el Abu de Aladdin o un Olav como el que hay en Frozen. No creo que en esta ocasión hayan acertado demasiado con el xoloitzcuintle, de cuya raza yo no tenía ni idea. Y a propósito de esto, otro gran favor que nos ha hecho Pixar con Coco es el tiempo de investigación que se ha dedicado a conocer las costumbres mexicanas para luego trasladarlas al guión. Por fin alguien nos ha hecho entender la

relación especial que la vida y la muerte tienen allí. Sorprendente para una sociedad como la española con tanto miedo a morir. Y de eso se trata el cine, de conocer otros mundos, otras realidades, otras vidas. Y la música...tras ver la película intenta escuchar la BSO hasta el final e intenta no llevartelo a lo personal. Si lo consigues, cuéntamelo.

093.txt

Debajo de la piel

Crítica de UN LUGAR DE CINE

"COCO" no solo es una buena película, es necesaria, sobre todo en estos tiempos que vivimos. Una película que sirve para recordar, para glorificar ese elemento tan nuestro y a veces tan olvidado como es la memoria y una película que demuestra que PIXAR, afortunadamente sigue conservando el elemento más importante de cuantos ha de tener una película: Alma.

Un ejemplo más de que a PIXAR, con mayor o menor acierto, jamás se le olvida dotar a sus películas de ese valioso elemento. Sobre todo en aquellas que pertenecen al cajón de las: No Comedias. Entiéndase bien con ello, COCO tiene comedia, desde luego, pero como "Wall.E", "UP", "Del Revés" o "Ratatouille", es un ingrediente más de una elaboración mucho más grande, que se amasa a fuego lento, que entra en nosotros despacito,- como la canción -, y que le gusta jugar con la emoción, mucho más que con la risa.

Por decirlo de otra forma, "COCO" no es una sucesión de gags, como lo puede ser los "Minions", por poner un ejemplo, sino de pasajes que unos a otros, de forma acompasada, van llevando a la película justo a ese sitio escondido y recóndito, donde muchas películas no saben llegar, que hace que todo el viaje recorrido merezca mucho la pena.

Lee Unkrich, director de "Buscando a Nemo", "Toy Story 2", "Toy Story 3" y "Monstruos S.A",- casi nada -, vuelve a moldear otra joya más para la colección de PIXAR, otra que le hará ganar de

forma incontestable su nuevo Oscar a la Mejor Película de Animación, sí, pero otra que demuestra que una película es mucho más que eso.

En el caso que nos ocupa es un canto a México, un homenaje a su venerada celebración del Día de los Muertos, un elogio a sus formas, costumbres y tradiciones, una película que sabe y huele a ese mundo. Y es que el Día de los Muertos no es solo el contexto sobre el cual se sirve para acostar sobre ella una hermosa historia sobre la familia, sino que Unkrich lo venera, lo elogia y le hace el mejor y más sentido homenaje a todo lo que significa.

Una película que debajo de sus capas de enorme talento y trabajo, esconde cartas de gran sencillez, pero olvidadas. Valores que todos llevamos dentro de nosotros, y a los cuales PIXAR vuelve a acudir como símbolos universales que nos pertenecen a todos.

Por eso da igual los mundos que diseñe, da igual si es un basurero futurista, un restaurante francés, una casa aérea o una fiesta mexicana, todas ellas clavan sus uñas con firmeza en ideas que a todos nos acompañan. Y en esta nueva incursión, Lee Unkrich está empeñado en acercar una idea muy clara a nuestros sentidos: Lo primero es la familia. Es lo que da sentido a todo lo demás, lo que nos da respuesta, lo que responde a nuestro pasado y lo que da forma al futuro. Porque COCO no es solamente lo que fuimos, sino lo que seremos.

Esa idea, tan sencilla y pequeña, que cabe en cualquier bolsillo y con la cual logra descifrar todo aquello que hay en nosotros, así como la forma en la que la impulsa a lo largo de toda la película, es mucho más importante que cualquier reseña que se pueda hacer al diseño de producción, o a cualquiera de los valores técnicos que, como siempre tratándose de PIXAR, están a un gran nivel.

Pero esa idea... esa idea vale mucho más. Le vale a Miguel, el protagonista, embarcarse en una aventura mágica que le cambiará toda su vida, a nosotros los espectadores volver a recordar aquello que somos y fuimos, y a PIXAR volver a recoger los premios más importantes de su gremio, porque una vez más a vuelto a poner sobre la mesa algo de lo que desgraciadamente muchas otras propuestas carecen: Alma.

www.unlugardecine.com

094.txt

La muerte

Curioso como dos películas tan distintas, tanto en tono como público a las que van dirigidas, como son Coco y A ghost story, coincidan tanto en la visión de la muerte como del olvido, y como este es lo que provoca la verdadera muerte. También a su manera, las dos coinciden en la fuerte carga emotiva, y, por supuesto, coinciden también en ser dos de las mejores películas del año.

Naturalmente, el tono de Coco es mucho más ligero y menos denso que la otra ya que la intención es llegar a todos los públicos, pero las emociones que despiertan, sobretudo en el público adulto (y eso lo viví en la función que la vi, donde el que más, el que menos, nos limpiábamos las lágrimas al acabar) son de las que no se olvidan.

La película es tan, tan tan triste que escribo esto y me emociono. Y si por encima tengo la banda sonora de fondo ni te cuento.

Bellísima.

095.txt

Una película de culto al folclore, a la prole y a la memoria de los muertos siempre vivos

Coco: Una película de culto al folclore, a la prole y a la memoria de los muertos siempre vivos. Desnuda ciertos valores genuinos arraigados en las fiestas de muchos pueblos (de México) que no han cedido espacio a los modismos y alienaciones occidentales como la veneración, la tradición familiar y la música . Escenas con tierna dosis para admirar los grandes -y verdaderos- secretos de nuestros ancestros y su trascendencia más allá de esta vida. El desenlace tarda un poco pero vale la pena esperar.

096.txt

Pixar lo ha vuelto a hacer

Del director Lee Unkrich (Toy Story 3) llega esta fantástica película de animación ambientada en un contexto de tradiciones y costumbres mexicanas, con las que como latinos (aunque soy ecuatoriano) llegamos a identificarnos. Como premisa principal tenemos la celebración del Día de los Muertos y la historia de un jovencito que busca seguir su camino y vocación (ser un músico) al contrario de aquello que sus familiares esperan de él (ser un zapatero), llevándolo a una travesía en el mundo de los muertos para encontrar a su tatarabuelo (el único músico de su familia).

Pixar ha explorado en estas dos décadas territorios fantásticos entre ellos: la mente humana, el de los juguetes, el de los monstruos, el de superhéroes, hasta el mundo submarino. Pero un territorio nada explorado como lo es América Latina tiene enorme potencial para ser la película animada para todo público y disfrutable para aquellos que, como yo, crecieron con grandes joyas latinoamericanas del cine (el Santo el enmascarado de plata, mi favorito) o al arte (Frida Kahlo por ejemplo).

Precisamente, Unkrich y el codirector Adrián Molina rinden tributo a Latinoamérica en esta película casi perfecta. Las canciones son igual de disfrutables y presenta un claro mensaje para toda la familia. Estimado(s) lector(es), regresen a mirar cuando eran niños y siéntanse como el infante que llevamos adentro.

Coco es una película destacable, pero salvo que puede llegar a volverse predecible en su tercer acto, es aún así entretenida y con una grande animación. Creo que ya sabemos cual ganará el Academy Award.

Mi nota: 9/10 (véala en pantalla grande claro).

PD: Escribo esta reseña el primero de Enero de 2018 y quiero desearle un feliz año nuevo a usted(es) estimado(s) usuario(s) de FilmAffinity. Saludos

097.txt

El alma mejicana

Me gustó mucho, por ser tan creativa y tan emotiva, metiéndose en el alma mejicana, a través del espíritu de los muertos,

Magnífico homenaje a la cultura mejicana.

Me hubiese gustado que estuviese que en vez del inglés, fuese el idioma español el protagonista, tal y como corresponde a esta historia, pero don dinero manda.

098.txt

Nunca dejes de perseguir tus sueños

Simplemente hermosa. Apunta a luchar por nuestros sueños, a valorar a la familia y sobre todo a los adultos mayores, tan menospreciados en estos tiempos. Emotiva, divertida y para todo público, no es solo para chicos. Ideal para verla con nuestros seres queridos. Recomendadísima.

099.txt

Colorida y original

Destaca por su originalidad entre otras muchas de Pixar, es adecuada tanto para adultos como para niños, pero creo que los adultos la entenderán mejor. Visualmente preciosa, con muchos escenarios coloridos y cuidados hasta el más mínimo detalle. Una interesante visión sobre el mundo de los muertos y la importancia de la familia. Iba con altas expectativas y aún así me ha sorprendido gratamente.

100.txt

Háblale tú de la muerte a los niños, y si dices 2 palabras seguidas sin tartamudear, entonces la críticas.

Bueno, la estética de la película no es lo mío, la verdad, va a gustos, y nunca he conectado con ese folklore artístico mejicano con los difuntos, por desconocimiento, aunque amo las rancheras, algunas,

ya que por familia, a mí padre le gustaban (como muchísimos otros géneros musicales) y desde pequeño escuche algunas.

Es una película que funciona en dos niveles de forma diferente.

En el primer nivel, es una película normalita para los niños, que cuenta una historia simple, con gracias las justas la verdad, y algo quizás descafeinada que tampoco parecía entusiasmarles del todo, ya que es difícil conectar también con un protagonista del que de entrada ya sabes que hace algo excelentemente bien. Pero aún sí, resulta una película hermosa para ellos.

El segundo nivel, a nivel adulto, la cosa cambia tremendamente.... yo escuchaba al señor de detrás mío haciendo pasar las aspiraciones llorosas por resfriado, mientras yo me esforzaba por que las mías no entraran en el terreno de lo audible, y sinceramente, asustado porque sabía que la siguiente escena iba a ser peor.

Emociona, sí, vaya si lo consigue.

La historia, es preciosa, y de una profundidad asombrosa para una película de este tipo. Te descubres pensando en ella al salir del cine, te acompaña a la salida, en el coche conduciendo hasta tu casa, y luego en ella escribiendo una crítica sin podértela quitar de la cabeza.

Si eres un adulto sensible, apasionado de la música, pocas cosas hay hoy en día más bonitas que esta película. Ya ni me imagino si tienes una guitarra en casa y encima la sabes tocar.

Iba sobre aviso, pero la historia está tan bien hilada que la emoción termina surgiendo tarde o temprano, y la película, a pesar de la estética, que ya decía que a mí me sacaba un poco fuera de la peli, te engancha y no te suelta.

Para recomendaciones personales e impresiones más sinceras, en spoiler por si acaso.

101.txt

COCO: EL REGALO QUE PIXAR LE DIO A MÉXICO

La grandeza que Pixar tiene, es que sabe tocarnos el corazón. Si bien no le va bien en las segundas y terceras partes de sus producciones, con sus historias originales logra envolvernos en una magia que permite recordar a nuestro niño interior y con “Coco”, lo ha vuelto a hacer.

Después de darnos dos historias que parecían no prometer mucho desde "Intesamente" con "Un gran Dinosaurio" y "Buscando a Dory", “Coco” llega para maximizar la grandeza de las culturas latinas, siendo México la cuna de esta entrega.

Con sus calles adoquinadas y de polvo, los negocios a cada vuelta de la esquina, el papel de china decorando las festividades y las extensas tradiciones familiares, son el plato fuerte que Pixar toma para reencontrarnos fácilmente con una historia que atrapa desde su misma introducción al son de mariachis -que erizan la piel- al momento de presentarnos el logo animado del coloso del entretenimiento: Disney.

La historia nos presenta a un niño que adora y ama la música, Miguel Rivera, a quien su familia le tiene prohibida la música, pues temen que suceda lo mismo que a su tatarabuelo quien se fue del hogar a cumplir su sueño de ser músico y cantar para el mundo. Ante esta premisa, Miguel debe encontrar la forma de hacer realidad su sueño o ganarse el amor de su familia con base a la obediencia de la única regla de la casa: "sin música".

La historia permite identificarnos fácilmente con Miguel ante esta prohibición, al mostrarnos su amor, ese brillo en sus ojos y esa sensación única de que ama lo que hace, así mismo el viaje de auto descubrimiento que tiene al desobedecer las reglas que su familia le impone y llegar a conocer el verdadero motivo que encierra la historia de su familia a través de la celebración del día de los muertos, en la que compartiendo con sus antepasados en la tierra de los muertos descubre sus orígenes.

Si bien la historia presentada es un exquisito plato audiovisual, la caracterización de ciertos personajes y momentos dentro del film son una amalgama de sensaciones que nos atraparón en otras

producciones, tal como lo fue la ratita Remi en “Ratatuille” al presentarnos a un amante de la cocina que lucha por cumplir su sueño; ese brillo, ese amor, es exactamente el mismo que tiene Miguel; ambos personajes tienen este factor de viaje, de separación de su familia, de retarse a si mismos en un lugar extraño y sobre todo por cumplir su sueño; aunque ello signifique retar a su propia naturaleza y familias.

Del mismo modo, ciertos encuentros muy sentimentales concuerdan a su vez con la producción de Toy Story 2, en donde vemos a la vaquerita Jessie contar su historia en una partitura que asemeja mucho a la que el personaje de Héctor tiene, al momento en que le canta “Recuerdame” a su hija Coco.

Un elemento rico del film es sin duda su música, posee una banda sonora original que estampa muy bien la cultura mexicana, con sus mariachis, su nostalgia, sus letras, que parecen canciones que siempre han existido desde las épocas doradas de México, en donde conquistar con serenatas y expresar los sentimientos eran algo que atrapaba a sentir y a vivir la música de forma diferente.

Ello no hubiese sido posible sin la interpretación de los actores de doblaje, como lo fueron Marco Antonio Solís tras los huesos de De la Cruz; Angélica Vale en los de Mamá Imelda; Gael García Bernal en los de Héctor y Luis Ángel Gómez en los de Miguel. Lo que nos lleva a la pregunta: ¿Cómo suena el cast original en inglés?, sin duda, la versión de doblaje mexicano en esta producción fue el toque que le dio la esencia al film, hecho inclusive que, hasta la versión española supo respetar al no contar con doblaje a su natal acento.

La representación que tiene De la Cruz, es un reflejo ingenioso de Pedro Infante y Jorge Negrete, pese a que, en el mismo film, ambos son retratados como personajes que comparten con De la Cruz en la tierra de los muertos, al igual que El Santo, María Félix y que decir de la excéntrica Frida Kahlo y el comediante Mario Moreno Cantinflas. Del mismo modo, la referencia que hacen a que es uno de los mejores cantantes es muy simbólica, ya que no encasillan a legitimar a un país en específico, de hecho la referencia que se hace que se desarrolla en México sucede solamente una vez en el film.

Los valores que rescata “Coco” son su broche de oro, el respeto por los mayores, esa calidez que sólo da la familia, el respeto a la tradiciones y costumbres familiares, a la cultura y a las profesiones la vuelven rica como un referente, no sólo de México, sino de toda latinoamerica.

Además, “Coco” suscita un sin fin de emociones que nos obliga a querer descubrir, no sólo más de Miguel y su familia, sino que también de nuestras propias familias, cuál es nuestro origen familiar, qué secretos encierran nuestras familias, así como también dar un vínculo sentimental con los seres que ya han partido de este mundo, lo cual logra a la perfección, al hacernos llorar en muchos momentos, pues quién no llora con esta película, se puede considerar un frío de corazón.

“Coco” sin duda arrasará como la favorita de la academia para la mejor película animada, no obstante, es posible que este nominada a: mejor banda sonora, mejor guión original, mejor película del año y mejor canción original por “Recuérdame”. Sólo los meses sabrán que premios le darán, pero mientras tanto, Pixar puede estar seguro de que lo ha logrado.

102.txt

Lo mejor de Pixar en los últimos años

Soy muy amante de la animación, y sin duda, Pixar es de los estudios que más destacan en ello. Por ello me atrevo a decir que Coco, junto con Zootrópolis, es de lo mejor que ha hecho Pixar en los últimos años. Una animación deliciosa, perfeccionista, colorida acompañada una trama y banda sonora que enamoran. Así, Coco es una película que sigue la tónica de Pixar (a diferencia de Disney): abarca un público de un amplio rango de edad gracias una trama y un transfono lo suficientemente complejo como para que guste tanto a niños como a adultos.

103.txt

Muy bonita

Visualmente es una película muy bonita por los dibujos y el colorido. La historia está muy bien, aunque a ratos se hace un poco aburrida. El final es precioso y la música también.

104.txt

COCO. Top 5 Pixar

Pixar se ha vuelto a superar. Gran historia que engancha tanto a pequeños como a mayores. Explica perfectamente el significado del día de muertos en la cultura Mexicana.

La banda sonora y su colorido te van atrapando en la historia, que hace que el final llegue sin darte cuenta y que te empuja a emocionarte.

Historia sin héroes ni heroínas, simplemente nos recuerda que no somos otra cosa que lo que dejamos.

105.txt

No es fácil hacerte llorar

Me encanta la cultura mexicana enfocada al día de los muertos: un día de festejo para honrar a nuestros antepasados; una tradición que deberíamos adoptar en España, sustituyendo nuestras caras tristes, lúgubres y alicaídas por el jolgorio familiar. Yo soy de los que piensan (ingenuamente o no) que nuestros difuntos nos acompañan, y estoy convencido de que prefieren vernos celebrando su recuerdo con alegría y no acudiendo a los cementerios a dejar un ramo de rosas para cumplir. Yo por lo menos lo querría así, que estuviésemos más próximos a lo que refleja Coco en sus primeros compases de vida.

Coco proviene de la mano de Pixar y Disney, patentes de los sellos de calidad y confianza a base de hacer grandes películas; así que las críticas tan solo ensalzarán las virtudes de dos estudios que saben hacer muy bien las cosas, pero es que la ocasión lo merece.

Estamos ante una propuesta encaminada a reforzar el amor y la unidad familiar, con un mensaje muy claro: la familia es lo primero. Además, nuestro protagonista tiene un conflicto interno: su familia espera que ejerza el oficio de zapatero, pero su sueño discierne radicalmente de lo que tienen

preparado para él. Quizá os parezcan tramas quemadas, pero os aseguro que están bien construidas, que aguardan sorpresas y que cuenta una historia preciosa. Apta y disfrutable para todos los públicos, pero creo que los adultos sabrán saborearla mejor como un producto de primera clase.

La animación y la recreación del mundo que nos presentan es de sobresaliente: colorido, bello, ambicioso, original... Tenemos buenos personajes que nos acompañan, con una banda sonora que rápidamente te transporta a la tierra de México y con unas canciones en sintonía de este mundo. Simplemente maravilloso.

Me han emocionado muchas películas, pero pocas han conseguido hacerme llorar; recuerdo que lo hice con el final del retorno del rey o de Interstellar, así que debo dar mi más sincera enhorabuena a Coco por sumarse a la lista. Hay un momento en el que creo que va a ser inevitable que el público lllore, poniendo a prueba a los más fuertes. La carga emocional de Coco se eleva al sentimiento más visceral y sabe mantenerse con fuerza en el recuerdo del espectador.

106.txt

Por la puerta grande

Pixar vuelve, una vez más, a deleitarnos con una historia tierna y positiva que te envuelve desde el principio, con un nivel de detalle impresionante, un colorido espectacular y un trato del folclore mexicano con un cariño y un respeto muy especial. Aderezada con la música y las puestas en escena, el resultado es esta maravilla de la animación.

107.txt

La familia es todo

Sigo creciendo (como todos) y sigo fascinándome descubriendo perlas como esta. Como diría Héctor Salamanca (Breaking Bad) en un alarde de enseñanza: "la familia es todo". Y es que Pixar y Disney lo han vuelto a hacer. "Coco" es una maravilla. La cinta trata un tema muy complicado, como lo es la pérdida de los seres queridos, y lo hace con soltura, gracia y respeto. Los animadores realizan un

trabajo espectacular, consiguiendo una ambientación preciosa. El guión, sin arriesgar demasiado, consigue una historia fresca, y con algún giro que sorprenderá a más de uno. La música está al nivel que nos tiene acostumbrado Disney. El único problema que le he encontrado es el ritmo, haciéndose algo lenta por momentos, pero esto último se le perdona completamente viendo el resultado final. La dupla Disney-Pixar consigue mandar otro importante mensaje (ver título de la crítica) tanto a pequeños como a mayores, y es que al final, aunque estés de gira por el mundo cumpliendo tus sueños o en un pequeño taller haciendo zapatos, tu familia siempre estará contigo. Por todas estas razones es muy probable que gane el Oscar, y aunque lo gane por motivos políticos (para darle una bofetada a Trump), me quedará el consuelo de que realmente merecía ganarlo.

108.txt

Nuestros muertos son importantes

Maravillosa. Es la primera palabra que se me viene a la mente al pensar en ella. Empieza un poquito meh, mientras te vas barruntando hacia donde van los tiros y vas viendo como aciertas en tus suposiciones... hasta que la película pega un vuelvo y te deja KO. Desde entonces, en un ir y venir de emociones y sentimientos, acompañados por el variopinto colorido que choca espectacularmente con la diatriba personal de la búsqueda del chaval. Ambos extremos se fusionan a la perfección hasta que llegamos al giro que sospechábamos pero que aún así te hace sentir vivo y con ganas de irte corriendo a darle un gran abrazo a tus padres/madres/abuelas/abuelos así como de rezarle, en la religión que cada uno tenga a bien tener elegida en su vida, a todos aquellos familiares que hemos perdido. Es imposible no sentir con esta película y esto hacía mucho que no me pasaba con una película de Pixar. Chapó.

109.txt

Consigue conmover. Y de qué manera.

Así es la historia de Miguel, de Coco, nuestra propia historia, nuestros propios recuerdos. Así consigue Pixar unificar en una cinta de animación los recuerdos, el entretenimiento, la música, el colorido y la muerte. Sí, la muerte como un canto al no olvido, como la celebración del recuerdo,

como la tradición más optimista de cara a los que ya no están. La historia de la familia Rivera, una familia de tradición zapatera y música, se enarbola en ese Día de Muertos tan mexicano y ahora tan universal. Coco es otro eslabón en esa cadena familiar, como lo es la abuela, o lo es el propio Miguel, o la misma guitarra que es emblema y santo y seña en un panteón que, años después, esconde aún algún que otro secreto.

El primer tramo de la película se me presentó como algo ya visto, y hasta cuestioné la alta nota que tiene esta historia. Los dos tercios restantes son un puñetazo directo al estómago, una inmersión en la familia propia. Y es ahí precisamente donde creo que tiene más mérito esta obra: en hacer al espectador partícipe de algo que, en principio, le es ajeno. El final desborda optimismo a la vez que conmueve y remueve hasta la última fibra del interior de cada uno, con una apoteosis final que actúa como sùmmum del recuerdo, como un homenaje a la memoria y, ¿por qué no?, a la vejez; y de paso, un homenaje a ese nexo común que, en este caso, es la música.

Y es que Pixar lo ha vuelto a conseguir. Recomendable por lo infantil y adulta que es al mismo tiempo. Imprescindible por todo lo demás.

110.txt

Probablemente mucha gente no la tomará en serio por ser de animación

Y sin embargo, esta película me ha parecido redonda de principio a fin, tanto por la trama, como por los sentimientos que despierta, como por lo bien ambientada que está, una obra maestra.

Me ha gustado especialmente como explican al público infantil la muerte de un ser querido, el que hay después, y la justificación de algunas tradiciones mexicanas. Ante todo, estos recursos son terriblemente divertidos y originales, y tiene mucho mérito tratándose de algo tan negativo. Lo triste es que esta película quedará en el imaginario como "una de las mejores películas de animación de la historia", y en mi opinión, la animación es un recurso para hacer una película, es injusto no catalogarla con otras películas con actores reales.

111.txt

Llorera mortal

Vaya tela! Elegí con mi novia la sesión de mañana porque había oído que la película era de llorar y todo eso, así si no éramos muchos en la sala no me tocaría nadie al lado y podría dar rienda suelta a toda mi sensibilidad cojones ya!!

El caso es que seríamos unos 12 o 14 como mucho en el cine, pero el taquillero maligno nos puso a todos pegados en dos o tres filas como mucho, así que no dió mucho lugar a la intimidad.

¿Y por qué digo todas esas cosas? Dios, porque menuda película, ya puedes ser el tío más bestia de Brazatortas del Melonar que si no lloras con esto es que eres una jodida roca!! En serio, mi novia al lado llorando con hipo y yo haciéndome el machote para que no me viera el niño que tenía al otro lado, me puse apoyado sobre la butaca con una postura que pretendía escenificar desdén pero que realmente era la única que me permitía apoyar mis dedos sobre uno de los ojos que no paraba de llorar, el otro que estaba en el lado que mi novia podía ver no tenía salvación.

La película es preciosa, los personajes son todos muy entrañables, la música es genial, y la ambientación es sencillamente mágica. Eso sí, pienso que chavales de menos de 8 años a lo mejor se te aburren, a ver que esto no es el truíño de Cars ¿vale? Es una película de llorar y disfrutar llorando, de esas que te mete totalmente en el ambiente y consigue hacerte evadir perfectamente, perfecta magia Disney-Píxar, y sobre todo originalidad por todos lados. No sé cómo consiguen parir estas ideas, quizás no quiera saberlo, pero la realidad es que el trabajo que hacen es fantástico. En serio, esta es la realidad del último peliculón de estos cracks, así que nada si no la has visto, ya estás tardando y si no te he dado ganas de verla con lo que te he dicho es que eres un imbécil sin sentimientos.

112.txt

Recuérdame y viviré para siempre.

Una película que te enseña a respetar la pasión por la música y el recuerdo y respeto que debes sentir por los tuyos. Nadie podrá evitar que esta película le remueva sus pensamientos y sentimientos, ni niños, padres o abuelos.

La animación es absolutamente increíble, podemos apreciar hasta el más mínimo detalle en cualquiera de sus personajes, desde todos los rasgos de los personajes más ancianos hasta la brillante sonrisa de nuestro protagonista.

¿Y que decir sobre su música? Cada segundo que escuchamos una de sus melodías, nos saca una sonrisa, nos pone el vello de punta y nos emociona.

Es una de esas películas que siempre mantendremos en el recuerdo y nunca olvidaremos. Un magnífico recuerdo hacia nuestras raíces y a la vida.

PD: ¿Quién olvidará ese precioso puente de pétalos?

113.txt

Excelente

Hola soy Inés tengo 10 años, cuando vi la película me fascinó, ocurrían cosas muy extrañas, los niños aprenden cosas, salen personajes famosos en la vida real y aprenden que si les gusta algo mucho y alguien dice que eso no lo deberían de hacer, como le pasa a Coco con la música, tienen que seguir haciéndolo y eso es lo que importa.

114.txt

El mundo de los muertos nunca había tenido tanta vida

Las grandes obras de Pixar siempre hacen importantes reivindicaciones.

“Toy Story” nos hablaba de mantener la ilusión que tenemos de niños durante toda nuestra vida, representada en los juguetes.

“Bichos” nos enseñaba que los que somos débiles individualmente podemos unirnos y tener más poder que aquellos que pretenden dominarnos por la fuerza.

“Monstruos S.A.” nos revelaba que la alegría y la risa tienen más poder que el miedo.

“Buscando a Nemo” nos decía que es muy importante fortalecer la relación entre padres e hijos.

“Cars” nos mostraba que es necesario mantener la actividad en esos pueblos que han quedado abandonados junto a carreteras secundarias por la gran cantidad de autopistas y autovías que han aparecido por todas partes.

“Ratatouille” nos contaba que todos tenemos un talento oculto y que el más inesperado puede mostrar habilidad en facetas que ni imaginamos.

Pues bien, “Coco” nos muestra la importancia de la música, capaz de salvar vidas, y también que, aunque una persona fallezca, mientras permanezca en el recuerdo de aquellos que le conocieron y le amaron, en cierta forma seguirá vivo.

Y este mensaje nos lo traslada a través de su película más colorista, con permiso de “Cars”, que refleja la tradición del Día de los Muertos, el Halloween mexicano, con una fuerza nunca antes vista en una pantalla, en un film repleto de alegría, canciones y humor, y por supuesto, no falta su dosis de lagrimitas y esos momentos en que los niños preguntan a sus padres ¿y por qué pasa esto? ¿y por qué pasa aquello otro? Señal de que están empezando a interesarse por el complicado mundo de los adultos, que no es sino la realidad que se encontrarán cuando superen su infancia de juegos y colegios y se enfrenten a la vida diaria.

Un niño llamado Miguel busca la forma de vivir su pasión, que es la música, contra la opinión de toda su familia, que odia la música. Tras una serie de peripecias viajará de forma mágica al mundo de los muertos, donde descubrirá varias verdades de su pasado y tratará de corregir varios errores y equivocaciones de sus ancestros y familiares. En medio, elementos clásicos de la factoría, como personajes de cierta apariencia que ocultan algo oscuro, otros aparentemente anónimos que se revelan como más importantes de lo que parecía en principio, secundarios que te hacen reír, y no siempre son humanos (de hecho, casi nunca lo son) y todas esas cosas que, aunque no hagan a “Coco” una obra maestra como otras de Pixar, la deja muy, muy cerca de esa calificación.

Y os preguntaréis: “Si el niño se llama Miguel ¿qué o quién narices es Coco?” pues Coco es un personaje que no parece muy relevante para la historia y resulta ser la clave de todo. Pero para descubrirlo, tendréis que ver la película. Y también tenéis que verla para disfrutar de todo su despliegue de alegría, vida y color. ¡Y que viva México!

LO MEJOR: Prácticamente todo, como casi siempre pasa con Pixar, la historia, los personajes, las situaciones, y sobre todo la ambientación, iluminación y color.

LO PEOR: Que hasta que no pasan 20 minutos la cosa no se pone interesante, y crees que va a ser todo el tiempo igual de monótona, pero no. A partir de ahí, la cosa mejora mucho.

115.txt

Un joven guitarrista en una familia que detesta la música descubre que es descendiente de una leyenda de la canción

Coco me hizo llorar, que es más de lo que ninguna película ha conseguido. Up es Rambo 3 en comparación. La animación es deslumbrante, en especial en la tierra de los muertos, con tantas luces y colores. Pixar se vuelve a superar en lo que a jugar con las emociones del espectador se refiere.

116.txt

Contundente...

No me sorprende que Coco tenga detractores. Siempre va a haber personas que por llamar la atención o generar controversias absurdas inventa defectos donde no hay. Hasta críticos dizque profesionales cometen ese error. Coco es magnífica en muchos aspectos. Sabe divertir, dar mensaje y emocionar y bastante. Lo mejor en animación que he visto en muchísimo tiempo.

117.txt

Recuerdame

Coco trata de Miguel, un niño que quiere ser músico, pero a su familia no le gusta la música, debido a un acontecimiento del pasado, Miguel, el día de muertos, debido a un accidente con una guitarra, será transportado al mundo de los muertos, y deberá encontrar a su tatarabuelo, para conseguir escapar.

No soy crítico, así que si veis que la crítica está muy corta es por eso.

Antes que nada, esta película me ha encantado, le pongo un 9.8, es una película para toda la familia, que todo el mundo disfrutará, aunque ahí una pequeña proporción de personas que no entiendo porque no les gustó este películón.

Tiene una banda sonora estupenda, y gran combinación de colores.

118.txt

Un homenaje a nuestros ancestros

Tengo que reconocer que aunque me encanta el cine de Pixar, en este caso cuando vi el tráiler de esta película no me llamó mucho la atención. Pero es tanta la gente que me ha hablado tan bien de ella, que no he podido evitar ponerme frente al televisor y descubrir su historia.

Ahora que la he visto tengo que reconocer que es un film tremendamente emotivo, y que bebe directamente de todas esas tradiciones y esencias mexicanas. La famosa "noche de los muertos" es el hilo conductor para presentar una trama que es un increíble homenaje hacia nuestros ancestros.

El film mezcla perfectamente momentos cómicos con otros de una increíble ternura que inevitablemente ponen la carne de gallina y emocionan. Una fusión de géneros que encaja a la perfección ya que la trama está perfectamente desarrollada y narrada toda con sumo tacto y cuidado.

El personaje protagonista que nos lleva de la mano en esta apasionante experiencia, es un niño que renuncia de su pasado porque solo piensa en su futuro. Pero es verdad que nuestro presente está ligado inevitablemente a esas generaciones que ya no se encuentran entre nosotros, y que han sido consecuencia directa de que nuestro día a día sea lo que somos. Y nosotros tenemos en nuestra mano el botón que influirá en las posteriores. Unas nuevas generaciones que vendrán y que su vida dependerá de lo que hagamos.

Esta preciosa historia está narrada de una forma que nos presenta dos mundos paralelos que conviven conjuntamente mientras uno no se olvide de las personas que fueron quedando en el camino.

Produce un cierto recuerdo a la fantástica "La novia cadáver" de Tim Burton; pero posicionándose en un lugar totalmente opuesto en lo que se refiere a la estética. Porque aunque es cierto que ambas extraen el mundo de los muertos mezclándolo con el de los vivos; en el film de Tim Burton todo toma un aire mucho más gótico como caracteriza a toda su filmografía. Pero aquí en cambio los colores son vivos e inundan cada escena. Un colorido que también bebe irremediablemente de las tradiciones mexicanas, y que se presenta todo como si fuera una auténtica fiesta; porque al fin y al cabo esa noche se vive de ese modo.

Ganadora del Oscar a la Mejor Película de Animación y a la Mejor Canción; este film cuenta con una banda sonora preciosa con ritmos muy del país que representa. Su canción "Recuérdame" es un canto al amor pero desde un enfoque distinto. Es un canto a un amor que existirá siempre que uno piense en la otra persona; aunque ya no la vuelva a ver más. Porque en el recuerdo siempre estará viva y nunca morirá.

En fin, "Coco" es sin lugar a dudas una película preciosa con la que nuevamente Pixar demuestra el enorme talento que tiene para realizar cine de animación. Un film que presenta una historia que disfrutarán tanto niños como adultos debido a que su historia tiene una visión distinta para ambos públicos.

119.txt

COMO DE COSTUMBRE.

Alma en el color. Acordes cromáticos de perfección. Una avalancha sensorial que nos atrapa, y eso nos encanta.

Coco es una película sorprendente, un vez más, atrevida, original, ingeniosa, majestuosa...

Cine turbador y que te activa, lucha por tus sueños, y haz cosas para que te recuerden.

La muerte humana en el cine de animación Pixar, un eslabón más, un paso mas allá.

Y encima respetando el doblaje latino, otro acierto más

120.txt

Coco

Estuve esperando esta película por mucho tiempo y tengo que decir que estoy maravillado. “Coco” tiene una historia hermosa, un niño que quiere ser músico y se ve enfrentado a su propia familia.

El guion es bueno al igual que la animación. Disney logra enmarcar de buena manera la trama en la cultura y tradiciones mexicanas del día de los muertos, se resalta lo importante que es para ellos acompañar las almas de sus seres queridos y celebrar un día en familia con los que están y con los que ya se fueron.

La recomiendo como una de las mejores películas del 2017.

121.txt

Coco loco

Otra excelente obra maestra de los estudios Pixar que presenta una historia emocionante y entretenida incluyendo el juicioso mensaje final sobre la importancia de la familia y el recuerdo de los seres más queridos. También trata temas interesantes para los adultos como la búsqueda de la

fama y el éxito a cualquier precio que junto al colorido y las hermosas canciones mejicanas de la banda sonora hacen de Coco una experiencia muy bonita e inolvidable. Muy buena.

122.txt

Miuy buena;

Buenas, antes que nada decir que no suelo ya desde hace bastante tiempo ver las denominadas películas de animación virtual. Dio la casualidad que la familia me convenció para verla y para mi sorpresas quedé gratamente sorprendido, aunque supuestamente dicen que es para un público de corta edad, para nada lo considero así... en fin una peli reflexiva, llena de magia, sentimiento y buena historia... si se le puede poner un pero es que es demasiado musical para los que no nos gusta el genero. Desde luego la recomiendo ;)

123.txt

Gran tierra de los muertos.

Pocas son las películas que he visto donde gire la trama principal sobre la tradición de un país y que sea llevado en un cúmulo de imágenes en gran parte del metraje. Pues bien, Coco puede presumir de ello y con creces, ya que se palpa en cada escena todo lo que una gran mayoría de familias mexicanas acostumbran a hacer en Día de muertos.

Por generaciones se ha transmitido todo lo que en esencia se habla en la cinta, ya que varía mucho en celebraciones e ideas en cada zona de México.

Hablando del film, pongo más pros que contras, sobre todo porque se nota que sí invirtieron mucho tiempo y esfuerzo para conocer a fondo todo sobre dichas festividades realizando un guión bastante sobrio, a ratos cansado, pero de enorme emotividad y respeto.

El escenario del pueblo con todo y sus personajes ya no es tan común encontrar en el país debido a la modernidad, pero de que existen eso es innegable, y es aquí de donde se agarraron los creadores para inspirar toda la película llevándolo hasta cierto punto hasta el extremo como son las clásicas ofrendas y la música. Donde dicho sea de paso al principio las letras de las canciones se me hicieron demasiadas simples y sin corazón, pero a medida que avanza el film toman una espectacular fuerza.

La técnica de la animación es sublime conjugando lo colorido de las fiestas y alebrijes con la fantasía de una tierra más allá de la vida.

Aunque no sean memorables los principales personajes, sí se le acompañan sin chistar en su recorrido, donde se pueden encontrar muchas celebridades del cine y el arte mexicano.

En fin, medianamente espectacular en su ritmo pero de brillante factura en contenido, hace muy recomendable éste título en la filmografía de Disney-Pixar, que fiel a su costumbre basándose en los sentimientos(ya sea de los juguetes, de los coches, de los mismos sentimientos, en este caso de los muertos) espero sea del gusto no sólo de los mexicanos, sino del resto del mundo.

124.txt

Vivir en la memoria.

La muy esperada nueva película de Disney-Pixar se centra en la milenaria tradición mexicana del día de muertos, logrando una bella película llena de sensibilidad y visualmente asombrosa.

La historia se centra en Miguel, un niño que ha nacido en una familia con una arraigada tradición zapatera desde hace varias generaciones, pero lo que a Miguel le gusta es la música y quiere ser cantante, como su gran ídolo Ernesto De la Cruz.

Pero en su familia hay una reacia oposición a todo lo que tenga que ver con la música y desestiman las aspiraciones del pequeño, aun así, Miguel decide participar en un concurso de talentos y para conseguir una nueva guitarra logra introducirse al mausoleo de su ídolo De la Cruz para robar su mítica guitarra, lo que provoca que caiga a la tierra de los muertos, donde para intentar volver con su familia deberá descubrir un secreto relacionado con Coco, su abuela,

La nueva película de Disney-Pixar se introduce con respeto y admiración en una de las más grandes tradiciones mexicanas como es el día de muertos, donde queda expuesto un gran trabajo de investigación respecto al tema visible a lo largo del metraje y queda de manifiesto dentro de la historia, donde dicha festividad es parte medular, además que se la muestra a profundidad para que el público internacional no se quede fuera.

La película está a la altura de otras películas de la marca Pixar, con un nivel de animación que rescata un sinfín de detalles y guiños a la cultura popular mexicana, resultando en un filme apantallante y colorido con una historia con tintes de melodrama familiar que de a poco se vuelve cada vez más atrapante llegando a ser honestamente conmovedora y emotiva.

Positiva es esta experiencia mexicana de Pixar, con un relato sensible y bello que es además divertido y que consigue profundizar en temáticas universales como la familia, los sueños, la memoria y la muerte, siendo a la vez un sentido homenaje a las tradiciones mexicanas.

<http://tantocine.com/coco-de-lee-unkrich-y-adrian-molina/>

125.txt

México en Disney

Es una película que representa muy bien algunas características de nuestra cultura y costumbres que tenemos. Una historia que toca el corazón de cada uno de los espectadores. Contiene la esencia de la gente mexicana. Nos hace reflexionar sobre la importancia de conservar nuestras tradiciones.

126.txt

No dejes de soñar

Pixar lo ha vuelto a hacer. Se ha vuelto a reinventar cuando parecía que era imposible. No deja de sorprendernos. Esta vez con la que seguramente es la mejor película de la productora, al menos, de los últimos ocho o nueve años. ‘Coco’ tiene una historia y unos personajes más elaborados que ‘Inside Out’ (2015) y esto la hace ser la gran favorita a ganar el premio a la mejor película de animación en la próxima gala de los Oscar.

Una voz en off del protagonista, Miguel, ya nos introduce en sólo dos minutos en la historia, con una animación sensacional. Coco es una película dirigida al público infantil, pero los adultos también

se emocionarán y lo pasarán bien. Es un film diferente de los que estamos acostumbrados a ver en el género de animación porque así como muchas de estas películas son bastante previsibles, esta tiene giros de trama muy buenos y sorprendentes, con un guión muy bueno que hace reflexionar a los niños y niñas sobre su futuro y cómo encarar los miedos y hacer frente y mantenerse firme en la decisión que se toma a pesar de que a tu familia no le guste. Estos son los auténticos valores de la película dirigida por Lee Unrikch y Adrián Molina. Pero además valora la unión familiar y el recuerdo hacia aquellas personas que ya no están, y este es un mensaje muy importante para los pequeños, como también por los grandes. Por este motivo, la canción ‘Recuérdam’e es fabulosa y transmite mucho con una letra muy bien escogida por un final maravilloso y que te hará emocionar. ‘Coco’ es una historia llena de magia, diversión y entretenimiento, pero también tiene escenas muy emocionantes y llenas de sentimientos. Todo ello acompañado por una animación excelente y una banda sonora notable, de aquellas que sabe hacer Michael Giacchino para este tipo de películas como demostró con ‘Inside Out’ o ‘Up’ (2009).

Sí, ‘Coco’ es así de buena. Por eso no dudéis en llevar a sus hijos, sobrinos o nietos a ver esta notable película de animación. Ellos os lo agradecerán y, de paso, vosotros también pasaréis un buen rato con este film tan original, refrescante, divertido, y también emocionante y conmovedor. Una película que te hace reflexionar a partir de buena música y un niño que tenía el sueño de convertirse en un gran músico. Así que no dejéis de perseguir sus sueños.

127.txt

Pequeña retroalimentación para la película

La película Coco ha sido comparada con diferentes películas de Pixar, sus expectativas de ésta película y de recomendaciones para el público en general otorgándole en una escala del 1 al 10 un 10 para todos los pequeños y un 8 de edad superior a 17.

128.txt

Simplemente Gracias

Cuando hablamos del Rey Midas de las productoras de cine, solo tenemos que referirnos al gigante de Disney y uno de sus mejores aliados como lo es Pixar y cuando surgen las noticias de que estos dos gigantes se unen en una nueva película, mis expectativas se vuelven un mundo de desesperación por poder ver ya este trabajo, aunque debo reconocer que venia algo defraudado en los últimos trabajos de ambos estudios en cuanto a traernos historias originales ya que estaban prefiriendo traer las continuaciones de sus grandes éxitos.

Pero queda demostrado que cuando se trata de traer historias originales todo vuelve a convertirse en magia y es lo que Coco logra hacer con su divertida aventura y de homenaje a la cultura mexicana. Cuando Lee Unkrich y Adrián Molina logran hacer una maravilla como termina siendo Coco no queda más que agradecer por tan bello trabajo y tan grato resultado.

Coco logra ser una película que en sus defectos están las grandes virtudes, y para ser claros en ese pensar es que Coco no es una película perfecta y eso es lo que la hace maravillosa ya que en su falta de explorar varios personajes o ser más detallada en ciertos momentos hacen que eso que puedo estar criticando se vaya todo por la borda al darte cuenta que no había otra forma de hacer uso de eso que se puede criticar, ya que te das cuenta que todo es preciso que todo termina siendo lo correcto y que hace permitir que Coco sea tan especial en su resultado final.

El trabajo de animación de Coco es sencillamente notable, bien realizado donde dudas si de verdad es una animación o es realidad, cada detalle de color, ambientación y vestuario recrea una magia sin igual, el trabajo que se hace con la cultura mexicana es ciertamente perfecto y si a esto debemos decir que su trabajo de música es solamente un pequeño placer.

Coco es aquella película en que hasta el corazón más fuerte se tiene que ver afectado con esa pequeña trampa que tiene la película en la cual si estas bastante atento a pequeñas referencias que te hacen resolver tempranamente el desenlace de esa aventura que experimenta Miguel en busca de eso que tanto anhela, es por eso que termina siendo realmente gratificante cuando de todas maneras logran romper tu corazón y sensibilidad y te sumas a eso que se llaman lagrimas que brotan de tus ojos, es un cierre realmente hermoso que es imposible no quebrarse con lo que estamos viendo.

Así Coco termina siendo la reivindicación de Pixar luego de momentos bastante flojos con sus últimos estrenos. En Coco se vuelve a lo que de verdad Pixar necesita, eso de contar historias Originales, ese es tu camino Pixar no lo olvides, además de ratificar que Disney todo eso que llegue a producir es un reconocimiento y un buen rastro de excelentes críticas.

Coco es esa película que tienes que ver en estos días y en la oportunidad que te puedas permitir, Coco es sencillamente un placer y un momento especial para tu vida, es una película altamente recomendada y admirada.

129.txt

Bella historia sobre el valor de las tradiciones, la familia y los sueños

"Coco" la última creación de Pixar, de la mano de uno de sus grandes talentos, Lee Unkrich. Es una película bellísima. Muy emotiva y llena de emociones. La animación es excelente, y la caracterización del paisaje y el entorno mexicano es muy veraz. Sobre la persecución de los sueños, sobre ir detrás de aquello que nos gusta y nos apasiona, sobre la importancia de la familia, las tradiciones, el legado, el recuerdo, el olvido y el perdón. Al principio me temía que fuese muy parecida a El Libro de la Vida de Guillermo del Toro, una película a la que tengo mucho afecto, y claramente si hay una inspiración en la película, aunque se haya modificado la historia. Aún así se diferencia, si en el "Libro de la Vida" se trataba el tema del día de los muertos en su forma más mitológica y fantástica, en "Coco" es mucho más humana, y más fiel a la tradición mexicana. Es una película muy bien construida, con distintos giros y sorpresas, te despista por momentos, cuando piensas que va a decantarse por lo convencional, te da una sorpresa. Muy recomendada.

Frases y diálogos de la película:

<http://frasesdecineparaarelrecuerdo.blogspot.com.co/2017/12/frases-pelicula-coco-lee-unkrich-adrian-molina-pixar.html>

130.txt

Ofrenda a México, a la vida y a la música

Hace mucho tiempo que no cuelgo una crítica en esta web, quizá demasiado, pero tras ver Coco necesitaba decir lo que me había parecido.

Después de ver las simplemente correctas Buscando a Dory y El viaje de Arlo, Coco no me llamaba en absoluto la atención. Es más, de no haber sido de Pixar, probablemente no la habría visto en el cine. Pero he ahí mi debilidad: Pixar, la factoría de animación que gusta a niños y enamora a adultos.

Es con eso con lo que juegan y con lo que ganan al espectador. Porque un niño no ha vivido lo mismo que un adulto para romperse con la historia de Carl y Ellie. Un niño ve en Wall-e a un robot adorable y gracioso, pero no entiende las referencias al cine mudo ni empatiza tanto con su tierno romance. Raro es que sepa quien es Frida Khalo y entienda el chiste, o sea consciente del trasfondo político de Bichos. No tiene la madurez suficiente para captar la brillantez de Inside out y la sublime escena del pensamiento abstracto. Pero sobretodo, no ha dejado atrás su infancia para mirar con los nostálgicos ojos de un adulto la escena en la que Andy juega una última vez con sus juguetes. Porque eso es lo que hace Pixar: despierta a nuestro niño interior sin olvidarse de nuestro yo adulto, jugando con nuestras emociones como si fuéramos un vaquero de plástico y tela.

Afortunadamente, Pixar vuelve a encontrar su camino con Coco, una preciosa obra que utiliza el sueño de un niño que quiere ser músico para llevarnos por un precioso viaje en el que las raíces, tradiciones y familia comparten protagonismo con la música.

El detalle de la animación es sorprendente. Desde las arrugas de los personajes más ancianos, a los movimientos de piel o el hoyuelo del carismático protagonista. La colorida estética le va realmente bien y el diseño del mundo de los muertos, con los divertidos detalles (los funcionarios, las aduanas, los guardianes, ...), es fascinante. No se me ocurre mejor homenaje a la cultura mexicana. De hecho, me parece un gran acierto y muestra de respeto que en España se haya mantenido el doblaje mexicano.

En cuanto a la historia, sucede algo que me cautivó e hizo que saliera del cine con una gran sonrisa. Y es que, pese a ser previsible, no deja de sorprender por la forma en la que aborda los sentimientos.

Piensas "esta historia no es para tanto" o "se veía venir", pero luego te meten esa escena que te deja en vilo por un minuto. Y te emocionas. Y perdonas que el antagonista sea tan plano o que lo vieras venir; porque por un momento todos somos Miguel y cuando entiendes de verdad que Coco es más que un nombre caes, de nuevo, rendido ante la maestría y humanidad de Pixar.

Coco es el Pixar que nos conquistó con Wall-e y nos enamoró con Up, una preciosa ofrenda a la música, a nuestras raíces y a la vida. De esas maravillas que no se olvidan. Y si no se olvidan, nunca mueren.

131.txt

Magnífica

Fui a verla con pocas expectativas, actualmente resido en EEUU y tengo cierta conexión con la festividad del día de los muertos, pero no sé, no me llamaba mucho la atención los tráilers.

Salí del cine encantado, es una película maravillosa, no inventa nada nuevo, ni es demasiado sorprendente, pero es MUY bonita, la música y la fotografía son estupendas, los personajes caen bien y no decae el ritmo en ningún momento.

Así que la recomiendo sin ninguna duda. Si ya la habéis visto, echadle un vistazo a los spoilers.

132.txt

Otra maravilla visual de Pixar

La última producción de Disney es una historia mejicana en la que por fin han tratado al país y a sus costumbres con acierto, convirtiéndose en México en la película más taquillera de la historia, llegando a estrenar un mes antes que en el resto del mundo.

Casi siete años duró la producción (la más larga de la historia de Pixar) en la que los directores de Monstruos S.A., Buscando a Nemo y Toy Story 2 y 3 Lee Unkrich y Adrián Molina viajaron

innumerables veces a Mejiro para documentarse y lograr reproducir fielmente las tradiciones del país.

La película está rodada en Inglés y otra versión en Español en la que Gael García Bernal es el único actor que le pone la voz a las dos versiones.

Muy conmovedora es la música de la película de Michael Giacchino ofreciendo otra partitura emocionante que combina a la perfección con música tradicional y melodías aportadas por Molina y Germaine Franco, complementado con la conmovedora canción de la película, "Remember Me" escrita por la pareja de "Frozen" Kristen Anderson-Lopez y Robert Lopez.

Una película con mucha fuerza, colorido y muy emocionante que consigue con el milagro de la animación llevarte a un viaje inolvidable en una historia preciosa creando una pequeña obra maestra que hay que agradecerle nuevamente a Pixar.

La película se acompaña en los cines con un corto de 20 minutos titulado "Frozen, la aventura de Olaf" bastante soso y aburrido.

Si te gusta esta película y no conoces "El Libro de la Vida" de 2014 también de animación y con temática similar ya la estás viendo porque al igual que esta te la recomiendo encarecidamente.

Destino arrakis.com

133.txt

No es redonda, pero llega al corazón del espectador, sobre todo por su conmovedor final

Estupendo film de animación, todo un canto a los sueños por cumplir y al amor y legado familiar.

Muy divertida, colorista, imaginativa, con intriga y al final verdaderamente emotiva.

Quizás no sea redonda en cuanto al ritmo se refiere, puesto que en ciertas fases del mundo de los muertos baja un tanto (muchas persecuciones, sin duda pensadas para los más chicos), hasta que el protagonista conoce a su antecesor.

Pero su primera media hora más o menos y la última, son primorosas, entretenidísimas y con muchísima calidad cinematográfica.

El guión es un dechado de virtudes, apelando al corazón de los seres humanos, hasta lograr enternecerlos y conmoverlos.

Una gran película, para chicos y mayores, disfrutable cien por cien, que deja un poso y sensaciones maravillosas siendo un entretenimiento familiar con numerosas enseñanzas positivas que haríamos bien en llevar a la práctica cada día.

Excelente banda sonora, bonitas canciones y un final antológico que pone los pelos como escarpías al espectador más duro.

Recomendable al mil por mil, hasta el momento ya ha conseguido algunos premios importantísimos, como el del mejor film de animación, concedido por el Círculo de Críticos de Cine de Nueva York, y por el National Board of Review.j

134.txt

La Pixar más Disney que nunca

Ya saben que me gusta el cine de animación también y la nueva de Pixar, Coco, no me la podía perder.

Tenía reparos a ir porque conocía de otra película llamada el Libro de La Vida (de 2014, producida por Guillermo del Toro) y el argumento de aquella me resultaba demasiado similar al de Coco: el prota quiere ser un músico y se viaja al mundo de los muertos de México (muy lejos del Hallowinesco mundo de Burton -Pesadillas Antes de Navidad y La Novia Cadáver-).

Pero siendo sinceros, la Pixar más Disney que nunca en cuanto a personajes y fórmula funciona. Y si funciona, para qué pedir más.

Un bellissimo y emocional canto a la cultura mexicana entre colores y bonitas canciones. La del final arrancó el aplauso de la sala.

Yo salgo del cine con un nudo en la garganta y sensiblón. No es la mejor ni más original de Pixar pero es una bonita historia candidata al Oscar de animación y mi favorita de este año a falta de verme The Breadwinner.

135.txt

VIVA MEXICO

Vivimos en una época en la que en general, para bien o para mal, las películas animadas superan por mucho a las películas "normales" (no animadas); ¿Por qué? No lo sé, igual es porque este tipo de películas consiguen aflorar nuestros sentimientos de una forma que ninguna película "real" lo consigue.

Si tuviese que decir algunas de mis películas favoritas de este género, serían: Mulan, Los Increíbles, Toy Story (1 y 2), y Ratatouille.

Sin irme más por las ramas, Coco es una película preciosa, con unos personajes increíbles (a mí personalmente, Héctor me encantó), una trama muy muy buena, una animación sobresaliente y una banda sonora.... IM-PRE-SIO-NAN-TE. Esta película consigue transportarte a otra dimensión, y sobre todo si no eres de México, esta película consigue que te enamores de su cultura y de sus tradiciones así como de sus personajes tan bien contruidos y desarrollados.

Esta película cumple de una forma genial lo de hacer que tus sentimientos afloren, y es que, aunque no lo quieras, una lagrimita vas a soltar ya sea o bien de tristeza o bien de felicidad, y sinceramente, que una película sea capaz de hacerte sentir justo lo que quieren que sientas es un logro impresionante por parte del director.

Bien, ahora vamos con lo malo. La película es increíble, sin embargo, por muy buena que sea, no llega a ponerse al nivel de nostalgia e impresión que nos causaron Toy Story o Los Increíbles, ya que estas no solo eran buenas, sino que por algún motivo siempre se quedarán en nuestra memoria, y serán recordadas por siempre; y ese, no creo que sea el caso de Coco, que por muy increíble que sea, no pasará a la historia como las anteriormente mencionadas.

Todas las películas de Pixar, tienen un mismo esquema de acontecimientos en sus películas desde hace unos cuantos años:

Personaje quiere conseguir sus sueños, por x o por y no puede, realiza el llamado "Viaje del héroe" junto a un compañero, y al final logra ese sueño.

Este esquema lo siguen Zootropolis, Inside Out, Vaiana, Buscando a Dory, y Coco también. Personalmente, Coco es mi favorita de estas que acabo de citar, pero sinceramente, estoy harto de estos cánones, estos esquemas que son siempre los mismos. Parece que las compañías de animación, ya tienen una fórmula del éxito y la aplican a todas sus películas, y esto, quieras que no, al final cansa.

136.txt

Maravillosa

Nos llega la última aventura animada de Pixar, queda claro que Pixar es uno de los mejores haciendo cine de animación, en estos últimos años nos han dejado grandes películas como “Cars”, “Ratatouille” y sobre todo la tercera parte de “Toy Story”.

En esta ocasión el director Lee Unkrich se ha juntado con Adrian Molina, de origen latino para traernos una aventura que nos lleva de viaje a un doble más allá, la imaginaria tierra de los muertos y la tradición y el folclore mexicano.

La película tiene como protagonista a Miguel, un niño que persigue su sueño de ser músico, y para conseguirlo acaba en la tierra de los muertos. Ahí con la ayuda de varios personajes, al cual más raro, descubrirá por qué en su familia han desterrado la música.

La película va claramente de menos a más, al principio nos cuenta y nos resume toda la memoria familiar a través de fotografías.

La cinta es un gran homenaje al pueblo mexicano y a sus tradiciones. Para ellos el día de los muertos es una gran fiesta y todo el pueblo lo vive de manera espectacular, recordando a sus seres queridos.

La película es deliciosa, muy imaginativa y te va sorprendiendo a medida que se va desarrollando. Los aspectos técnicos son impecables y todo acaba revelándose como un poderoso melodrama musical.

Varios artistas ponen sus voces a los personajes, destaca sobre todo el papel de Héctor, al cual le pone voz Gael García Bernal.

Es una cinta de animación, pero no es para público demasiado infantil, ya que muchos aspectos no los entenderán, la disfrutan más los adultos que los niños. Y encima tiene varias escenas muy emotivas que tocara los corazones de los más sensibles.

Lo mejor: Lo bien que está contada

Lo peor: Cuesta un poco entrar en ella

137.txt

UN NUEVO REGALO DE PIXAR

Daba un poco de miedo. Tras maravillas como "Toy Story 3" o "Del Revés", cualquier cosa que no fuera la excelencia iba a ser examinada con lupa. Además, en plena era Trump, la fecunda alianza Disney-Pixar se atrevía con la cultura mexicana. El riesgo de caer en el estereotipo y subestimar miles de años de Historia en aras de un taquillazo estaban ahí.

No obstante, basta ver el opening y referencias a la cultura popular (ese mítico Santo) para comprender que estamos en buenas manos. Que si el adorable protagonista se llama Miguel, el título de esta hermosa fábula no puede ser otro que "Coco". El metraje no se hace pesado en ningún momento, salpicado de los números musicales adecuados que nunca entorpecen la trama, la enriquecen.

Se trata de un viaje de guía espiritual contado sin pedantería, con un alarde de animación al alcance de muy poco, acompañada de un doblaje casi perfecto. Personajes como Héctor nos recuerda al maravilloso "peladito" que fue Cantinflas. El sumergimiento en el olvido y la pérdida que es El Día de los Muertos es digno del mejor Tim Burton en "La novia cadáver".

Que un film esté principalmente orientado para la infancia no excluye que pueda ser para todos los públicos. "Coco" está hecha para conmover al más mínimo atisbo de sensibilidad con el que se la mire. Una correcta fusión de "La Divina Comedia" (Dante incluido) y ese carácter tan particularmente atractivo del México lindo cuando aborda un tema tan escabroso como la desaparición del cuerpo.

Es un alarde donde quizás me sobre un poco de moralina familiar (era peaje obligado), lo cual no exime que estemos ante algunas de las escenas más bellas de género en los últimos años.

Una joya para recordar.

138.txt

El recuerdo de una bella historia...

Los bellos recuerdos reclaman su lugar en la inmortalidad y esa misión parece ser la piedra filosofal de Pixar. Su ingeniería, cargada de sensibilidad, construye inexorablemente sensaciones conmovedoras y cautivadoras en el espectador que queda -irremediabilmente- embargado por una talentosa y mágica historia sobre la tradición, la familia, la ilusión y, en definitiva, el tiempo, ese maravilloso conductor de nuestras vidas.

Brillante y colorista, Coco es la construcción de un día y una noche que trasciende la realidad, es el fruto de esa imaginería que enseña a ensoñar. Nunca la muerte había sido tratada desde esta memorable perspectiva.

La música es el conductor idóneo del corazón, Pixar (sabio mago) lo sabe y lo utiliza de forma divinamente eficaz y al final, la inocencia, hace todo lo demás para conseguir esa lágrima, representación eficiente de ese sentimiento que esta factoría de sueños te ha conseguido inspirar.

Me queda premiar el arte, la convicción de la artesanía elaborada con una pizca de tecnología y dos pizcas de talento sobrenatural.

Hasta la próxima, Pixar.

139.txt

Altanera, preciosa y orgullosa

El cine me dio su regalo de Papá Noel anticipado la noche del 23 de Diciembre.

El flexo vuelve a iluminar con fuerza, tras algún recambio de bombilla que le hizo perder un poco de luminosidad, ha llegado su segundo gran pelotazo desde 'Toy Story 3', pasando por la maravillosa 'Del Revés', posiblemente la mejor película de la compañía.

A decir verdad siempre pensé que 'Del Revés' iba a ser la única muestra de Pixar de llegar al nivel de sus mejores obras, teniendo en cuenta que sólo venían secuelas y esta 'Coco' cuyo trailer me dejó muy frío. Y en cierto modo es así, porque en mi opinión tras sólo un visionado, 'Coco' quizás no está a la altura de las 4 o 5 mejores películas de estos genios de la animación. Sin embargo hablamos de una gran película, y el 8'3 que de momento cosecha en esta web (récord de Pixar) con más de 5000 votos lo demuestra, supongo que empujada también por los amigos mexicanos que son quienes obviamente más viven esta película.

'Coco' empieza con una prelude original, y unos minutos de introducción efectivos, luego en el desarrollo funciona pero sin brillantez, y parece que no va a pasar de ser una correcta película. Sin embargo los últimos 30-40 minutos son los que impulsan a 'Coco' y la llevan a ser una de las películas más emotivas del año. Creo que sin exagerar la mitad de la sala terminó la película con lágrimas, y la otra mitad conteniéndolas. No es la primera vez que Pixar nos hace esto (de hecho es habitual) y esperemos que no sea la última.

El argumento encierra dos grandes tramas: El amor por la música; y sobre todo la necesidad humana de no ser olvidados y dejar nuestra huella en el tiempo. Acompañado por las relaciones de familia.

Visualmente es un prodigio, qué imaginación la del mundo de los muertos, muy creativo. Pero es que el mundo de los vivos no se queda atrás, y más aún con la iluminación del día de muertos.

La música de Don Michael Giacchino a base de marimbas, trompetas y guitarras captan la esencia mariachi y es sencillamente otra obra notable de este compositor que ya ha dado a Pixar grandes trabajos como en 'Ratatouille', 'Up' y 'Del revés'. Y no sólo de piezas instrumentales vive 'Coco', ni mucho menos, ya que contiene varias canciones originales, destacando entre ellas "Recuérdame (Remember Me)" que aparece en varias ocasiones y en diversas formas (y que está nominada al Globo de Oro), la divertida "Un poco loco", o la emotiva "El latido de mi corazón (Proud Corazón)" que pone el broche de oro a la película. También merecen mención especial la escena de "Juanita" y la adaptación de la canción tradicional "La llorona".

Y por último debo añadir que me parece correcta la decisión de respetar el doblaje latino, ya que la ocasión lo merece y, lo mismo que otras veces reconozco que me saca de la historia (y de hecho siempre intento evitar ver algo en doblaje latino), en este caso logra el efecto contrario. Felicidades a los dobladores, pero sobre todo a quien decidió que llegase así a España.

140.txt

Emoción inesperada

La peli comienza metida en una cultura que suena raro para el europeo, pero pronto te adentra en la trama de forma que aprendes mucho sobre su cultura y la forma de vivir. Te hace aplicar tus emociones a la historia, sentir las emociones del protagonista como si fuesen tuyas. Tremenda película.

141.txt

PIXAR Y SU TOQUE MAGICO

Historia más que bonita, y que toca la fibra sensible, con moraleja sobre la familia, el amor y los recuerdos. Técnicamente una maravilla, colorido espectacular, música mariachi... qué mas quieres. Estás tardando, ve a verla.

142.txt

critica de dalo a Coco (una peli cundiosa)

Como no, tratándoselas de una película de Pixar, Coco a sido una obra maestra, además de contar con Lee Unkrich como el director, el mismo de Buscando a Nemo, monstruos S.A y Toy Story 3. Esta ha sido la primera película de animación dirigida al público joven que goza con la identidad propia gracias a tratar de forma tan directa la muerte. Este precioso relato transcurre en un pueblo mejicano que durante la noche mas tradicional de este pueblo, el día de los Muertos, el protagonista Miguel, nos descubrirá los entresijos de su familia mientras intenta alcanzar su sueño de ser músico.

143.txt

Bien hecho Pixar

Lo han vuelto a conseguir. Coco es una película del nivel de Inside-out o Up!, y no es fácil. Consigue enganchar a público de todas las edades. La película trata un tema tan sensible para todos como es la familia, "la familia es primero". Bravo por Pixar.

144.txt

Que divertida es la muerte

Eros y Tanatos en perfecta armonía. Bonita la forma de acercarse a la muerte que tienen en México tan alejada del Día de los muertos de España.

Recomiendo verla en versión original. No conozco la versión española pero hay que tener en cuenta que durante toda la película los personajes hablan unas veces en castellano y otras en inglés logrando la misma armonía que tiene todo el resto del elenco: odio, amor, traición, deseo, olvido.

145.txt

Oscar directo.

Pocas películas animadas modernas se han enfrentado a un tema tan complejo como la muerte en "Coco" y han tratado de abordarla desde el alma, con corazón, y logrando no solo que sea apta para todo público, sino que se ubique entre las mejores obras de Disney/Pixar. Lee Unkrich, director de "Toy Story 3", ha vuelto a hacer un golazo en final de Champions a lo Cristiano Ronaldo.

Se trata de un viaje espiritual contado sin chistes pelotudos, de manera genial, llena de sabiduría y carisma. Es increíble que a la película no se le escapa ningún detalle, cada pregunta que te haces, te la responden en el transcurso, y algunas explicadas de manera ingeniosa.

Puede que le cueste arrancar en la trama, o te imaginás algo distinto, pero no pasan ni 25 minutos en donde te sumergís en una historia de la recontra re mil puta madre que lo parió.

Uno de los objetivos de "Coco" es hacerte emocionar y lo logra con creces, es verdad que ésta película te pueda llegar a sacar una lágrima, el poder emotivo y realista que tiene es impresionante.

A nivel animación es soberbia, te saca emoción en cada plano, color, brillo, movimientos, y a esto se le suman una voces de la puta madre, a Gael García Bernal no me lo banco pero admito que estuvo genial, y una música que pega con todas las escenas. El score está a cargo Michael Giacchino que ya se transforma es una cara conocida (Inside Out, Rogue One, War for the Planet of the Apes, Spider-Man: Homecoming)

Joya de Disney/Pixar que se convierte instantáneamente en clásico y será recordada para siempre. La tradición mexicana tiene que estar de festejo y con el culo mojado. Y tal como han comentado ellos, la visión de su país en el film es magnífica.

Me hizo acordar mucho a uno de las mejores aventuras gráficas que jugué en mi puta vida y no al pedo le tengo un cuadro en mi casa: Grim Fandango.

Oscar directo. Y la tienen adentro todos los fans de Snyder diciendo que ésta película era una mierda, re crapera, para putos, mexinarcos, y no sé qué otras barbaridades. Les quedó ardido el papo porque cuando se estrenó dos días después de JL le rompió el tuje.

Más en:

<http://cinefrikiyvideojuegos.com/>

146.txt

Honesto homenaje a la tradición mexicana con la maestría de Disney/Pixar

Es una buena película para divertirse, emocionarse y disfrutar del espectáculo de decorados, colores y la técnica de animación actual. Un cruce entre Pixar y Disney. Un homenaje y propulsión imaginativa del Día de los Muertos en la cultura mexicana hecho con honestidad, humor para todos los públicos, ritmo acelerado y despliegue de medios. Con un ligero toque 'Halloween' o inspiración de las películas de Tim Burton, como La Novia Cadáver en cuanto a los esqueletos parlantes de los personajes.

Las demás críticas que aluden a la historia clásica, lugares comunes, etc, no sé si quieren ver otra película, esto es Pixar y Disney. Si esperas un film independiente de arte y ensayo este no lo es. La historia es original, contiene valores familiares, tiene giros argumentales, se documenta en la tradición mexicana y lo explica a la audiencia de un modo sencillo para los niños pero su argumento exige de concentración a los adultos, con posibilidades de riesgo y aventura entre el mundo de los vivos y los muertos, alteración y consecuencia de los actos.. con guiño a Regreso al Futuro incluido.

La paleta del film se basa en colores saturados tirando a pasteles bien degradados tanto en el mundo iluminado por el sol de los vivos como en la noche de los muertos. Las fuentes de luz están difuminadas o repartidas a lo largo del cuadro en scope de la imagen, en vez de forma homogénea como estamos acostumbrados en animación. Este efecto se hace más patente en las escenas con velas, los movimientos de cámara son precisos y naturales tal como si se usaran dollys reales y el efecto

movimiento muy similar al celuloide. Es un placer divertirse con los gags, elementos en la imagen, y golpes de humor que te pillan por sorpresa.

En cuanto a imaginería visual y números musicales el despliegue de medios en los mundos retratados es el habitual en las películas americanas: decorados, edificios, fuegos artificiales, vehículos y luces por doquier, con excelente atención al detalle, inmersión en la escena y disfrute para los niños.

Yo lo pasé en grande, disfruté como un enano, entendí la película como un adulto y me sorprendió en cuanto a lo que esperaba. La recomendaría a todo el mundo y a niños bien pequeños. El doblaje mexicano es un acierto y se entiende perfectamente para el público de España. ¡Supongo que incluso más auténtico que en inglés puesto que los personajes son mexicanos!

Una película que te sorprenderá (y emocionará). A ver en pantalla grande indefectiblemente.

147.txt

Sentimental, pero todavía sufre de algunos clichés

A decir verdad fue interesante encontrar una película gringa donde los protagonistas no son gringos, mejor aún que no estén agringados como ha sucedido con otras producciones *cof*Las locuras del emperador*cof*.

Naturalmente apela al sentimentalismo de la historia y todavía tiene algunos clichés, pero que no son del todo negativos. una mujer fuerte que se echa al hombro a su familia es algo muy común en México y en Latinoamérica en general, también el apego a las tradiciones y a la familia, pero no por eso deja de contar una historia que no es exactamente como son las tradiciones del día de los muertos, pero que logra cohesionar la historia.

148.txt

Pixar lo hizo de nuevo.

Un nuevo film que llega al corazón hasta de la persona más fría y hace que se te plante un lagrimón. Una película que tiene todo llanto, risa, drama y sobre todo nudo en la garganta.

La historia comienza algo común, el niño que enfrenta a la familia y quiere hacer lo que él quiere, luego con el correr de los minutos nos vamos adentrando a un guion interesante que se desarrolla con mucha sutileza delante de nuestros ojos y nos dejamos llevar por ese mundo.

La animación es impecable. La banda sonora acompaña muy bien el film, no subraya nada y dan ganas de escuchar y más, también uno sale cantando las canciones (no es de esas canciones que se te pegan por meses, como Lego Movie y su “Everything is awesome”)

No conozco mucho sobre la cultura mexicana pero todo lo que es vestuario y ambientación parecen estar muy bien logrados, con los colores clásicos del día de los muertos y elementos mexicanos bien logrados.

El desarrollo del personaje Miguel es muy atractivo, vemos como pasa por varios cambios de ánimo y sin darnos cuenta madura frente a nuestros ojos, empujándonos a madurar también y valorar la familia.

Hubo algunos momentos en los cuales los mensajes que deja la película parecían un poco raros para ser un film que está apuntado al público más pequeño, pero son los menos. Como siempre la metáfora que acompaña al mensaje positivo siempre tapa a estos pequeños momentos extraños.

Cuenta con muchos chistes divertidos, algunos inocentes y otros un poco más para adultos. La comedia va acompañada del drama y el maldito nudo en la garganta al final de la película, fui advertido de la posibilidad de lágrimas y por eso no lleve nada para comer, no hubiera podido tragar nada al final.

Mi recomendación: Hermosa película para toda la familia que vale la pena ir a ver al cine para disfrutar de la excelente animación y la banda sonora.

Mi puntuación: 8.5/10

149.txt

A RITMO DE ESQUELETOS

Agradable hallazgo esta pequeña joyita que cuenta la historia de Miguel, un joven mexicano de 12 años que vive con la ilusión de aprender a tocar la guitarra y seguir los pasos de su ídolo Ernesto De La Cruz. Tendrá que pelear con la opinión negativa de su familia que quiere que siga la profesión de zapatero, sobre todo la de su energética abuela.

Durante la celebración del Día de los Muertos y después del robo de la guitarra de Ernesto por parte de Miguel hará que se desencadene una sucesión de acontecimientos de fatales consecuencias para el rumbo de su vida quedando atrapado en el inframundo de los muertos. Con la fiel compañía de su perro Dante buscará la forma de volver al mundo de los vivos y para ello contará con la ayuda de Hector, un fallecido que es un ser solitario y olvidado por su familia.

Coco para mí ha sido una gran apuesta de Pixar que tantos éxitos ha conseguido con otros tantos títulos como Toy Story, Buscando a Nemo, Monstruos S.A., por nombrar algunos.

Me lo he pasado muy bien, con personajes como la abuela de Miguel con su carácter estricto y por momentos alocados, el divertido Hector que nos saca más de una carcajada con sus rocambolescos movimientos de huesos o Chicharrón amigo de Hector que guardará la nota más nostálgica de la película. Sencillamente por lo que me han hecho disfrutar le doy una nota de un 8.

150.txt

Ver una película que tenga el sello de Disney y no te hable del "persigue tus sueños".

Toda mi crítica abajo, no concibo las críticas sin spoilers...

151.txt

Coco para los ojos de una mexicana

Me pareció una cinta muy buena, en tanto a historia, efectos visuales, colorido, música y ritmo de la trama. pero me quedo un poco corta respecto a la visión que muestran en la tradición mexicana y me refiero a que el detalle visual es muy bueno, resalta lo que vemos el día de muertos. Pero no resalta los valores de nuestro pueblo, así como tampoco muestra la esencia de nuestro respeto a la muerte y lo que representan nuestras ofrendas, ademas llega un punto en la película donde solo la imagen es mexicana, pero las acciones son una trama estadounidense y es ahí donde se convierte en una película mas o un típico cliché que pierde el sentido cultural que quisieron darle al hacerla.

152.txt

Color, luz y perfección

Si tuviera que explicar en una palabra esta película sería "bonita", tanto en el contenido como en la forma. Técnicamente parece imposible hacer unos dibujos tan buenos y una animación tan magnífica. Como película, Disney y Pixar nos retrotraen al aroma de las películas clásicas, con música latinoamericana de comienzo del cine sonoro y su afamado cantante y galán que luego resulta ser todo lo contrario a lo que parece ser.

Como adulto incluso podría ponerle un 9, pero el problema es que por un lado no engancha con el público a la que va dirigido (infantil), y el guion es demasiado lacrimógeno y enrevesado para un niño y demasiado obvio para un adulto.

Por lo demás película recomendable, sobre todo desde el punto de vista visual.

153.txt

Familia

Hacía tiempo que una película de animación no me conmovía tanto como "Coco".

Visualmente es hermosa y transmite muy lindos mensajes: la importancia de la familia (especialmente de las abuelas) y el hecho de seguir recordando a los seres queridos, porque la verdadera muerte es el olvido.

154.txt

Todo corazón

A estas alturas no hay mucho que decir a nivel técnico de una obra de Pixar. Se van superando film tras film en el apartado visual. La fotografía, la animación, los colores, los fondos, los personajes, todo es casi (porque cada vez mejoran) perfecto.

Coco funciona muy bien cuanto más desconozcas de su argumento. Si como yo, únicamente sabes que trata sobre un niño de México enamorado de la música que el día de los muertos acaba en el mundo de éstos, la película te dará alguna que otra sorpresa agradable, al menos hasta la mitad de la película, donde con todas las cartas sobre la mesa la historia se vuelve previsible y no es difícil aventurar los diferentes giros de guion.

Sin embargo, la historia está perfectamente contada por lo que lo anterior a penas le resta puntos al disfrute de la película ya que, aunque la historia sea algo convencional, el imaginario del mundo en el que se desarrolla es apasionante, e ir descubriendo las diferentes particularidades del mundo de los muertos es sumamente gratificante.

Por último señalar la parte que mejor se le da a Pixar, llegar al corazón del espectador. Puede que nos resulte evidente el final, puede que estemos toda la película preparándonos para ello, pero, aun así, te emoción. Resulta casi imposible contener las lágrimas, y eso habla muy bien de cómo está contada la historia y sobretodo, como están desarrollados los personajes, de modo que sientas lo mismo que ellos. Todos entendemos a Miguel y, nos emocionamos, nos frustramos, reímos, lloramos y nos identificamos con él.

155.txt

Nunca antes la muerte había estado tan viva

Aunque con el arribo de las ideologías modernas y, por ende, la relegación de las costumbres más tradicionales este fenómeno ha presentado una baja considerable, a lo largo de los años, se ha ido gestando una lista negra de temas de importancia máxima y tratamiento delicado, unos que nadie se

arriesga a tratar, una serie de asuntos que, por diferentes razones, se mantienen bajo un veto invisible pero practicable dentro de las historias de los grandes estudios, los cuales prefieren soslayarlos debido a lo lábil y peligroso que supondría un paso en falso; tabús o no, estas materias significarían para cualquier estudio productor una osada tesitura de “apuesta todo o pierde todo”. La homosexualidad, las divisiones políticas, los atentados o acontecimientos trágicos, coyunturas sociales, lenguaje mordaz, violencia explícita, la eutanasia, el suicidio o el asesinato componen una larga lista de la cual no se habla, sin embargo, si para un adulto resulta realmente engorroso digerir filmes de esta índole, es entendible que la mente de un pequeño no resistiría ni la mitad de eso. No obstante, en el caso de esta cinta animada, la muerte, un tema abiertamente polarizante en la actualidad, se ha topado con un tratamiento delicadamente inteligente con el fin de plasmar, de manera fantástica, la verdad que esconde la perdida de algún ser querido, usando accesibles analogías que levantan un trabajo propositivamente único. Entorno a esta, la película entera se desplaza con holgura entre situaciones de dramatismo sentimental y comicidad de origen circunstancial que logran, dentro de todo ese contexto irreal y esperanzador, reflejar la dura y pura realidad, apoyándose, con respeto, en la celebración idónea que encaja plenamente con el leitmotiv de la trama. Está claro que lo que facilita el buen resultado es el carisma y la particular esencia de la historia y sus personajes, ellos son peones que sirven de puente entre el mensaje y el espectador. Entre el aglomerado del reparto, al igual que del equipo, brillan nombres inequívocamente latinos, lo cual es su segundo gran punto fuerte: la apertura a una cultura de por sí menospreciada. Anthony Gonzalez, Benjamin Bratt, Jaime Camil, Ana Ofelia Murguía y el grande Gael García Bernal lideran la misión de poner en alto su tierra, sus tradiciones, sus voces, sus necesidades, y ahora es el tiempo ideal para que un trabajo como este, uno que tiene al territorio mexicano como centro de acción, llegue no solamente a las salas norteamericanas, sino a oídos de todo el mundo. En síntesis, la película trabaja en muchos campos, contiene mensajes para todas las edades, cada espectador puede extraer lo que desee de una aventura que se consolida como el filme animado del año.

Creativamente, el filme desempeña sus labores de forma que exhibe la eximia calidad acostumbrada en las obras de Pixar. Sigue los patrones de introducción y desarrollo evidenciados en los trabajos previos, y aunque los más asiduos sientan repetitivo este modelo, siempre es estimable el esfuerzo por esquivar lo tradicional mediante historias que trascienden barreras narrativas,

inequívocamente, a través de sus emocionales guiones. Siendo sus dos primeros actos un completo disfrute, el plato fuerte está reservado para el final pues “Coco” tiene el lujo de poseer el segundo clímax más emocionalmente perturbador y sentimentalmente dramático en un filme animado del siglo XXI, solo por detrás de, sin duda alguna, “Toy Story 3”. Es sobrecogedor el conjunto de emociones que trasmite a la audiencia un momento audiovisual tan glorioso, uno que ha quedado grabado en los anales del cine a fuego, uno que asegurara la presencia de pañuelos. Pese que para muchos puede sentirse anticlimático y brusco, este cierre compagina, perfectamente, con la atmosfera de la narración, poniendo en manifiesto la vigorosidad y longevidad que Disney continua manteniendo.

El apartado visual es cuento aparte. Luego de una hermosa simpleza grafica proveniente de “Cars 3”, el estudio se remonta y decide volver a apostar por los paisajes puntillosamente cuidados, usando como herramientas colores brillantes, texturas vistosas y confecciones que dejaran absorto a más de uno, tal vez, sea eso por lo que muchos asistentes acuden a las salas con cada nuevo estreno, ellos están al tanto de las cotas de prolijidad y las exigencias laborales que la empresa retrata a través de sus interminables Magnum opus. Del mismo modo, el aspecto sonoro sobresale en contadas situaciones, sin embargo, en las que lo logra, lo hace de manera inmejorable. Aunque no consigue abrazar los niveles de memorabilidad de las melodías de Lin-Manuel Miranda para “Moana” o Randy Newman para “Toy Story”, el filme extrae lo que más puede de estas en los ensamblajes dramáticos, destacando indudablemente “Remember me” de Kristen Anderson-Lopez y Robert Lopez, la cual acondiciona el momento emocional más poderoso del filme.

“Coco” de Lee Unkrich y Adrian Molina condensa una amplia cantidad de extrañezas y tradicionalismos para el cine americano, convirtiéndose así en la obra audiovisual animada del año por excelencia. Esta disfrutable y profundamente emocional película tendrá cabida segura dentro de los más prestigiosos premios cinematográficos, sin embargo, más allá de recaudaciones o galardones, sus creadores deben sentirse plenamente afortunados de que su filme se haya hecho un espacio en las cabezas y corazones de millones y millones de personas, quizás, del mismo modo que sucedió conmigo. Podemos respirar tranquilos, las películas de Disney siguen significando pilares de aprendizaje para el crecimiento de muchos.

156.txt

México lindoooooooo

Un niño mexicano sueña con ser músico y poder cantar y tocar la guitarra delante de mucha gente, pero su familia se lo tiene prohibido y le invita a que siga la tradición de hacer alpargatas, pero “La Noche de los Muertos” puede hacer cambiar todo...

Reciente ganadora de 2 Oscar, por mejor película de animación y por mejor canción, Coco es una película llena de emotividad, de luz y de esperanza en mitad de las tinieblas del egoísmo y de los éxitos conseguidos a costa de aplastar al contrincante. Pero sobre todo es una explosión de color, de vitalidad y un canto a las tradiciones de todo un país, tan necesitado de derribar barreras y muros interpuestos e innecesarios, como es México. Todos llevamos a un Miguelito dentro, tenemos nuestros sueños e ilusiones y peleamos por ellos cueste lo que cueste, a veces haciendo caso omiso a los consejos de los nuestros, porque creemos que podemos y debemos luchar solos contra el mundo...pero luego nos damos cuenta que sin el apoyo de la familia no somos nada, o por lo menos somos mucho menos de lo que podríamos llegar a ser, somos incompletos. Te hace pasar un muy buen rato, te evoca a los tiempos pasados en que éramos niños cargados de ilusiones con toda la vida por delante y lo envuelve todo con un colorido espectacular. Lee Unkrich (Buscando a Nemo) y Adrián Molina filman una aventura para toda la familia llena de emoción que toca la fibra del espectador y que perdura en la mente por su ternura y buenrollismo.

Sacapuntas de oro: Su alegre y pegadiza banda sonora. Su constante vitalidad. Que no te esperas el giro final. Para los que les gusta que los cuentos siempre acaben bien.

Sacapuntas de madera: Que pierda fuelle entre los espectadores y los grandes críticos por ser una peli de dibujos. Que la visita a la bisabuela la debería haber hecho otra persona. Los animales dan más miedo que otra cosa. Que si hay segunda parte no mejorará ni de largo a esta primera.

Nota: 8,5 Sacapuntas.

157.txt

Lágrimas de infancia

Disney y Pixar lo vuelven a hacer, consiguen elevar la técnica en pos de la sensibilidad, la emoción y aquel resquicio de inocencia y ternura que resta en todos.

Siendo una película de animación, con público infantil, es destacable la forma de tratar el difícil tema de la muerte, que rodeado de la idea de memoria y familia, se muestra con naturalidad y sin miedos, algo infrecuente no solamente al tratar el asunto con los niños, sino en todas las manifestaciones donde la muerte está presente. La cinta lo consigue con un respeto inmenso a las tradiciones y la cultura mexicana.

Es un canto a la vida, la familia, la música y la memoria. Pese a contar con un esquema narrativo poco sorprendente y una simplificación de diversos personajes para un final en forma de moraleja, propio de las películas Disney, estos elementos no lastiman la película. La emoción en los ojos de Coco y en los de Miguel marcan la pauta a los ojos propios, donde se vierten lágrimas redondas, propias de la infancia.

158.txt

UN CANTO A LA VIDA.

El trabajo más barroco de Disney-Pixar nos presenta un canto a la vida desde el mundo de los muertos. Simpática y acertada aproximación a uno de los temas más complicados de asumir y de entender, la muerte, estar emplazada en México la hace doblemente consecuente con su intención. Vistosa y colorista, con un trabajo técnico prodigioso (superándose en cada producción, no se esperaba menos) nos ofrece una tierna historia con un tema principal, la familia, el recuerdo a nuestros antepasados y de cómo nos puede influir en nuestro futuro las acciones pasadas.

No merece mayor crítica, es un trabajo absolutamente disfrutable, que emana ternura y melancolía, y que te llega a tocar la fibra sensible en varios momentos, su mensaje está bien claro y definido, una delicia de trabajo, llamada a convertirse en un clásico moderno instantáneo.

NADIE ESTA MUERTO SI ESTA VIVO EN NUESTROS RECUERDOS.

Saludos.

159.txt

Me daba flojera, pero...

Me daba flojera verla, tantos premios, tantas buenas críticas... pero al final la vi y me gusto mucho.

Un argumento sólidos y una manufactura fina!

160.txt

Aaaaaaayyyy de mí llorooooona.

Menuda putada, toda la vida trabajando para no salir de pobre, morirte, y que en el otro mundo siga habiendo clases sociales. Pues nada, así de crudas son la vida y la muerte.

Coco. Llegó sin hacer ruido, sin llenar las tiendas con sus juguetes, ni con sus peluches, ni con sus disfraces, sin copar las cartas a los reyes magos, sin rompernos los oídos con sus canciones, sin pretensiones, sin un odioso muñeco de nieve parlanchín. Y resultó ser una de las mejores películas animadas de Disney y de Pixar. Con una historia sorprendente, original, atrevida, ingeniosa y hermosa. Con unos dibujos espectaculares y una banda sonora para el recuerdo.

161.txt

CEMENTERIO DE NOTICIAS

Lo mejor: la medida a la hora de introducir temas (los que se escuchan son muy significativos, en especial una pieza, “La llorona”, que de buen seguro despertará sincera ternura entre los espectadores) para no convertir la ocasión en un absurdo musical como sucediera en muchos casos pasados (algo más meritorio si cabe al englobarse, la trama principal, en dicho campo sociocultural

manifestando el precio de la fama más populista y las consecuencias de la ambición más traicionera) que ofrecieron vacío entretenimiento infantil y profundo sopor adulto, estando por ello justificadas, sin excepciones, el sinfín de nominaciones que le han sido otorgadas (Globos de oro, Premios Annie, Círculo de críticos de Nueva York, National board of review, Critics choice awards, Satellite awards y Asociación de críticos de Chicago entre los más importantes); el soplo de aire fresco que brindan unos personajes sorprendentemente originales (guardando mucho encanto y mayor carisma) que rehúyen de prototipos preconcebidos impuestos por el capitalismo comercial pese a que, como es obvio, se plagian rasgos ya atisbados en producciones similares, no siendo más cierto que innovar hasta ese punto se antoja una insalvable ilusión en la actualidad, algo aplicable también al guión (las situaciones están muy bien hiladas pero son predecibles y algo tendenciosas, aproximándose a la mejor versión de Disney como ha afirmado parte de la prensa especializada si se omiten clásicos como Aladdín y La bella y la bestia, ambos en otro nivel); el cortometraje de Frozen que precede a la película en salas comerciales, una fantástica aventura navideña audiovisualmente impecable (al igual que ocurre con la que ocupa) protagonizada por el archiconocido Olaf (el entrañable muñeco de nieve de la cinta original, para los todavía desconocedores del elenco de aquella) que complementa a la perfección al metraje para extender el disfrute a algo más de dos horas (contabilizándose las promociones de la compañía y los avances de los próximos estrenos propios del inicio de cualquier sesión que se precie se prolongará más o menos) un viaje tremendamente cultural (son concretamente las costumbres mejicanas las que se plasman con exquisita reverencia).

Lo peor: el colorido mundo de los fallecidos (aquellos que no han experimentado la denominada “muerte final” si se olvidan por completo, ya que en tal caso se desvanecen por siempre jamás) anexo al de los vivos a través de un puente en el cementerio (lugar por excelencia de cuantas ofrendas se imaginen para unir a seres humanos, de carne y hueso o solamente lo segundo) se percibe, al menos en primera instancia, saturable de los sentidos, sobre todo en cuanto a los guías espirituales (animales de las más variopintas formas) se refiere; el sentimiento de pertenencia sirve como teórico fundamento pero no como universal aplicativo, pues existen incontables familias que no lo comparten y, en cualquier caso, la devoción debe obedecer a vibraciones y no a apellidos (a excepción de los americanos, quienes adoran de forma única y enfermiza a la patria que les ha visto nacer para castigarles sin cesar, cuanto menos política y terroristamente), no debiendo sentirse triste

por la pérdida de las personas sino pleno por haberlas conocido; el idioma seleccionado para las proyecciones de América latina (los actores que prestan su voz son los adjuntados en la ficha técnica) puede no conquistar a los oídos de muchos pese a ser el más propicio para visionar el filme a juzgar por la intrahistoria relatada, acentuándose la emotividad desde el propio título, el cual hace mención a la más longeva integrante del clan y no al más joven como pudiera parecer en un principio, un detalle de tantos que fundamenta que la virtuosa pasión interna de este último esté destinada a aflorar antes o después por más impedimentos que traten de urdir quienes le rodean al sobreponerse, como cualquiera está invitado sino obligado a hacer, a cuantas adversidades halle a lo largo de su camino existencial.

Daniel Espinosa

www.cementeriodenoticias.es.tl

162.txt

"Los recuerdos mueven todo. Me mueven mis recuerdos."

Pixar lo vuelve a hacer y, aunque si quizás no estamos ante una obra maestra, estamos ante la que es sin lugar a dudas una cinta notable, la mejor película de animación del año en su conjunto (y con un merecido Oscar a la mejor película de animación... no siendo el único Oscar que ha logrado en su haber) y un film obligado a tener en la videoteca de cualquier cinéfilo.

"Coco" nos narra la aventura del pequeño Miguel (en la VOZ de Luis Ángel Gómez Jaramillo), un niño mexicano que tiene vocación musical y desea por todos los medios ser cantautor... pero tiene un pequeño inconveniente: su familia no se lo permite. Sin embargo durante un viaje mágico al "mundo de los muertos" Miguel no solo descubrirá como cumplir su sueño de ser músico, sino que descubrirá a su familia fallecida y sus secretos y pasado que le harán ver que no es oro todo lo que reluce, y que ni su familia es tan despreciable como él piensa ni sus sueños son tan hermosos.

El film se nos presenta como una cinta de aventuras fantásticas para todos los públicos... y sin embargo amplía sus virtudes mucho más allá del lance aventurero en ese "mundo de los muertos", y

nos ofrece pinceladas muy bien dibujadas de humor ingenioso, de reflexión amorosa e íntima y de alegoría a la cultura latina y su estilo de vida.

Nos encontramos ante un argumento que ya hemos visto ("¡Qué bello es vivir!" (1946) es sin duda la cinta de la que "Coco" bebe más en su paralelismo)... y sin embargo logra mejorar a todas ellas consiguiendo explotar con agudeza, juicio y perspicacia sus puntos de originalidad individual.

"Coco" presume de un guión redondo, completo y bien cerrado, la lucha de Miguel por ser músico choca con la aversión que tiene su familia a todo lo que sea música; y esto se nos narra con mucha socarronería, jugando el film con las elipsis humorísticas de contrastes. La cinta narra además esta lucha con un ritmo impecable que hace que el film no resulte aburrido en ningún segundo de su primer tercio. Pero esa lucha por ser músico tanto en el mundo de los vivos como en el de los muertos es tan solo un McGuffin empleado con maestría para narrarnos la verdadera temática de la cinta, que es ni más ni menos que el descubrimiento de Miguel de la vida pasada de su familia y la comprensión y evolución que experimenta como persona gracias a esto. Y así, el guión ofrece un giro que sorprende y enriquece a la cinta no solo en su primer visionado, sino en cada revisión que se haga de él (es de esos films que en un segundo visionado se ve con otra perspectiva, y no solo la cinta lo agradece sino que se engrandece más al apreciar detalles en sus minutos que cobran todo su sentido al saber el desenlace).

Así pues estamos ante un libreto desenvuelto en su conjunto (el único "pero" de "Coco" es el tema Disney de alguna que otra peleíta y persecución entre mascotas o entre personajes de la cinta, que resultan redundantes y son una tara en el último tercio del film. Y a veces la descripción de los bellos escenarios en el "mundo de los muertos" con paneos resta agilidad a la narración de la trama. Pero son defectos muy leves (por fortuna Disney va aprendiendo y cada vez nos castiga menos con el humor físico más infantiloides de persecuciones, caídas, tropezones y demás, porque en "Coco" se cuentan con los dedos y no molestan en exceso)), con una trama muy bien armada y desarrollada, que cuida al máximo y con mimo, profundidad y naturalidad sus detalles ya sean dramáticos, musicales, de fantasía, cómicos o de intriga y suspense. Y podría dar muchos ejemplos de esos detalles pero me faltarían caracteres (resaltaré por supuesto la actitud que imprime el film a los

personajes de mamá Coco (esa anciana de Alzheimer que va mucho más allá del tópico y se nos retrata con los matices más humanos y reales) y de Héctor: un joven de talento y honrado pero desenfadado y descarado en su actitud ante la vida (porque sí; "Coco" tiene mucho humor (quizás no un humor de carcajada, pero si de sonrisa cómplice casi continuada) porque la vida tiene humor).

La puesta en escena a su vez está a la altura del guión: la fotografía es asombrosa (en especial en los planos generales), la inmensa mezcla de colores llamativos y sus contrastes de lilas y azules con naranjas y rojos es todo un éxito... junto con el juego que dan las velas en el film, que se recrea en la bellísima conjugación de luces intensas y sombras mágicas en cada detalle de los fotogramas. La realización es sobresaliente y nos da de todo y todo nos lo da bien: plano/contraplano, planos detalle, subjetivos, picados, contrapicados, focos alternos y... paneos, sobretodo muchos paneos que hacen que veamos el film como Miguel, un niño en continuo movimiento. Porque la cinta cuenta además con una edición dinámica que camufla los escasísimos puntos muertos que pueda tener la cinta.

El diseño de personajes por su parte es incommensurable (y no solo mama Coco que es por derecho propio el personaje secundario de 2017, los gestos faciales de ternura de Miguel son una maravilla) y la banda sonora de Michael Giacchino de Oscar es... eso, de Oscar (y no solo el tema "Recuérdame", también ""Un poco loco", "El mundo es mi familia", "El latido de mi corazón" (temas inolvidables que se quedan en la memoria para siempre) y las notas musicales que acompañan la narración con precisión en cada momento).

En definitiva, Pixar vuelve a conseguir una cinta distinguida y destacada dentro de su año cinematográfico como casi siempre. Recomendable para toda la familia... pero los adultos la podemos disfrutar más, pues el logradísimo mensaje y reflexión de su fábula sobre la pérdida de nuestros seres más queridos y la vida que cobran sus recuerdos en nosotros y en los demás, y el afecto y amor que compartimos se transmite con sutiles y subyacentes toques de lo más expertos, avezados y entendidos. Para ver al menos una vez en la vida (y los cinéfilos para verla varias veces).

Lo mejor: Los minutos finales, en concreto...

163.txt

"No llores, no llores, no llores"

Lo que más me ha gustado de Coco es su colorido, el trabajo estético de toda la película es una maravilla, las texturas, las preciosas y realistas expresiones de sus personajes, en especial de Miguel y mamá Coco. Es una película recomendable para cualquier público que simpatice mínimamente con la animación.

164.txt

La mejor de Pixar.

Emocionante aventura sobre la base de la tradición mejicana del Día de los muertos. Parece mentira que sobre el tema se pueda hacer una película sobre un niño y para niños, pero los de la factoría lo han conseguido.

No busca la lágrima fácil en absoluto, y su protagonista tiene un coraje inmenso a pesar de lo que descubre tras el puente de pétalos.

Gozosa y pasa en un santiamén, mostrando todo un mundo de tracción muy bello y con un mensaje completamente esperanzador: nuestros antepasados siguen entre nosotros para bien mientras los recordemos.

Para todos los públicos, tiene instantes que realmente te ponen al borde de la lágrima y una música preciosa.

Nota: 8,45.

165.txt

Lindo homenaje a México

Disney junto a Pixar, han hecho un trabajo fascinante con esta película; colores, efectos, trama, personajes... todo es precioso y, lo más importante, bien elaborado y con respeto.

Nunca pensé que sería tan bonita porque pensaba que sería una película para molestar a Trump, porque salió cuando el presidente más se quejaba sobre el pueblo mexicano, pero nada de eso, la película no merece, ni siquiera, estar en la misma frase que el energúmeno que acabo de nombrar.

Los personajes son todos entrañables, aunque no entiendo como mantienen el odio a la música tras tantas generaciones y por este detalle no le pongo más nota.

También la trama es perfecta en todo y algo que me ha sorprendido para bien, es que no es la típica película americana llena de estereotipos mexicanos, lo que significa que han hecho un trabajo minucioso con una trama llena de fantasía pero con mucha coherencia y sentido.

Los colores, efectos y todo lo visual está súper trabajado y detallado, y me ha encantado como han diseñado de una forma divertida a los esqueletos.

Lógicamente, al no haber crecido con esta tradición cuesta más entender ciertos detalles, pero aun así es un gran film y de recomendable visualización para pequeños y no tan pequeños, que seguro van a disfrutar de igual manera esta aventura.

166.txt

Una de las mejores películas de animación 3D

Tengo que admitir que no soy fan ni de las películas de animación, ni de los musicales. La mayoría se me hacen tediosos, pero este no. En absoluto. Tiene algo que enamora, la comedia, el drama, todo, y nada sobra (algo muy difícil de encontrar, no sería la primera vez en que un drama se pasa de dramático o una comedia, de graciosa).

Si eres de lágrima fácil asegúrate de tener unos pañuelos contigo, que los necesitarás.

167.txt

Esta es Pixar

Tras 2 secuelas nostalgias llega Coco (2017), que en mi opinión es, junto con Del revés (2015), la dirección que tienen que tomar los futuros proyectos del estudio tras Toy Story 4.

Desde el principio ya transmite el aire que tenía en el ya lejano 2007, cuando Ratatouille se estrenaba. Lo que hacía a sus producciones desde el 95 hasta el 2010 tan memorables era el guión : desde Toy Story, pasando por Bichos, Monstruos S.A, Nemo, Los Increíbles (quienes POR FIN tienen una secuela en los cines), Cars, Ratatouille, Wall-e, Up y llegando a Toy Story 3, todas tenían una historia contundente, con personajes carismáticos y una idea tan bien implementada que te dejaban con ganas de más. *ESA ERA PIXAR*

Pero... llegó 2011... y con ella Cars 2 (la que empezó todo este declive) : para mi gusto, Cars era de esas películas que NO tenían que tener secuela, como Monstruos S.A o Buscando a Nemo (ambas salieron mejor paradas). Luego llegaron Brave, Monstruos University, Del Revés, Buscando a Dory y Cars 3... desde el 2015 se ha notado el empeño que está poniendo Pixar en no cometer el mismo error que en 2011, y ahora estamos aquí.

Con Los Increíbles 2 a la vuelta de la esquina en España (1 mes y medio después gracias a una competición en la que hemos salido tan rapido como entramos), me dispuse a ver Coco hoy.

Lo diré sin pelos en la lengua :me parece un tanto sobrevalorada. Con esto no estoy diciendo que sea mala en lo absoluto ni mucho menos, pero en mi humilde opinión, viendo esta película he tenido "el efecto Black Panther" : que todos los medios y la gente digan que es de las mejores películas de su género, vas con la idea de encontrarte algo como El viaje de Chihiro, y para mi esto no ha sido así.

¿La película es buena? Si, claro

¿La mejor del estudio? No, creo que aun falta un poco para eso.

Coco, sin embargo es de esas películas que si la encuentras en TV la verás hasta el final sin importar lo que estuvieras haciendo.

168.txt

Viven en nuestros corazones

La vida, la muerte, el olvido. A pesar del tono cómico y ligero, las implicaciones de la última película de la factoría Pixar son bastante profundas, tal y como nos tiene acostumbrados. En esta ocasión, se basa en el folclore mexicano para realizar una alegoría sobre la muerte, la música y los recuerdos familiares.

La música es el motor de la trama, la música como materia abstracta que perdura a través del tiempo, una voluntad que marcha por los siglos, manteniendo vivo el recuerdo de aquellos que han perecido. Paz para toda mi gente en el cielo, sé que ellos me protegen y cuidan mis pasos.

169.txt

LA MÚSICA EN LOS HUESOS

Pixar, ahora Pixar/Disney, sigue después de 22 años acudiendo puntual a recoger cada dos años la estatuilla de los Oscar. Méritos no le faltan aunque uno tiene la sensación de que hay una cierta inercia en los académicos ante un modelo de animación que funciona y por supuesto la inmensa presión que supone tener al gigante Disney detrás. En cualquier caso "Coco" es un notable trabajo muy elaborado siguiendo unos esquemas que no por previsibles siguen enganchándonos. Obviamente no es todo Pixar lo que reluce y también periódicamente la animación europea y japonesa nos va dejando joyas con menos poder mediático y otros estilos alternativos que hacen de este género un arte más personal.

"Coco" forma parte de una trilogía genial sobre el tradicional "Día de los Muertos" mexicano patrimonio inmaterial de la humanidad que coincide el 1 y 2 de Noviembre con el día de difuntos o de "Todos los Santos" católico. Esta trilogía estaría formada por el magnífico videojuego "Green Fandango" (Lucasart/1998) y la no menos excelente "El libro de la vida" (Jorge R. Gutierrez / 2015). Esta última, injustamente infravalorada, a un servidor le dejó mejor sabor de boca que esta

"Coco" cuyos ingredientes se me han hecho más previsibles, más de formula, menos creativos, si es que esto puede decirse de Pixar.

Tanto en "Green Fandango" como en "Coco" las tradiciones mexicanas son llevadas al terreno del show del vecino del norte. En la primera a los clásicos del cine negro y en la que nos ocupa al music hall con aires retro de aromas hollywoodienses. La técnica sigue siendo impecable en servicio de una historia cuyos ingredientes de humor, drama, aventura, acción y emotividad parecen estar calibrados al milímetro. Los valores y mensajes son dignos de compartir universalmente sin que falte la lagrimita correspondiente que ponga la guinda a este colorido pastel así como los inevitables personajes "merchandaising". Pixar como la coca cola es celosa de su formula que todos conocemos pero que es muy difícil de imitar.

cineziere.wordpress.com

170.txt

Me dejo buen sabor de boca, pero no es perfecta

Vi esta película el domingo de la primer semana de estreno. Lo bueno fue que ya tenía comprados mis boletos desde hace tres días porque ya asumía que iba haber una enorme fila en la taquilla y así lo fue. Aparte asumía que no iba a tener la tranquilidad porque es una cinta infantil. En fin mi asiento lo escogí donde siempre: hasta el fondo al centro, el mejor lugar para apreciar la pantalla. En fin cuando empezó la función, tuve que soportar un estresante corto de Frozen el cual fue lo que más odie de la película, aparte con 2/3 de sala llena, que afortunadamente nadie se sentó cerca de mí. En fin el 90% de los 2/3 que cubrían la sala iban con niños de 7 a años a menos. En fin lo ignoré, igual ni me molestaban porque estaban a tres filas de distancia de mí, lo cual podía decir que yo estaba en un lugar tranquilo y cómodo en la sala.

Ahora sí voy con la película:

Analicé toda la película de principio a fin, la verdad es muy bonita, tiene una animación impecable, pero no es la mejor película de Disney Pixar, aún se queda corta con Toy Story. Otra cosa la historia no es original, ya está muy utilizada en otras películas, solo que en esta la relacionan con la cultura

de mi país México. Al menos eso de que hicieran referencia en mi país me encantó, pero sentí una sensación igual que con la película Avatar de James Cameron. Muy bonito arte visual, pero una historia poco original, contada de otra forma. Lo admitiré esta película es muy parecida al; Libro de la Vida o a Vida de Pi.

Admiro el trabajo de Disney Pixar pero es el mismo síndrome de avatar, es una historia muy trillada contada de otra forma. Aún así me entran ganas de volverla a ver, porque a pesar de todo es una bonita película con un buen mensaje.

171.txt

Divertida y emocionante

Una gran película de animación muy bien lograda y conseguida.

El ritmo de la película es acelerado, esto sumado a las numerosas escenas graciosas que suceden una tras otra, nos lleva a una película que te hará sonreír y soltar algunas carcajadas a lo largo de toda la película.

Hay que mencionar que todos los personajes tienen una personalidad bien definida y aportan algo a la historia, además la historia te enseña buenos valores mientras te lo pasas bien y culmina con un interesante giro argumental.

Conclusión: Recomendadísima película de animación de principio a fin.

172.txt

Nos cuenta como nunca el día de muertos de México

Pixar no es por nada una de los mejores estudios de animación ya que esta detrás de títulos como Toy Story, Walle o Up.

Ahora nos trae Coco que nos cuenta como nunca el día de muertos de México.

Es una película fácil en el sentido de que los temas de la película se dicen claramente en diálogos, lo que a priori sería malo, pero al estar pensando para niños se entiende y se tolera. Además los adultos podrán encontrar tantísimo en segundo plano con temas muy trascendentales.

Pero si de algo hay que hablar es CARISMA y coco la desprende con su animación y sus personajes tan familiares y próximos.

Es de mencionar la importancia que tiene la forma de tratar la vida y la muerte a través del día de muertos dándonos el punto de vista mas inesperado, el de los muertos. Esto es lo más importante de la película, y lo que la eleva de entre otras muchas.

173.txt

Muy buena, pero un pelín transposa

La película nos narra la historia de Coco, un chaval obsesionado con la música al que su familia (especialmente su abuela) le quiere quitar de la cabeza tan peregrina idea. Pero él no cesa en su empeño, hasta el punto que acabará dando con sus huesos en la Tierra de los Muertos, donde vivirá una curiosa aventura para intentar regresar.

Técnicamente impecable, se nota que Pixar es la compañía puntera en lo que a animación se refiere y nos regala otra obra maestra en lo que a lo visual se refiere. De verdad que siguen sorprendiendo con cada producto que hacen.

La banda sonora tampoco se queda atrás, con una serie de temas bastante buenos que ambientan y te hacen meterte más aun en esa historia con la música siempre presente.

Y ya lo último que funciona como un tiro es el elemento emocional, un tramo final que te hace derramar una lagrimita lo quieras o no es el broche perfecto para la película.

Aunque también tengo que decir que se me hizo un poco pesada en el tramo central, me parecía que la película perdía fuerza y no conseguía llegar a las cotas de calidad que se esperaba de ella (igual

iba con demasiado hype). Por si fuera poco el tramo final (que me gusta) me parece un tanto tramposo, se ve venir de lejos y juega con la emoción más fácil.

Así que sí, la película me ha gustado, pero no tanto como esperaba. Soy un fan de las películas de animación, me gustan casi todas y acaban por descansar en mis estanterías en cuanto tengo ocasión de hacerme con ellas, y ésta venía con unas críticas tan buenas... que se me ha quedado corta.

Puede que lo que más me escame es que la que es para mí la mejor película de animación de su año (2017) no es ésta, sino Your Name, y me dolió mucho que ésta último no estuviera ni tan sólo nominada en los Oscar, algo que me dio rabia que puede que haya acabado cayendo sobre Coco.

Pero repito: es una muy buena película de animación, aunque no la obra maestra que me habían vendido.

174.txt

Una historia para recordar

Entre las nuevas películas de animación se abre paso la maravilla de Coco, una tierna historia que nos traslada a un mundo de ultratumba embadurnado de personajes inquietos y guiados por la música. Cada paso en el relato es una nota musical llena de emoción y dulces sentimientos que pocas películas pueden interpretar. Coco se aleja de la mediocridad y se lanza al escenario con una guitarra afinada con magia mexicana. Aunque la película cae en algunos abismos del oficio, deja un punto final que hará brotar lágrimas incluso de las cuencas más secas. En mi opinión, es una historia para recordar, recomendable para peques y para no tan peques.

175.txt

Coco por Cine de Patio

Haciendo memoria, Pixar no tiene, por ahora, ninguna película mala, y este caso no es una excepción aunque podría haberse situado en el Olimpo de la animación de haber tenido un mensaje final más

actualizado. De todos modos las emociones y la emotividad están presentes en todo momento, dentro de una trama adulta llena de sorpresas con un desarrollo sencillo y que visualmente recuerda al mítico videojuego Grim Fandango.

La historia, que gira alrededor de la vida y la muerte, tiene un poco de "Monstruos S.A.", de "Regreso al futuro" e incluso de "Star Wars", pero aún así goza de identidad propia divirtiéndola a raudales, sobre todo gracias al carácter de unos personajes cuyas personalidades encajan entre sí como anillo al dedo mientras descubrimos los entresijos de una preciosa y arraigada tradición mexicana.

Más mini críticas en cinedepatio.com

176.txt

Coco. Pixar homenajea a México

No conozco México en profundidad como para saber si lo que nos muestra Coco es fiel a las costumbres y tradiciones mexicanas, o tiene más de la típica sucesión de tópicos mal aglutinados con la que Hollywood suele despacharse cuando toca otras culturas. Pero en general a mí la película me ha gustado. Podemos decir que es sobretodo colorida. Tiene una gran dosis de esoterismo y surrealismo, que yo he preferido entenderlo como surrealismo y como tal me ha gustado.

No obstante a la historia le falta algo de chispa. Es poco Pixar, poco de mostrarnos cosas nuevas. Muchas circunstancias son muy típicas y tópicas. No tiene esa vuelta de tuerca, ese paso más allá que en algunos títulos nos ofrece.

A los niños al final les ha gustado y han salido muy contentos del cine, pero por momentos les ha aburrido un poco, o incluso incomodado. En un momento se llegó incluso a producir la fatídica pregunta de "Papá ¿Le falta mucho para terminar?". Aunque como digo, después retomó su interior y gusto, y la han acabado apreciando bien.

He reconocido distintos guiños y cameos a personajes mexicanos, de la cultura y del universo Pixar, pero como siempre, seguro que se me han escapado más de los que he sabido reconocer.

Por cierto me parece un acierto lo que he leído de que Disney ha estrenado la película en México un mes antes que en el resto del mundo, justo además para hacer antes del 1 de noviembre.

Lo que me parece mal es maridarla con uno de los cortos más flojos y más extensos desde hace tiempo de Disney (Frozen: una aventura de Olaf).

177.txt

Exquisitos Cadáveres

La impresionante y cada vez más esplendorosa perfección técnica a que nos tiene acostumbrados Pixar es un deleite visual y un inagotable e imprevisible caudal de hallazgos admirables. Cada plano es un festín y cada personaje una gozada de caracterización y delicadeza. Y, además, sus historias suelen estar repletas de buenas ideas convertidas en felices y amenísimas experiencias cinematográficas para espectadores de cualquier edad, gusto y condición. Con la presente propuesta, tan étnica como arrolladora, vuelve a dar en la diana, aunque a mí no me haya convencido del todo, quizás porque hace un uso abusivo e indiscriminado de los tópicos más enloquecidos y trillados que los gringos tienen de sus desaforados vecinos del sur. El guión, aunque vibrante y delicioso, resulta superficial y carente de genuino gracejo, más orientado a sorprender, apabullar y complacer, que a contarnos una historia original, perdiéndose en anécdotas innecesarias, cayendo en digresiones redundantes, ofreciendo un folklorismo de opereta que acaba cansando, como si renunciara a tomarse en serio el relato y se contentara con entretener a cualquier precio.

Mis reservas y objeciones no invalidan la obra, pero acaban por achicarla: lo que pudo haber sido un descubrimiento luminoso y enardecido de una cultura diferente, desconocida para muchos, sepultada bajo toneladas de prejuicios y desinterés, acaba siendo un recopilatorio tosco de todo lo chocante y marginado que se pretendía alumbrar, más cercano a la suspicacia confirmada o a la censura subrepticia, que al redescubrimiento radiante y venturoso de lo que se pretendía acercar. Aunque la brillantez formal es innegable, la endeblez argumental es demasiado vergonzosa como para poder ignorarla u obviarla. El guión ha sido descuidado y se conforma con expoliar algunas imágenes, simulando un conocimiento del tema tratado que revela desinterés y tibieza hacia aquello que, en apariencia, pretendía homenajear. Y esta espiral cansina de paradojas resulta molesta.

No cabe duda que hay también aciertos y es de justicia resaltar algunos hitos memorables: el prólogo que combina velocidad narrativa con destreza psicológica, la importancia que se le confiera al linaje de cada cual, ya que somos el eco nada fortuito de nuestros antepasados, tanto remotos como cercanos, a quienes debemos nuestra vida, que nos influyen tanto en nuestras querencias como aversiones, que nos acogen en momentos de flaqueza, que nos encaminan lo mejor que saben hacia la madurez, que se equivocan y tropiezan sin maldad ni rencor... Lo abracemos o lo rechacemos, nos debemos a nuestras familias (entendidas de la forma más amplia, abierta y rica que se quiera) y no al azar. Estos sencillos mensajes – no por conocidos menos evidentes – son lo mejor del metraje.

178.txt

La muerte y el recuerdo

Aquellos que creíamos que, con la compra de Disney, Pixar iba a volver a propuestas más infantiles, estábamos muy equivocados. Bastó ‘Del Revés’ (una de las mejores, si no la mejor, película del 2015) para devolvernos a la realidad. ‘Coco’ no se desvía del camino seguido por su predecesora, tocando un tema muy adulto y que jugar con él siempre ha dado miedo: el de la muerte.

Si bien es cierto que la distancia cultural (poco se sabe sobre el día de los muertos) me ha impedido disfrutar completamente el film, valoro de forma entusiasta esta historia sobre la familia y la importancia de los recuerdos. Sinceramente, creo que la cultura mexicana se sentirá muy honrada (estrenada incluso con doblaje latino).

Otra vez estos expertos en la animación nos dejan asombrados soltando pequeños detalles que terminan unidos en un intenso y emotivo final que encumbra a la cinta como otra de esas grandes producciones de Pixar. Una fiesta en donde las luces, colores y canciones juegan un papel primordial. Aún así, la encuentro algún poco, como más de un desdibujado personaje secundario que me hubiera gustado conocer más.

‘Coco’ nos da una moraleja clara y concisa, acompañada de musicalidad y entretenimiento. Otra apuesta segura de Pixar que encandilará al gran público.

Más en: <https://alquimistacinefilo.wordpress.com/>

179.txt

Fórmula perfecta

Más aciertos que fallos son los que tiene esta compañía de crear sueños, esta última vuelve a repetir su fórmula con forma y fondo muy parecido a otras ya vistas de hace poco tiempo, pero no deja de tener su encanto, esa magia que Coco sea un clásico casi de forma inmediata, un homenaje a la cultura mexicana, unos temas musicales muy buenos y aunque no deja de ser un melodrama con final feliz ya visto, no por eso deja de ser maravillosa.

180.txt

No deja de ser una especie de contestación a la política racista del presidente Trump

Una peli de dibujos animados cuesta muchos años ponerla en pie.

Cuando se gestó Coco nadie podía imaginar que Trump llegara a la Casa Blanca.

El estreno de una peli con protagonistas mejicanos no deja de ser una especie de contestación a la política racista del presidente.

Coco habla de las costumbres mexicanas y de la fuerza del recuerdo como manera que nuestros ancestros queridos perduren.

También ensalza el valor de la familia, el respeto a los mayores y el poder de las abuelas.

Divertida y tierna, consiguió emocionarme en su tramo final.

Está bien, pero no llega al nivel creativo de otras obras maestras de la factoría Pixar.

Desde luego mucho mejor que la terrible saga de Cars.

Mi puntuación: 7,01/10.

181.txt

Colorido lacrimógeno inolvidable

Lee Unkrich, que dirigió Toy Story 3, entre otras, nos trae junto a Adrián Molina un filme que destaca por su gran colorido y una riqueza visual preciosista y llena de elementos que llenan la pantalla. Coco no es el protagonista, es la tatarabuela de Miguel, hija de un músico que abandonó a su familia por la música, por lo que su madre, Imelda, decidió que a partir de entonces la música

para ellos estaba prohibida. Eso fue así hasta que a Miguel le dio por coger una guitarra y descubrir que esta hecho para ello. Así pues, y a pesar de tener a toda su familia en contra, Miguel, en el Día de Muertos, donde se conmemora a los que han pasado al otro lado, decidirá apuntarse a un concurso de talentos.

Sin embargo, tras un accidente será capaz de traspasar el mundo real y conocer en el Mundo de los Muertos, a su familia. Todos zapateros, todos en contra de la música. Allí el espectador alucinará con la paleta de colores que deslumbrará y hará las delicias de los más pequeños. Descubriremos personajes de la cultura mexicana como Frida Kahlo y aprenderemos de sus ofrendas por el Día de Muertos. El paso de la vida a la muerte y, una vez más, sobre la importancia de la memoria y de los seres queridos en un final de película que hará que más de uno suelte unas lágrimas. Pixar vuelve a traernos una película que no solo arrasará en Oscar, Globos de Oro y demás, sino que encantará a los más pequeños y conmoverá a los mayores.

COCO es una película detallista en sus texturas y fastuosa con los elementos que aparecen en pantalla. Todo muy mexicano, como no podía ser de otra manera, con Mariachis y voces latinas, canciones y personajes que tratan con humor el paso de la vida a la muerte, siempre con optimismo a pesar de que el guion, sin duda una de las partes más acertadas del filme, se torna más serio conforme avanza la película. Una enseñanza más que los amigos de Pixar nos ofrece sobre la familia y la memoria y el respeto al prójimo.

En definitiva COCO es la mejor película de animación que vais a ver este año. Es profunda, rica, carismática, emocionante y emocional, didáctica y divertida, con una animación y texturas sublimes y buen sentido del humor. Ganará el Oscar, sin duda, pero también el corazón de pequeños y mayores. El que todavía piense que la animación es para los más pequeños descubrirá que no es así, y el que acuda a verla comprobará que Pixar sigue en forma. Ni se os ocurra perdérsola.

182.txt

Escapar de la muerte para vivir mejor

No es la primera vez que Pixar flirtea con causas poco comunes en el cine familiar. Ha podido hablar a niños y mayores de temás como la vejez y la melancolía (UP), o las complejidades de la psique (Inside out) sin que ninguno se sienta timado o al margen. En Coco se adentra en la muerte, ni más ni menos, cuestión cada vez más ajena a la infancia a causa de una protección algo irreal de un tema tabú. Da el quite con la habitual inteligencia, pero también atendiendo a la mano levantada del amo: Disney. Así tenemos otro retrato de tensión entre las bondades de aquella Pixar que fue, y el fantasma de lo que es. Y posiblemente lo último que veamos de Lasseter tras la salida del creativo bajo sospechas de abusos sexuales. El universo mexicano tradicional es delicado y un gran homenaje un una cultura presente en USA pero muy subalterna al discurso de mitos y tradiciones hegemónico en el gigante norteamericano. Coco es una película amaestrada, de las que menos retroreferencias para mayores que yo recuerde, pero con la suficiente alma como para seguir siendo carismática, divertida, espiritual, y aún capaz de ofrecer un desenlace que garantiza un sofocón si tienes sangre en las venas.

183.txt

Este muerto esta muy vivo

He visto esta pelicula con mi hija y dos sobrinos y como suele ser habitual en las pelis de Pixar, a mi me ha gustado incluso mas que a ellos. Lo mas reseñable a mi modo de ver , es la manera tan sencilla de acercar a los pequeños un tema tan complicado como la muerte, asi como inculcarles valores familiares y todo ello pasando un buen rato con una historia de aventuras , que si bien es original en su planteamiento, no lo es tanto en su desarrollo, que repite la formula habitual en este tipo de peliculas.Los personajes estan bien desarrollados y resulta facil empatizar con ellos, resulta entretenida en la mayoria de su metraje, flojeando algo en su parte intermedia pero relanzandose , como suele ser habitual en su desenlace .Quiza hecho en falta esos toques de humor mas"adulto" de otras pelis de Pixar , se abusa demasiado del gag visual y tal vez los momentos mas emotivos puedan resultar un pelin forzados , aun asi , si eres de lagrima facil te recomiendo llevar klinex. En resumen , una notable pelicula de animacion que , si bien no llega al nivel de otras obras de Pixar, como Toy Story 1 y 3, Wall-e ,up o del reves se situa muy cerca de ellas y resulta muy recomendable

184.txt

Una rica visión mejicana del mundo de los muertos

De alguna manera se relaciona con "Inside Out", ya que aborda temas complejos, en este caso la muerte y el recuerdo, pareciendo más una película de adultos que un filme infantil. Hace un extenso muestrario de la cultura popular mejicana, y lo que más se le puede criticar es el exceso de lágrima fácil, así como la repetición de las fórmulas de éxito típicas de la animación.

El apartado técnico es formidable, y el guión bastante maduro, aunque predecible en algunos momentos. El protagonista es un niño que sueña con ser músico, pero cuya familia le prohíbe totalmente el contacto con cualquier instrumento o persona del mundillo. Ese niño acabará accediendo al mundo de los muertos, que cada año intentan volver por un día al de los vivos, para ver a sus familiares.

185.txt

Buena película

Me pareció buena película, regularmente me aburren las películas de niños pero para mi sorpresa, esta no me aburrió, a pesar de las críticas que ha recibido por parte de mucha gente diciendo que les da un mal ejemplo a los niños, creo que esta muy bien echa muy colorida y divertida.

186.txt

Cuando la familia es lo primero...

El tapiz aterciopelado con un amplio abanico de colores hace que divierta, y además enganche una trama con sensibilidad, pero cayendo muchas veces en tópicos, haciendo que chirríe el resultado final en ciertas etapas de la acción. La fórmula es clara, concisa y llena de matices, con unos personajes llenos de aristas que ganan al espectador. No falta ningún elemento de la fórmula del éxito. La música llena la pantalla, su ornamentación es alegre y festiva y ahonda en la sensibilización del espectador, pero a veces pasándose de ejemplificación, no todo es tan dramático ni todo es tan racial.

187.txt

Final feliz es lo que se escucha decir aquí 🎵

Tiene la magia de fascinar a propios y a extraños, a fanáticos de las producciones de Pixar y Walt Disney y también a los cinéfilos, como yo, reacios a estos. Es imposible no encariñarse con el protagonista, un niño proveniente de una familia pobre y hasta miserable, y seguir su camino al logro de sus sueños y la búsqueda de la verdad.

Me importa un carajo que muchos mexicanos se hayan sentido aludidos porque consideran que no es una verdadera representación de su cultura, especialmente con respecto al día de los muertos, ¿pero a quien le importa? ¿Por qué tomarse en serio una película animada orientada principalmente a niños? ¿Acaso en la vida real, los niños vivos pueden irse al mundo de los muertos y conocer a sus antepasados? ¡Váyanse a la mierda y disfruten!

Por cierto, el final es una delicia, debo confesar que aunque no logró robarme unas lágrimas como lo hizo Hachi: A Dog's Tale o The Passion of the Christ, logró conmoverme y eso es mucho pedir. La banda sonora es impecable.

188.txt

Confía en la familia

Al principio cuando vi esta película en la cartelera no me llamó demasiado la atención. Tampoco lo hizo su trailer.

No obstante debido al hype que levanto la película y a la buena crítica que recibió por parte de la prensa, decidí darla una oportunidad. Oportunidad que mereció la pena pues la animación es muy buena. Cómo están hechos los personajes, los detalles que poseen y sobretodo, todo ese colorido que posee la película, que es lo que la dota de vida. Bueno, el colorido y la música por supuesto.

La música es el hilo conductor que nos guía durante toda la historia. De tal manera, que la música y la familia son los temas alrededor de los cuáles gira toda la película. Y eso queda claro desde el

comienzo. Aparte del miedo a ser olvidados, a que ya nadie nos recuerde cuando ya no estemos. Lo que al principio parece un camino que se bifurca en otros dos, al final puede que se vuelvan unir formando un único camino.

La capacidad para tratar el tema de la familia, tan importante como es allí en México, pero hacerlo desde la animación y aún así darle un carácter serio y edulcorarlo con toques de humor. Todo esto apto para niños, es sin duda un éxito. Y por si fuera poco, la música que suena acompaña a la película perfectamente. Llegando en tramos de la película incluso a conseguir emocionar un poco, con el tema musical Recuérdame como buque insignia.

Las escenas en las que la música entra en juego están muy bien elegidas y la historia es lo suficientemente emocionante y emotiva como para atraparte. La mejor parte de toda la película es la escena final, que aunque se ve venir, no por ello pierde intensidad.

Una película para, valga la redundancia, recordarnos la fuerza de la música, la importancia de la familia y que no olvidemos nunca a nuestros seres queridos.

189.txt

Tan entrañable como era de esperar

No recuerdo la última vez que Pixar no acertó con su propuesta. Con altos y bajos a lo largo de los años, la compañía siempre ha conseguido atrapar a los más pequeños con historias de superación y tesón que también interesan a los adultos que los acompañan. “Coco” llega en un momento interesante en el que Trump mantiene una tensa relación con México, y por esto tiene aún más mérito a pesar de que el proyecto ya venga de lejos.

Casualidad o no, la película es un homenaje a México en toda regla, con multitud de guiños a su cultura, folklore y costumbres, situando la narración en una de sus celebraciones más importantes. Pixar vuelve a poner mucha carne en el asador con esta historia que reúne muchos temas siempre presentes: la importancia de la familia y sus raíces, el trabajo en equipo, aceptar a cada uno como

es... y añadiendo al repertorio un tratamiento de ese proceso inevitable de la muerte muy adecuado y entendible para todos los públicos.

Es posible que "Coco" no sea la película más redonda de la factoría, sobre viendo que su predecesora es la imponente "Del Revés". Muchos de los elementos que construyen la historia ya han sido utilizados en películas anteriores, puede que incluso con mayor acierto, de manera que no hay nada excesivamente novedoso. Pero no hay nada que no pueda compensarse con unos personajes a los que se les coge cariño nada más verlos, y a un ritmo constante que mantiene el interés del espectador hasta el final. Un final, por cierto, muy entrañable y sensible que cierra sin fisuras todo el argumento.

La magia acompaña al protagonista por un camino marcado por la ilusión y la decepción, por el deseo de intentar un sueño, pero que se apoya en recursos antes vistos para levantarse y superarse. Ese es el lema de Pixar, que firma una notable película alejándose de secuelas futuras y proponiendo un diferente punto de vista sobre un tema que siempre es complicado.

190.txt

La muerte es un carnaval

En general las películas que poco a poco van inflándose con expectativas, nominaciones y premios cuesta conseguir que logren abarcar todo lo que se espera de ellas, en especial a la hora de nominaciones y premios, más siendo animación. Aún así, "Coco" (2017) es de esas que no desentona y merece su lugar entre los buenos productos de la alianza Disney + Pixar.

Con todo y el aviso de sensibilidad a flor de piel, riesgo de lágrimas y trasfondo Disney -con todo lo que ello conlleva-, "Coco" es una cinta animada que habla de familia, pero ojo, quizás no sea tan "familiar" como todos esperan, en el concepto de "todo espectador". El film de poco más de hora y media tiene sus momentos de oscuridad que pueden resultar algo fuertes para niños muy pequeños pero que a cambio, consiguen intrigar aún más a los mayorcitos.

Vaya el paréntesis porque este es un elemento que ya es un hecho consolidado: el cine de animación no solo es sinónimo de público infantil y si fuera el caso, ya no basta con entretener a los chicos, los padres y hermanos tienen que divertirse igualmente para que hablemos recién de "una buena película".

Volviendo a "Coco", tiene buen argumento pese a que "El día de los muertos" lo hemos visto en varias cintas incluso ya de animación. Sin embargo, esta consigue sus colores propios de forma destacada. Simplemente no puedes quedar ajeno a los temas que aborda, los vacíos, afectos y los momentos en que te ves a ti mismo más pequeño. Una empatía que vale oro, que se busca mucho y pocas veces se logra, incluso hasta las lágrimas.

Así es "Coco", con un abanico múltiple de emociones del cual echa mano; a ratos un mero cuento infantil, en otras una oscura intriga y por supuesto también con una calidad técnica y musical bien lograda. Que envidia no tener más arraigada esta concepción de la muerte, no como el marketeado Halloween, sino con gen más latino, de inclusión, familia y recuerdo festivo.

Hay un corto que salió en la previa disponible en Internet, se llama "Dante Lunch" para que compensen la falta de escenas post créditos.

Recomendación:

Buena. Una mezcla interesante de sensaciones y apelaciones a lo emotivo. No es una película infantil, aunque hable de familia.

=Cité de Buyinski= www.buyinski.wordpress.com

191.txt

Patrimonio Intangible de la Humanidad

Coco es una hermosa película, bien hecha, una historia divertida, reflexiva y un grado de emotividad que supera a sus predecesoras, Disney y Pixar manejan muy bien la fórmula para lograr revolver los sentimientos y emociones más profundos de los espectadores.

Ambientada en los años 90, la historia de Coco se desarrolla durante la fiesta del Día de Muertos en el pueblo mexicano de Santa Cecilia (Disney quiso patentar el nombre de Día de Muertos y usarlo como título de esta película, afortunadamente esta fiesta es Patrimonio Oral e Intangible de la Humanidad), cuenta la historia de Miguel, un niño que le encanta la música y tiene como ídolo a Ernesto de la Cruz, sin embargo la familia de Miguel odia la música, un día nuestro protagonista decide salir a buscar los caminos que lo llevarán a alcanzar su sueño, convertirse en un gran artista como su ídolo.

Sin duda, lo que más llama la atención es la cantidad de referencias que se introducen a lo largo de la película, más allá de la fiesta del Día de Muertos (que junto a las Posadas previas a la Navidad son las tradiciones más grandes y representativas de México), costumbres, elementos, idiosincrasia mexicana, personajes mexicanos, valores familiares y sobretodo la música también son protagonistas. No es la película más original de estas productoras, trabaja una historia simple, cumple con los clichés necesarios y nos regala una visión interesante de la perspectiva que se tiene de la muerte, la vida después de la muerte y la muerte después de la muerte, tiene giros interesantes, algo predecibles, pero los mismos están bien llevados y se notan bastante naturales dentro la historia, regalándonos un hermoso final lleno de emotividad.

“La familia es lo primero” es una frase que se repite a lo largo de la película, es un mensaje que se pretende transmitir al espectador mundial y refleja el enorme valor que el latinoamericano (no solo el mexicano) le da a la familia, la aceptación de la muerte, el perdón, la importancia de ser recordado y el hecho de que el éxito no se debe lograr pisoteando a quien se cruza en tu camino, son las principales reflexiones que nos deja Coco.

En conclusión, Coco es una película que te divierte, te emociona, te hace derramar una o más lágrimas y a gritos te pide que la recuerdes.

Recuérdame...

192.txt

Joselito

Muy buena película en lo técnico, historia entretenida con un obvio homenaje a la cultura mexicana, a mi me venia un nombre a la cabeza, Joselito...Joselito, si esa era la intención, sois muy buenos.

193.txt

Recuérdame.

74/18(25/03/18) Buena producción de la factoría Pixar (decimonoveno largometraje), un film al que le cuesta arrancar (lo hace al entrar en la Tierra de los Muertos), pero cuando lo hace es una explosión trepidante que aúna lo (espectacularmente) visual con una historia con calado, tanto para niños como para adultos. Dirigida por Lee Unkrich (“Toy Story 2” o “Buscando a Nemo”), junto a Adrian Molina (primera realización, antes guionista de cintas como “El viaje de Arlo” o “Ratatouille”), con guión de este último con Matthew Aldrich (“Cleaner”), adaptando una historia de este, Unkrich y Jason Katz (“ToyStory” o “Bichos”), versando (como es habitual en la casa del flexo) sobre la experiencia vital de ser adolescente (“Toy Story” y el vínculo cuasi-mágica con los juguetes, “Monsters” y las relaciones de estos con el miedo, “Up” sobre la brecha generacional, “Brave” sobre enfrentarnos [rebeldía]con nuestro destino preestablecido por otros, “Del revés” y los temores a los cambios drásticos), aquí se hace un análisis sobre nuestra relación con nuestra familia, sobre lo que se quiere de ellos, sobre la búsqueda de identidad personal, y sobre el arco vital en que indefectiblemente somos mortales, además de ser un sentido estudio sobre los recuerdos familiares, sobre como rememoramos y mantenemos en la memoria a nuestros seres queridos, creando con inteligencia el film un mundo paralelo donde la riqueza es ser recordado en el mundo de los vivos, con lo que sutilmente se nos advierte (cual Karma) que lo importante es lo que hagamos en vida para ser queridos y recordados, y en paralelo un emocionado tributo a nuestros mayores. Asimismo Pixar es especialista en edificar (como ya he mencionado) mundos alternos, desde el submundo de los juguetes, el de los insectos, el de los Monstruos, el de los coches, o el del subconsciente, en este caso recrea un universo extensión del nuestro en el sentido que en el momento en que “aquí” se muere alguien, en este se va a la Tierra de los Muertos, una especie de segunda existencia, y de este modo ofreciendo a los niños un enfoque didáctico sobre la muerte, como ya se dio en “Up”, o la disneyana “El Rey León”, tocándola con espíritu pedagógico, sin mostrarla como algo trágico, más

bien poniendo en valor lo que hacemos en vida, ensalzando que el Bien produce Bien, y el Mal ... (el Karma ya dicho).

Destaca sobre todo en su escaparate estético el alma étnica mexicana que imprimen durante todo el relato, ello con respeto y sin caer en la caricatura (ejemplo los mariachis), en lo que es un estupendo homenaje a la cultura tradicional y costumbrista del país centroamericano, ensalzando tanto las figuras místicas del país (La celebración del Día de los Muertos, con su folclórico esoterismo), como su legado cultural histórico (Frida Kahlo, Jorge Negrete, María Félix, Cantinflas, El Santo, la Lucha Libre mexicana con sus típicas máscaras, ...), además de estar claramente influido la película por los artistas autóctonos como el muralista Diego Rivera o el escritor Juan Rulfo (gustaba de mezclar realidad y fantasía, como en esta cinta), y todo esto enaltecido por unos ilustradores y fotografía exaltadora de cromatismos fulgurantes y epidérmicos. A esta inmersión la nación de Pancho Villa (por cierto, me falta este revolucionario, más recordado que él en México pocos), ayudan las voces originales actores latinos como Gael García Bernal, Alfonso Arau, Edward James Olmos, Selene Luna, Cheech Marin o Luis Valdez.

Una historia incisiva sobre la importancia de la familia, sobre los hilos invisibles que nos unen, sobre la importancia de los recuerdos para mantener viva la llama aun después de que alguien se haya marchado, si lo recuerdas no ha muerto del todo. En su deber que a los personajes les falta profundidad y alejarse del cliché.

Pixar deja constancia de su buen quehacer en los bellos prólogos (homérico el de "Up"), en este caso rindiendo tributo a la mencionada cultura mexicana, delineando la historia familiar de los Rivera a través de una serie de laminas de papel picado (tapetes mexicanos), ello en alineados carteles colocados sobre hilos en las calles, típicos de celebraciones y fiestas del país, ello con reminiscencias a animado con influencias del ilustrador galo Michel Ocelot o al film germano "Las aventuras del príncipe Achmed" (1926) de Lotte Reiniger.

La cinta despegua cuando se produce el salto (confusamente definido) a la Tierra de los Muertos, el ritmo se acelera, la aventura se siente vibrante en especie de contrarreloj. Comenzamos en el lírico puente de entrada con un piso rebosante de pétalos de miles de esos pétalos de caléndula brillantes

y relucientes, y llegamos a la grandiosa megalópolis (Necrópolis), sinuosa y laberíntica, un big bang onírico de cromatismo (gracias a la fotografía de Danielle Feinberg, “Wall•E” o “Los Increíbles) e imaginación puesta al servicio de dar ilusión al espectador (con una cámara vibrante de Matt Aspbury, “Shrek 2” o “Spirit”) en su periferia templos mayas, y conforme nos adentramos, la “modernidad” de edificios, unidos por teleféricos, poblada de esqueletos maravillosamente definidos a través de sus coloridas calaveras, pelucas, vestimenta y ojos, figuras huesudas que protagonizan en sus movimientos jocosos momentos de humor (sobre todo en persecuciones surrealistas)... (sigue en spoiler)

194.txt

En la clase media de Pixar

Buena peli de animación que para mi está en un punto intermedio dentro de las pelis de Pixar, no está en el top 10 de Pixar porque es una peli que está un escalón por debajo de cosas como Monstruos SA, la saga Toy Story, Del revés, etc... pero también está claramente un escalón por encima de cosas como la saga Cars, El viaje de Arlo, etc...

Como anécdota mencionaré que no recuerdo haber visto llorar más a una sala de cine como en Coco. Toda la gente a mi alrededor estaba a moco tendido, se oían sonarse los mocos por toda la sala, la que estaba a mi izquierda cuando se encendieron las luces tenía toda la cara llena de lágrimas que le rodaban por la mano intentando quitárselas, como si se hubiese derramado una botella de 1 litro de agua. Y a mi parienta también se le saltaron las lágrimas.

195.txt

No hay que pedirle peras al olmo

Vi “Coco” (EEUU, 2017), dirigida por Lee Unkrich [1967-] y Adrián Molina [1985-], quienes a su vez trabajan para Pixar; con guion del propio Molina y Matthew Aldrich. Se narra cómo Miguel, proveniente de una familia de zapateros mexicanos, desea hacerse músico y, por su pasión prohibida por su familia, termina viajando al mundo de los muertos para reivindicar a sus antepasados. La obra,

estéticamente hablando, es de gran calidad. No en vano ha sido muy premiada; por ejemplo, dos Premios Oscar (Mejor largometraje de animación y mejor canción), mejor filme de animación en los Globos de Oro y los Premios BAFTA, once premios Annie, etc. No estamos, pues, ante una cinta menor. Ahora, esta es una comedia familiar, con un clarísimo acento comercial. Justo, para lograr sus fines, es que la trama de vuelve emotiva (en algunos momentos un melodrama sentimentaloides) que aplaude la identidad cultural por medio de temas muy mesoamericanos como la íntima conexión entre la muerte y la familia, el pasado y el futuro. El filme usa, para este fin, de personajes que inspiran ternura y, en varias escenas, comicidad. Pero para que encajen bien con el propósito, parte de personajes superficiales, poco complejos en sus caracteres. Por iguales motivos, no hay mayor drama, de forma tal que la historia es predecible (salvo ciertos giros interesantes en la historia, VER SPOILER) y algo cursi. Pero repito, hay que saber ante qué estamos para saber qué le pido. Eso sí, hay que ver de todo un poco, para afinar los gustos, de un lado, y para extraer enseñanzas, del otro. Igualmente, para no caer en la monotonía de estar siempre detrás de lo que ya se sabe que apasiona. Por eso acepté el reto de ver “Coco” y saco cosas interesantes. Me entretuve y valoré sus cualidades técnicas. Finalmente, interesante la invitación que se hace a seguir la propia vocación (idea que se ha fortalecido en la cultura millennial), de un lado, y los aplausos que se le termina haciendo a la diversidad cultural, en este caso, al reivindicar los valores mesoamericanos (especialmente mexicanos) en un mundo globalizado, del otro. 2018-04-17.

196.txt

Entretenida y educativa

Muy buena producción de Pixar, una de sus mejores. Habla sobre temas poco comunes en las películas infantiles y lo hace con mucho acierto y sensibilidad.

Es una película educativa además de entretenida, ya que ofrece una visión amable y sencilla de temas espinosos como la muerte, como la enfermedad, la vejez o el más allá.

El guión de Coco está bien construido y ofrece numerosas sorpresas, además de un final increíble. Los personajes, no obstante, son bastante arquetípicos.

Visualmente magnífica.

197.txt

Lo que importa es la familia

Entretenida película de dibujos animados que no tiene que desmerecer a ningún film convencional. La historia nos adentra en tres temas centrales: los antepasados, la familia y la música. También nos aporta una lectura bonita del más allá y del más acá. Recomendable para ver en familia y disfrutar del "México lindo"

198.txt

MARAVILLA VISUAL

Una vez mas los estudios PIXAR, han conseguido manufacturar una autentica joya del séptimo arte. Codirigida al alimón por uno de sus mas perfectos artesanos LEE UNKRICH, y por ADRIAN MOLINA, esta inmersión en la cultura latina, concretamente mexicana, de la compañía del flexo, le ha salido redonda, una pequeña joya no ya de la animación sino del cine en general, uno a los 5 minutos de empezar a verla ya se ha olvidado que lo que tiene delante no son personajes de carne y hueso.

Destacar como están diseñados todos y cada uno de los personajes, con un ingenio que los hace parecer actores reales, el caso de MIGUEL, el protagonista dotado de un carisma y lleva todo el peso de la historia de manera apabullante, la bisabuela COCO esta tan bellamente trabajada y esta tan bien diseñado su personaje que te deja con la boca abierta.

Que curioso que en estos momentos de la era TRUMP, con todas las dificultades y problemas que tiene la comunidad latina en aquel país, se desarrolla una historia sobre mexicanos, con todas sus costumbres y tradiciones tan arraigadas allí como el día de los muertos, haciéndonos querer saber mas sobre como viven allí ese día tan especial que revisten un poco mas de manera festiva y de celebración de la vida que en otros países como el nuestro, aceptando que la muerte forma parte intrínseca de la vida.

Precisamente era este un tema tan arriesgado para tratar en una película destinada al público infantil, pero la muerte es tratada de una manera tan bonita y sutil que uno no puede evitar emocionarse, es realmente alucinante y asombroso como los muertos y no muertos se parecen tanto en su caracterización y como logran emocionarnos y ponernos los sentimientos a flor de piel porque evocan a historias de todo el mundo.

A destacar el colorido de la cinta, que es una paleta de colores que te deja alucinado y los temas musicales metidos de manera justa pero logran transmitir lo que se pretendía y en el momento adecuado.

Genial el personaje de ERNESTO DE LA CRUZ, gran ídolo a seguir para el personaje de MIGUEL, y como va evolucionando en la historia y el giro que se produce, que para nada se ve venir.

En definitiva PIXAR ha vuelto a conseguir emocionarnos, este COCO, será recordado con el paso de los años y estará a la altura de otras grandes joyas como TOY STORY, LOS INCREIBLES, UP o WALL-E, absolutamente recomendable para grandes y pequeños, no se la pierdan y en la parte final saquen a pasear pañuelos y lágrimas de emoción.

199.txt

Coco Cultura

Terminando de ver “Coco” (2017) de Lee Unkrich con Anthony González, Marco Antonio Solís, Gael García Bernal, Renée Victor, Ofelia Medina, Sofía Espinosa, Ana Ofelia Murguía, Jaime Camil, Edward James Olmos, Alanna Ubach, Alfonso Arau, entre otros. Película de animación generada por computadora, en 3D, distribuida por Walt Disney Pictures, y primer filme musical de Pixar, cuya trama está inspirada en la fiesta mexicana del “Día de Muertos”, siendo la película más vista en la historia cinematográfica de México, que toca temas sensibles como la muerte, el recuerdo de los seres queridos, el abandono familiar, el Alzheimer, etc. iniciando, nos pone en locación, donde podemos ver el logotipo de Disney con el cementerio de Santa Cecilia al fondo, y la conocida música del estudio suena con estilo mexicano de mariachis; ese detalle, aunque puede sonar mínimo, marcará todo el filme lleno de características y elementos propios de México, por lo que se requiere de mucho conocimiento para poder sacarle provecho. La historia gira alrededor de un niño que pertenece a una familia de zapateros, en la que la música está prohibida, pues su bisabuelo abandonó

a su mujer para seguir su sueño de ser músico. Pero siguiendo su sueño de tocar la guitarra, e inspirado por su cantante favorito de todos los tiempos, en la mañana del Día de Muertos, el niño se verá envuelto en una fantástica aventura junto a su perro Dante, una referencia a Dante Alighieri, el poeta italiano y autor de “La Divina Comedia”, que describe el viaje de Dante a través del reino de los muertos; pero en México, Dante es un perro que pertenece a la raza Xoloitzcuintle, 100% mexicana, considerado un símbolo de la muerte, pues representa al dios del inframundo Xólotl; de hecho, estos canes no tienen pelo, y fueron declarados Patrimonio de La Ciudad de México en 2016. Así, el niño y el perro, entrarán al Mundo de Los Muertos, donde conocerá a sus antepasados, además de a un espíritu amigo llamado Héctor... Con la festividad del Día de Muertos como telón de fondo, Coco nos trasladará a este mundo colorido y musical, que es una celebración de la vida, de la familia, los recuerdos y la conexión a través de diversas generaciones. Llama poderosamente la atención, que el protagonista no lleva el nombre titular del filme, sino la bisabuela, Mama Coco, que es un papel de reparto; como dato, en el folklore mexicano, “Coco” se refiere a un fantasma que proviene de la tierra de los muertos. Otro dato interesante, es que esta es la primera película de Pixar en mostrar la muerte en pantalla, de un personaje importante, en este caso, cuando Ernesto muere aplastado por la campana que cae; ya que todas las demás muertes en las películas de Pixar, han estado un poco fuera de la pantalla. También llama la atención que aquí como no hay interés amoroso, no hay “chica a la cual salvar”, y el villano de turno, no resulta amenazante.

SIGO EN LA ZONA DE SPOILER POR FALTA DE ESPACIO

200.txt

La vida de tus muertos.

La cultura y tradiciones mejicanas inspiran Coco. La particular forma de concebir la familia tanto viva como en mejor vida que tienen en México da pie a una historia de superación, de perseguir los sueños incluso más allá de la vida, de sentirse parte de una familia y de una tradición, y de como todo esto marca a las personas y contra lo que no siempre es posible escapar.

Más allá de lo que aporta la cultura mejicana, que por otra parte hemos visto hace poco en 'El libro de la vida' la película no es más que el resultado de la aplicación de fórmulas que ya hemos visto en otras películas de pixar, pero sin llegar a los niveles de brillantez que en otras ocasiones. No es

epatante en lo visual y tampoco lo es en lo argumental, funciona en los momentos emotivos y en algún momento humorístico, pero no va más allá. Se puede catalogar en la serie B del género. Primera división pero mitad de la tabla.

201.txt

Muchos colorines, pero...

Antes de nada, hay que reconocer que tras ver las últimas producciones de la Pixar/Disney (esto es, la Disney es ya desde hace años la propietaria de Pixar, hace, decide, deshace y orienta sus productos según sus propios intereses ideológicos y/o comerciales...) estaba un poco desesperanzado al ir a ver una película, que al igual que sucedía con Vaiana, Leelo & Stitch o Frozen, intentaban explicarte -y que empatizaras con ello- con una cultura que en nada tiene que ver con la mía propia, y que sobre el papel no me interesa que me la metan con calzador -ni Hawai, ni los países nórdicos, ni -como en este caso- la cultura mexicana-. Eso de "adoctrinar" al espectador me parece como poco pretencioso; ya si tengo ganas de culturizarme lo haré por mi cuenta, no hace falta que me cuelen toda la cultura de un determinado lugar...

Disney ya hizo precisamente eso en otro producto fallido hace años, porque en "Los Tres Caballeros", se intentó congregar la cultura norteamericana (en la figura del pato Donald) con la brasileña (el loro José Carioca) y, también en este caso, la mejicana (con el gallo Panchito). El experimento, como era de esperar, no tuvo el éxito esperado, al mezclar la animación convencional con figuras reales y sobre todo, por no tener ni puñetera idea de las culturas que se pretendían vender. En el caso de "Coco", hay un director de arte norteamericano de origen mejicano, que se ha reciclado no solo en guionista, sino también en codirector.

Y vale, toda la tradición del día de los muertos y de toda la cultura en general en Méjico es muy colorista y fascinante... pero per se, no me llama especialmente la atención, como tampoco lo hace Halloween (la versión USA de este día); sencillamente no me hace gracia ninguna ironizar ni frivolizar con el más allá, ni con los muertos. Con este planteamiento, la película es de lo más reaccionaria, volviendo a poner en valor la familia por encima de todo, tal y como hacían las

películas más clásicas de Disney. Por cierto, que de la misma estúpida manera que lo hace el insoportable cortometraje "La aventura helada de Olaf", que con 21 minutos de duración nos cuelan cuatro canciones que a nadie le interesan. Ni siquiera a los niños que estaban llenando la sala cuando vi la película. Y de los padres ya ni hablamos, bostezo generalizado -entre ellos, yo-.

El caso es que "Coco" (por cierto, que me parece surrealista que la película se llame como la bisabuela del protagonista, un niño que quiere dedicarse a cantar y que adora a un mítico mariachi, mientras su familia -que se dedica a hacer zapatos- odia todo tipo de representación de la música...) intenta tocar todas las teclas para crear un producto de lo más vendible en todos los aspectos, con la intención de contentar a todo tipo de público, desde los más pequeñines (con personajes divertidos como el perro callejero Dante) hasta los más adultos (con la abuela, la bisabuela y toda la saga familiar que intenta que el niño protagonista, Miguel, no cante...). El problema es que todo está trazado de manera muy gruesa, muy obvia. Se ven las intenciones y los trucos desde lejos.

Y en su favor hay que decir que a pesar de todo eso, las imágenes son un prodigio de la animación, con momentos muy espectaculares y un diseño artístico deslumbrante (aunque, insisto, no soy demasiado entusiasta de esta estética chillona de calaveras) y que la última media hora es verdaderamente conmovedora -da igual que todo sea muy explícito, el caso es que te pega el pellizco en el corazón y todo el mundo se pone a llorar a moco tendido-. No obstante, todos esos recursos de guión, aunque toscos y algo torpones -e incluso torpones y fortuitos, sin pocas explicaciones...-, terminan por darte en el corazoncito. Entre otras cosas, porque están diseñados precisamente para eso, y al final terminas conmoviéndote si o si.

Lo que está claro es que Disney ya tiene bien preparada -y ajustada- toda la maquinaria del merchandising para ponerse las botas con su nueva película de las Navidades: este enorme y fastuoso anuncio de muñequitos, de atracciones en los parques temáticos y de canciones pegadizas -por supuesto, de origen mejicano- dará sus frutos a tenor del gran éxito comercial que está teniendo en las salas -aunque con una campaña de marketing de estas características ¿quién no lo tendría?-. Reconozco que tiene momentos bien narrados, otros muy emocionantes y que es muy bonita, pero... el proceso de infantilización de Pixar por parte de Disney es total. Y ya no espero nada de sus

películas, ya que están orientadas casi exclusivamente al público general sin perturbar mucho las más clásicas ideas preconcebidas de lo que tiene que ser una familia y sus valores de toda la vida.

202.txt

Una burda copia de El Libro de la vida"

Después de ver la película veo que es una copia prácticamente de la película del director Jorge Gutiérrez me sorprende que Pixar vaya de original cuando es una copia de esta gran película que es el libro de la vida donde se han copiado hasta prácticamente los Personajes lo único que han cambiado han sido sus nombres y me parece más maravillosa la película del libro de la vida que Coco, quizás sea porque me ha exacerbadado que sea una copia de El libro de la vida

203.txt

Coco: explosión de color

¿Qué le está pasando a Pixar? Eso es lo que nos preguntamos los que admiramos al estudio de animación, al que nos ha regalado tantos filmes inolvidables y unas cuantas obras maestras. El primer signo preocupante fue ser comprada por Disney y el segundo y fundamental, cuando en su organización de nuevos títulos para los siguientes años solo aparecían continuaciones o precuelas y casi ninguna producción original. Eso fue lo que disparó todas las alarmas y lo que hacía temer por una sequía creativa.

La casa del flexo no levanta cabeza desde que firmara esa maravilla que es Del revés, y por eso había tanta expectación por el estreno de Coco. Pero algo no va bien desde el principio. Empezando por el soporífero e interminable corto de Olaf, el muñeco de nieve mágico de Frozen, que precede al filme. ¿Dónde están esos sorprendentes cortos llenos de imaginación y sentido del humor a los que estábamos acostumbrados? En su lugar, encontramos una historia tan cursi y empalagosa como poco interesante.

Y es un alivio que por fin comience la proyección de Coco, un intento por acercarse a las tradiciones de México, especialmente del Día de Muertos. El argumento gira en torno a Miguel, un niño que sueña con ser artista, y que termina rebelándose ante la prohibición de su familia ante cualquier cuestión relacionada con la música. Cosas del destino, por error acabará entrando en el mundo de los muertos, donde debe encontrar la bendición de alguno de sus ancestros para retornar al mundo de los vivos.

Lo más destacable de Coco es sin lugar a dudas la fantástica factura visual. Entrar en el mundo de los muertos ha permitido a los animadores dar rienda suelta a toda su creatividad, imaginando todo un mundo poblado por esqueletos y catrinas, repleto de color y seres fantásticos. Como siempre, la maestría técnica es apabullante; el problema es que tanto el tono como la historia no acompañan a tal despliegue visual.

El principal problema es que esta Coco es mucho más infantil que la mayoría de producciones de Pixar, pero, sobre todo, esa obsesión (tan americana y tan de Disney) de exaltar a la familia sobre todas las cosas. Y, reconozcámoslo, la primera parte hasta se hace pesada y un poco aburrida. No será hasta la segunda parte que el filme por fin empiece a resultar interesante y entretenido.

En el fondo, hubiera sido mucho más apropiado que esta producción estuviera firmada por Disney, ya que carece de todas las señas de identidad que definen y han hecho grande al estudio del flexo.

Lo mejor: el puente de pétalos, un claro ejemplo de la impresionante calidad técnica y creativa de Pixar.

Lo peor: la infección de los valores Disney.

<http://www.bollacos.com/coco-explosion-de-color/>

204.txt

Digamos que esperaba muchísimo más. La película está bien, como siempre nos enseña algo sobre la vida, motivación para cumplir tus sueños, en esta en particular aprendemos algo sobre cultura mexicana y un canto a los muertos y a cómo vivir tus sueños en vida. El problema es que este tipo de historias al final son todas iguales. Ponle otra ciudad u otro país, otra música, lo que sea, pero el guion siempre es el mismo. La música es fabulosa, todo hay que decirlo, pero en general este tipo de cintas siempre la tiene. La animación también es maravillosa, pero sigo pensando igual. No creo que valga tanto como se dice en las críticas profesionales, ni que sea tan increíble como piensa todo el mundo. Es normal. Una peli que te enseña unos valores, que te da una lección, con unos colores impresionantes, bien hecha, pero con un guion del montón, incluso flojillo. La verdad es que tengo muchas ganas de ver la original de México "Día de los muertos" que ha sido opacada por la publicidad de "Coco".

205.txt

Crítica de "Coco"

Coco es una película de animación que nos habla del día de los muertos en México, la música y sobretodo la cultura de allí, algo que nunca ha hecho ni Disney, ni Pixar y ha quedado un resultado bueno, con una historia muy tierna y un contexto que pocos niños van a entender, no es mi película favorita ni la mejor de pixar, pero me ha marcado mucho la historia y no me esperaba para nada el final que tiene, pero me esperaba algo más, no sé porque, pero me esperaba algo más. En resumen: es diferente a todo lo que hemos visto, con unos personajes y una historia muy entrañable.

<https://juantfilms.wordpress.com/2018/02/18/coco/>

206.txt

Coco- Zapatero a tus acordes

Durante mi breve existencia he dedicado años de mi tierna infancia a disfrutar y admirar el trabajo de Pixar, junto con Studio Ghibli los mejores estudios de animación que, probablemente, hayan existido jamás. Han gestado algunas de las grandes obras de los 2000 (Buscando a Nemo o WALL-

E), pero también creo que desde su Toy Story 3 de 2010 están en horas bajas, y tiempo ha que no estrenan una gran película. Y si, con ella incluyo a la muy correcta pero sobrevaloradísima Inside Out, que queda lejos de las grandes obras de la casa. Por todo esto, y también por mi progresivo abandono de la infancia y adolescencia, he perdido marcadamente el interés en sus próximas proyectos, empezando con su plato fuerte para estas navidades: Coco, ambientada en el rico mundo de la cultura tradicional mexicana. Tan poco interés me despertó que la degusté en cines más de dos meses después de su estreno, en calidad de descarte semanal a la espera de la llegada de los anfibios Del Torianos. Igualmente, siempre cabía esperar una buena factura, y las buenas críticas recibidas eran signo suficiente para estimar que bien merecería un visionado. Y aún sin ser, ni mucho menos una película, el resultado no estuvo a la altura de las ya de por sí medianas expectativas. Como película para público infantil y ver padres e hijos en comunión, es válida, en tanto cine de animación es más que correcta. En tanto película en general es cine blando, de narrativa acomodada, que se halla a años luz de la reputación del nombre de Pixar. Un desperdicio de atractiva iconografía en estereotipos y manidas plantillas de guión.

207.txt

SOBREVALORADA

De verdad que no puedo con la sobrevalorada que está. De hecho, la he visto dos veces porque la primera la vi un poco con prejuicios y además se me hizo bastante aburrida, por lo que me animé a darle una segunda oportunidad para ver si mi opinión cambiaba. Después de esto, sigo pensando exactamente lo mismo. Es una buena idea que da para lo que da porque la factoría Disney no entiende de riesgo. Vemos una película con el mismo esquema de Pixar con la simple novedad de que nos presenta un bonito homenaje a la cultura mexicana. El problema es que cuesta seguirla por lo irrisoriamente predecible que llega a ser y porque no sabe salirse de la fórmula que funciona en taquilla. Bastante normalita, a mi juicio. Ganará el Oscar por pura política y porque si o si tienen que premiar a Disney.

PD: El final me parece super básico terminando en The End.

208.txt

Cuando es el contexto social vence a la narración cinematográfica

Una película que genera lazos amistosos al pueblo mexicano de parte de los estadounidenses es totalmente necesaria en la era Trump, sobre todo si está dirigida al público infantil. Igual que un director mexicano ganando el Oscar a la mejor dirección, Coco conquistó la gala y muchos corazones dando a Trump la patada en los huevos que se merece. Es razón suficiente para que la cinta consiga tanto reconocimiento, por no hablar de las maravillas visuales y a nivel de efectos a los que Pixar nos tiene acostumbrados, pero creo que una película con críticas tan positivas tiene que ser algo más, y la película que le arrebató la estatuilla a algo tan novedoso como "Loving Vincent" creo que debería tener algo más que un contexto social como el que se vive, especialmente si hablamos de los premios del cine. En este aspecto, aquello que marcaba diferencia entre Pixar y Disney ya no existe, y la fórmula que le lleva funcionando a Mickey Mouse desde los años 30 se repite de nuevo. Los mismos patrones una y otra vez, olvidándose de la narrativa para dársela a los avances técnicos: La familia tradicional parece ser lo único importante para la factoría, y aunque la historia nos lleva por pasajes imaginativos y momentos de mucha emoción, la línea argumental ya la hemos visto en demasiadas películas infantiles.

209.txt

Colorida pero vulgar

Estética y musicalmente es original y muy bonita, gracias al uso del folklore mejicano. La trama también es original, se agradece que no se trate de un argumento ramplón al uso de otras películas de animación.

Lo que me produce cansancio, mucho cansancio, es que todas las películas de animación tengan protagonistas un poco bizcos, ¿por qué??? Imagino que alguien ha hecho un sesudo estudio según el cual al público eso le entenece, o algo por el estilo, pero a mí me hace verla como "vulgar".

210.txt

Los puentes de pétalos

Los puentes y cómo los pétalos caían me parecieron imágenes alucinantes ,aunque todo es de deslumbrante colorido en esta película. Mucha gente me decía que era muy linda, que había que verla. Y lo hice recientemente. No me arrepiento pero no estoy eufórico. Me gustó la presentación, aunque comenzar un film con un relato requiere de mucha concentración para recordar datos básicos. Me pregunto si toda esa información inicial es absorbida adecuadamente por los niños. Me respondo que no. No creo que muchos entendieran quién era quien, al menos al principio. Tampoco entiendo por qué la ancianidad tuvo que ser mostrada de forma tan grotesca. Coco y también su hija al envejecer se convirtieron en elefantes, arrugado uno, chueco el otro. Sus cabezas crecieron desproporcionadamente y si bien una tenía expresión dulce, la otra ni eso. Y no creo que las mejicanas mayores sean así. Arrugadas, tal vez gorditas como en todas partes pero, ¿por qué pintarlas tan desagradables? En fin, eso me pareció denigrante para el propio sexo femenino de esa población. Y para finalizar discrepo que sea una película disfrutable más allá del colorido y tal vez la música por niños de menos de 10 o 12 años. O tal vez sí, pero no creo equivocarme en que no les será fácil contar más que había un niño que quería cantar y la familia no lo dejaba...

211.txt

Crítica de "Coco"

- Sensacional oda a México y su cultura. Desbordante en lo visual pero lánguida en lo narrativo.
- Un entretenido trabajo de Pixar que se queda a las puertas de ser algo grande.

Pixar vuelve a encender sus motores para traernos su enésima obra maestra tras la impresionante “Inside Out” y la muy decepcionante “Finding Dory”. En esta ocasión la tarea es de Lee Unkrich (“Toy Story 3”) y es sin duda un trabajo complicado. “Coco” es la primera película de Pixar protagonizada por un personaje no anglosajón. Pero además la historia se aleja de sus ambientes populares para llevarnos hacia el México tradicional, y homenajear, bajo un manto de música y color, toda su cultura, su folclore y sus creencias sobre la vida, la muerte, la familia y el poder de las canciones. Pese al riesgo que puede suponer una propuesta de estas cualidades y con temas semejantes, la maquinaria de Pixar no falla cuando se trata de emocionar y divertir al espectador,

especialmente al más pequeño; y de nuevo da forma a un mundo vivo y de un cromatismo alucinante que estimule el viaje hasta llegar a otra conmovedora conclusión. El inconveniente se halla entre la estupenda premisa y el emotivo final, en el entramado narrativo.

Tras una excelente narración inicial de la historia familiar conocemos a Miguel, un joven con el sueño de convertirse en una leyenda de la música al igual que su ídolo, Ernesto de la Cruz. También a su familia de zapateros que desprecia la música desde hace generaciones. La ambición de Miguel le llevará directamente hasta la tierra de los muertos en uno de los días más importantes para el pueblo mexicano, el Día de Muertos. Una vez en esa urbe discotequera pasada de rosca observamos como Pixar libera todo su poderío técnico y su talento artístico, a través de un magnífico nivel de detalle y una paleta cromática que provoca que se nos caiga la mandíbula. No obstante la mayor hazaña visual de la película la encontramos en la bisabuela de Miguel, Mamá Coco, cuyo realismo resulta sobrecogedor. Es evidente que Unkrich y Adrián Molina han llevado a cabo un retrato cariñoso e inspirado de México y sus tradiciones. Un retrato que se mira, se escucha y se siente.

Ahora llega lo problemático. Aunque la cinta está colmada de maravillas visuales, imaginación artística, emociones verdaderas y un honesto homenaje a México; posee una estructura narrativa que es pura y predecible fórmula. Pixar continúa utilizando las mismas tramas, los mismos giros y los mismos engranajes narrativos en todas sus películas. Las consecuencias de esta desidiosa decisión son terribles en “Coco”, contagiando la desgana de sus elementos al espectador. También afectan negativamente el errático ritmo (especialmente en el tramo final), el modo de desaprovechar su colorido inframundo en términos no visuales y el cansancio acumulado del aburrido cortometraje previo: “Olaf’s Frozen Adventure”. Al final no importa demasiado que Pixar haya vuelto a usar las mismas herramientas, el resultado sigue siendo irresistible para el gran público. Algo que queda patente en sus conmovedoras escenas finales, con los espectadores en el bolsillo del famoso estudio de la lámpara saltarina.

“Coco” es un envoltorio magnífico de luces hermosas, amor por el detalle, brillante folclore y equilibrio entre técnica y arte. Sin embargo en el fondo no deja de ser un producto rutinario de una compañía que sabe demasiado bien que botones tocar y cuando hacerlo. Una historia muy familiar que tampoco aprovecha especialmente bien sus arriesgados temas. Necesitamos que Pixar cambie de esqueleto narrativo y que pare ya con los animales idiotas. De lo contrario corre el riesgo de ser olvidada.

212.txt

MEXICO LINDO Y QUERIDO SI MUERO LEJOS DE TI QUE DIGAN QUE ESTOY DORMIDO...

Pasado unos días de haber tenido el placer de haber sido "obligado" a verla por buenos amigos en el DF donde ha sido estrenada(puntazo para Pixar), sobre la película tengo un sin sabor no tanto por la trama(que siendo predecible es mas que aceptable) o por los personajes que no llegan a cuajar del todo, sentado escribiendo esta crítica busco tararear alguna canción de este film y no se me viene ninguna a la mente POR QUE? la respuesta obvia porque no tiene ninguna que merezca ser recordada, y ese para mi es su gran fallo, si bien la película es un aceptable homenaje a la cultura popular mexicana, la trama gira sobre el deseo de un niño por ser músico y México tierra de Mariachis y de cantantes/cantautores populares tan grandes como Pedro Infante, Jorge Negrete, Chavela Vargas, José Alfredo Jiménez etc etc, tiene en este film un repertorio musical francamente malísimo por eso la calificación que le he puesto 5(Pasable) porque no siendo mala se queda en el camino muy pero muy lejos de clásicos como El rey León con una banda sonora inolvidable, Wall-E , UP(especialmente sus primeros inolvidables 5 minutos) aunque si mas cercano a films como La novia del cadáver o Pesadilla antes de Navidad que incluso en este aspecto (musical) son mejores que Coco.

213.txt

ES IGUAL, AUNQUE NO ES LO MISMO...

Desde hace muchas décadas el cine se ha reinventado una y otra vez, porque todo ya se ha filmado antes, con mayor o menor éxito.

COCO, resulta un trabajo construido con acierto, por la fábrica de John Lasseter. Aquí se han repetido fórmulas que se sabe, funcionan bien y cambiando cuatro cosillas nos entregan una novedad, a mi entender, con un esquema ya visto con anterioridad.

Visualmente brillante, estéticamente hermosa, y delicadamente adecuada al público al que va dirigida. Estoy seguro que ellos la disfrutarán...

214.txt

NO HAY TRAMA

Hoy era el último día que iba a estar la peli disponible en cines de mi ciudad, y al ver a ferdinand y veía comentarios que decían: esto no es coco pero es pasable.

A mí ferdinand me encantó, lloré como una niña en gran parte de la película, sin embargo con coco me he agobiado mucho.

La historia y la trama me han parecido simplonas, es normal porque es una peli dirigida para niños y por ese lado tampoco voy a añadir mucho. Disney hace siempre de lo mismo, hasta lo imprevisible es previsible, me he agobiado muchísimo con las últimas escenas de drama con el cantante, el malo malísimo, todo eso era superinnecesario para mí, llegó un punto en el que solo quería ver la peli, la única que me ha emocionado a sido la abuela, Coco, y mira que yo soy muy cursi y de llorar, pero me daba la sensación de que al pretender enternecer perdía ternura.

Por todos los efectos y los colores y el mundo de los vivos le doy esta nota. Pero nada más. Visualmente lo he disfrutado mucho.

215.txt

Exposición y adoctrinamiento familiar.

Todos los puntos positivos de la película se lo llevan su excelente e intachable animación y dos escenas musicales de una intimidad y emotividad inusual en este tipo de películas. Pero a partir de ahí todo se reduce a una trama expuesta a viva voz por los propios personajes, los cuales explican al espectador todas y cada una de las cosas que van a pasar o han pasado, unos personajes maniqueos que no aportan absolutamente nada a la historia del cine y una nada disimulada tendencia al

adoctrinamiento familiar (y también religioso, aunque se puede entender que es así por necesidades del guión). Lejos queda Toy Story 3, el principio de UP o la primera mitad de Wall-E, aquí las emociones se describen en los diálogos, el protagonista se pasa toda la película actualizándonos cómo se siente, "estoy triste", "quiero ser músico", "me siento traicionado", etc... y resulta muy molesto el empeño de la película en remarcarte que "lo más importante es la familia", una frase sacada literalmente de la película que no dicen menos de 5 veces. Esperaba mucho más de una cinta tan premiada y alabada por tantos.

216.txt

El viaje del héroe cliché aderezado con cultura mexicana

No nos engañemos gente está película ya la vimos un millón de veces héroe que va a lo desconocido viaje fantástico en donde atravesamos y descubrimos cosas fantásticas y demás

Ahora rematado con la cultura mexicana que Pixar quiso patentar como suya solo quieren taquilla y nos dan esta versión mexicana ligth aderezada de abuela con chancla pobreza todos morenos mariachis y ya

El ritmo narrativo empieza lento y termina sentimentaloides efectista a mi gusto puede que a alguien le aga derramar una lágrima

Véanla descargada no incitemos a que se sigan produciendo esta clase de cine

217.txt

AMERICANADA Y NEGOCIO NO VAN DE LA MANO....

Viene la Navidad y hay que hacer una nueva película infantil para que los padres lleven al cine a sus hijos. Es una pena que la enorme maquinaria y producción de la empresa PIXAR se pongan a funcionar sobre un guión lleno de ideas preconcebidas y carente de originalidad. No soy mejicano, pero la película nos muestra una visión romántica de México y su cultura, donde todos los mejicanos

son mariachis y no paran de decir Ahí maniiiiitoooo!!! Es decir, es una AMERICANADA llena de CLICHÉS, al nivel de la Semana Santa mezclada con Fallas que vimos en una película de Tom Cruise. Esta falta de inteligencia se suma a guión donde la búsqueda de emocionar queda por encima de una historia divertida o entretenida, CREANDO SITUACIONES FORZADAS, INCONEXAS e intentando emocionar con la banda sonora. Como resultado una increíble obra visual, ñoña y a veces sin sentido que no es suficiente para divertir, ni entretener y apenas emociona. Los niños se aburrirán pero gracias a la publicidad y a las fechas los padres ya se habrán gastado el dinero.

218.txt

Ni fu ni fa

Mi hija de nueve años se quedó dormida. Ese es el resumen. El chavalín protagonista está muy logrado y es muy mono, pero ahí termina todo. La película es bastante aburrida. No hay nada que merezca la pena. Ni la música, ni la historia, ni los números de humor. Todo muy vulgar y sin interés.

219.txt

¿Y POR QUÉ NO UN UNICORNIO, O UNA GUITARRA VOLADORA?

Tenía muchas dudas antes de entrar a ver "Coco", porque con el paso de los años, uno intuye cada vez mejor qué películas le pueden interesar más o menos a pesar de la crítica y/o éxito comercial que estas posean. Y yo temía, y mucho, que "Coco" podía decepcionarme. No me equivocaba... Y eso, a pesar de que durante los primeros quince minutos pensé con regocijo que sí, que me había equivocado, y que estaba ante esa nueva gran obra de Pixar equiparable a "Ratatouille" o "Wall-e". Nada más lejos...

El primer cuarto de hora es a mi entender brillante. La animación destaca por su detalle realista, que describe humildes pero encantadoras calles mexicanas. El conflicto que se plantea, aunque algo manido, está muy bien presentado. Empatizas con el niño protagonista, pero a su vez entiendes la posición de sus familiares. Y sobre todo, se generan grandes expectativas en torno a esa figura misteriosa sin rostro del gran músico que no aparece en la foto familiar.

Pero después, todo esto se dispersa entre la nata de un MERENGUE melodramático. Pixar entra en el terreno del TODOVALISMO, la COINCIDENCIA continua, y la SORPRESA como única herramienta para hacer avanzar la historia, en detrimento del SUSPENSE, una herramienta a mi entender mucho más emocionante y efectiva que dicha sorpresa. Y durante el 70% de la película, sólo se nos muestra peripecia, peripecia y peripecia, sin que el arco de los personajes o el sentido de la trama se desarrollen. Sigo en el spoiler.

220.txt

Reseña de Coco (2017)

Esta película llega a ser el décimo noveno de Pixar y segunda de lo que va del año.

Sinceramente no tengo muchas cosas buenas que decir a base de su flojo y poco desarrollado argumento. Es la historia que hemos visto centenares de veces, en más, vi una película llamada "Rock Dog" este mismo año y no puedo dejar de ver las similitudes con Coco.

Esta nueva película es sobre Miguel, un niño que su sueño es llegar a ser un gran músico como su ídolo Ernesto De La Cruz. Pero su familia no quiere a ningún músico debido a un problema personal y optan por que Miguel sea zapatero como toda su familia. ¿Por qué su comparación con "Rock Dog"? Porque trata de un perro tibetano que quiere llegar a ser un gran músico como su ídolo pero tiene la desaprobación de su padre por no seguir la tradición de ser un guardian.

Volviendo a Coco, no solo su narrativa es predecible, sus chistes llegan a ser hasta vergonzosamente "meméticos" y sin gracia porque uno ya los conoce. Sus personajes son clichés en sentido a como se lo ve al México estereotipado. No hay absolutamente nada que te sorprenda, quizá solo algunas escenas que te conmovieran porque eso es algo humano y más si se trata sobre la unidad de la familia y llegar a tus metas.

Lo más positivo de este filme animado es sobre su animación y sus escenarios, específicamente cuando Miguel pasa al mundo de los muertos dónde lo habitan esqueletos, bien diseñados artísticamente. Los detalles de dicha ciudad es bellísimo y llena de color. Un gran grupo técnico es lo que hay detrás de estos trabajos.

En resumen, no sentí que la película fuese de Pixar sino una de esas producciones europeas (Robinson Crusoe, Sahara, etc) que mucho no destacan, referido a la escritura. De todos modos, esto solo llega a ser un filme familiar para todas las edades y solo allí se queda.

221.txt

La misma historia de siempre

No entiendo cómo esta película puede tener un 8.1 de media. Vale que está llena de colorido, que han basado la historia en las costumbres exóticas mexicanas, pero la historia no aporta nada nuevo. Preadolescente que emprende una búsqueda personal y es ayudado por un adulto que le guía en el camino, hasta conseguir su meta, enfrentándose a varios peligros e incluso siendo perseguido/atacado durante su búsqueda. No me digáis que el guión es original, porque es de los más usados en el cine, y especialmente en el cine infantil. Varios 'Toy Story', 'IA', varios 'Karate Kid',... la lista sería interminable.

A mí personalmente me ha aburrido por momentos. Sabía de su notaza, y esperaba algo más novedoso. Eso sí, para los niños es una peli estupenda.